

---

# **新生連合艦隊**

天嶽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新生連合艦隊

### 【著者名】

天嶽

### 【あらすじ】

2024年4月1日、大日本帝国海軍の血を引く日本国海上自衛隊は、中国人民解放軍海軍の巡航ミサイルによつて壊滅した、その後日本は連合艦隊の再建を世界に宣言し、陸自、海自、空自を陸軍、海軍、空軍と改名し、憲法第9条も破棄し、軍備を増強した、だが日本には、まだやらねばならないことがあった、日本をあの悲惨な敗戦から守るために…。

## 主要人物紹介

天嶽

「さて、今回は、まだやつていなかつた、（今頃…？）主要人物紹介です！」

翔平

「今頃かよ作者？！」

天嶽

「そうだ今頃だ…！」

啓太

「わあ、開き直ちゃつたよ…まあいいけどな」

天嶽

「ちょうど夏休みも近いしな」

播磨

「関係あるの？」

天嶽

「ない！では行くぞ」

啓太

「ほい」

主要登場人物

林 翔平  
はやし しょうへい

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊司令長官

階級 大将

出身地 神奈川県横須賀市

身長 172cm

体重 53kg

年齢 24歳

誕生日 8月31日

趣味 ジェットスキー

好きなもの 海 艦船

嫌いなもの 机仕事

我らが主人公（多分）、沖縄沖で艦隊が全滅したため、日本国海軍の連合艦隊司令長官に就任、その後、神々に力によりタイムスリップしたため、現在は、大日本帝国第一連合艦隊司令長官を務めている、大の机仕事嫌いで何時も長官執務室を抜け出して、参謀の葵を困らせている、ちなみに、少年時代は、かなりのやんちゃ坊主で、夜中によく家を向げだしては、港に遊びに行っていた、記念館三笠にも侵入したことがあり、そのとき、初めて艦魂を見た。

啓太

「翔ちゃんこなことしてたんか・・・」

翔平

「いや〜、懐かしいな・・・こじだけの話、アメリカ海軍基地にも入つたことがあるぞ」

播磨

「え？」

天嶽

「ま、それは置いといて次！」

栗須  
くりす  
啓太  
けいた

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊參謀

階級 中將

出身地 兵庫県神戸市

身長 168cm

体重 50kg

年齢 24歳

誕生日 9月17日

趣味 ゆっくりと小説を読むこと

好きなもの 肉料理 小説（ミステリー、サスペンス以外） 平穏

な毎日

嫌いなもの 野菜（特に茄子） 過剰な運動 面倒事

真面目にしなければならないときは真面目にしようと/or、出来ているかどうかは別として（翔平に会つてからは、しようとしない）

夢は、定年後、平和にまたがりボケ~っと毎日を過ごすこと

播磨

「ある意味夢がないといつか・・・」

天嶽

「次！」

清水 葵

しみず あおい

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊參謀

階級 中將

出身地

身長 159 Cm

体重 42kg

年齢 26歳

誕生日 1月10日

趣味 料理

好きなもの 家族  
嫌いなもの 特になし

生真面目な性格のため翔平や啓太に振り回される苦労人  
最近の悩みは、上司が机仕事を嫌つて抜け出してしまうこと

十六夜

「苦労してますね、葵・・・」

播磨

「胃薬飲む?」

葵

「ありがと・・・」

天嶽

「次!」

林 武

役職 大日本帝国海軍技術士官 林重工株式会社社長兼設計主任

はやし たけし

階級 中将

出身地 神奈川県横浜市

身長 170cm

体重 53kg

年齢 48歳

趣味 船や海を眺めること

誕生日 8月8日

好きなもの 船 妻

嫌いなもの 早口で喋る人

主人公の父親、会社の利益の90%をつき込んで、第一連合艦隊の艦艇を作りだした、本人、何故造り出したかというと。ある日、階段から滑つて落ちた時に、造れとお告げが来た感じがしたそうだ、最近の悩みは、腰痛

翔平

「そんな適当な理由で作ったのかよ」

武

「そりだ、日本を守るためにならな

天嶽

「次！」

堀井 弘明

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊參謀

階級 中將

出身地 京都県舞鶴市

身長 169cm

体重 51kg

年齢 24歳

誕生日 3月15日

趣味 映画鑑賞

好きなもの ほのぼのした雰囲気の映画や小説  
嫌いなもの ホラー物の映画や小説

真面目でいい人なので、いじられやすい

葵に次ぐ苦労人

山口 昇

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊航空母艦鳳翔制空隊隊長

階級 中佐

出身地 千葉県木更津市

身長 190cm

体重 68kg

年齢 22歳

誕生日 6月6日

趣味 野良の犬や猫に餌をあげること

好きなもの 動物

嫌いなもの 爬虫類

寡黙で体が大きいので恐がられやすいが実はすごく優しい人  
哲也のストッパー・・・だが時々一緒に暴走する・・・

木ノ本 哲也

役職 大日本帝国海軍第一連合艦隊航空母艦鳳翔制空隊

階級 少佐

出身地 北海道札幌市

身長 174cm

体重  
55kg

年齢  
20歳

誕生日 10月13日

## 趣味 人をからかうこと

好きなもの  
かづ井

嬉しいもの、この事は長留體集日向にこと

テンションの高いムードメーカー  
よく暴走するのでストップバーが必要

天嶺  
「さて、これで主要的な人物は一応全員です・・・また増やすかも  
すれませんが」

播磨

天嶽

「へ！？・・・あつ！・・・また次回！」

艦魂達

『忘れてたのか！－馬鹿作者！－』

ズツドオオオオオオオオ～～～～ン

翔平

啓太

「『意見・『感想』」

艦魂達

「お待ちしています！」

## プロローグ

20XX年4月1日、大日本帝国海軍の血を引く日本国海上自衛隊は、中国人民解放軍海軍の巡航ミサイルによつて壊滅した、日本国民は、壊滅した日が、4月1日だつたため、初めに聞いたときは、悪い冗談だと思っていた、だが翌日になつても、まだ報道されているので真実だと悟つた、このニュースは、世界中で報道された。

4月4日海上自衛隊呉基地、ここに、一隻の護衛艦が入港した、艦名は「こんじう」今現在、日本に残された唯一のイージス艦であった、こんじうの艦首には、一人の少女が立つていた。

4月1日海上自衛隊は、米海軍との演習のため、南西諸島に向かつていた、米海軍といつたん沖縄で合流するためだ、沖縄まであと100海里その時だつた、潜水艦から巡航ミサイルが一発発射された、そのミサイルは、艦隊の中央で炸裂、ここに壊滅した、なぜ、こんじうが無事なのか、それは、機関の不具合が発生し呉に向かつていたからだ。

「どうしたんだ、こんじう？」

と陽気に声をかけるのは、こんじう艦長の林 翔平一佐この艦で、艦魂が見える唯一の人間だ

「どうしたつて、仲間が大勢死んでしまつたのに、よくそんなに能天氣でいられるわね」

きつめに答えるのは、護衛艦「こんじう」艦魂こんじうであった、

「すいませんちょっと励まそつと思つてな」

こんじう

「まあいいわ…はあーこれからどうなるんだろう」

翔平

(なんか軽くスルーされた)

こんじう

「ねえ聞いているのが翔平」

翔平「えつ何の話だつけ」

こんじつ

「人の話はちやんと聞いて」

翔平

「はい」

こんじう

「これがどうなるんだろう、とこつ話よ」

翔平

「それは、作者に聞かないと」

え、つ俺

こんじつ

「口うきなり作者お引っ越し張り出せない」

そうだそうだ俺なんか気にせず話を進めり

翔平

「ハイわかりましたー、でもセー、こんじつめずやのせ、艦隊の  
再建だろ」

こんじつ

「いやその話じやなくて中国の話」

翔平

「さーどうなるんだつな」

こんじつ

「知らないの」

翔平

「ああ、まだ混乱していくともな情報が入ってこない」

この一人はまだ自分たちが歴史を変える重要な任務をすることなど夢にもおもはなかつた。

## プロローグ（後書き）

作者「どうも、こんにちは天嶽です、今回は、翔平のプロフィールを紹介したいと思います。

|       |        |
|-------|--------|
| 名前    | 林 翔平   |
| 身長    | 172cm  |
| 体重    | 53kg   |
| 年齢    | 24歳ぐらい |
| 好きなもの | 海      |

|       |         |
|-------|---------|
| 嫌いなもの | 机仕事     |
| 容姿    | 典型的な日本人 |
| 性格    | 正義の味方   |

です。」

ご意見、ご感想お待ちしております。

初めての小説挑戦なんでおろしくお願ひします。

## 第一話 最新鋭イージス戦艦金剛誕生

海上自衛隊壊滅から3ヶ月後、中国人民解放軍海軍は米海軍に敗れ、中華人民共和国は、日本に謝罪した、日本は賠償金を要求し、その賠償金を使い日本は、連合艦隊を再建する計画を立てた。

日本国海軍県基地

翔平

「なんですって！」

翔平が突然大声をあげる

「おいおこそんなに驚かなくてもいいじゃないか」

翔平

「ですがこんじつを解体するって司令、上の連中は何を考えているんですか」

司令

「大丈夫だ、君の乗る艦はあと一か月で完成する」

翔平

「ですが今のこんじつは」

司令

「それも心配するな、そういうえば君は艦魂が見えるやつだね」

翔平

「はい、見えますが」

司令

「こも、こんじょうは、君が乗る艦の隣のドックにいる、それと新造艦の名はイージス戦艦金剛だ、これで君も分るだろ」

翔平

「はつ？ちょっと待つてください司令、今なんと自分の耳がおかしくなかつたらいま戦艦と言いましたよね？」

司令

「ああ確かに言つたぞ」

翔平

「しかも金剛つてまさか司令今のこんじょうの艦魂をその金剛に転移される氣ですか？」

司令

「ああその通りだ、実は昨日こんじょうに会つて話をつけてきた、そろそろ転移するだろ？」

翔平

「こいつそんな話をしたのですか・・・」

ドッカン バリバリ ガラガラ

翔平

「つてなんの音だ！」

ドリリリ ピリリリ ピ ガチャ

司令

「私だが、どうしたんだ」

電話の相手

「司令大変です、ドックに入居していた、こんじうが突然真っ一つに折れてしましました」

司令

「わかつたすぐ行く」

ガチャと司令は電話を切つた

司令

「じゅやら転移に成功したようだ、さあ新しい艦を見に行くか

翔平

「ちよつと待つてください」司令

司令

「なんだ？」

翔平

「いつ戦艦を建造したのですか？」

司令

「ああ、君のお父さんの会社が建造してドックに隠していたそうだ」

翔平

「親父が…」

司令

「それじゃ、艦を見に行こう」

## 日本国海軍某基地秘密ドック

司令

「どうだこれが、日本の誇る最新鋭の艦だ」

司令と林が見るその先には鋼鉄の城があつた

翔平

「でかいなー」

司令

「全長が335m全幅47m基準排水量9万5千トンだ」

翔平

「大和型以上か、よくこんなもんを作ったなー」

司令

「兵装が81式460mm60口径滑空砲が3連装3基、OTOメララ127mm速射砲が2連装8基、20mmファランクスCIWS × 10基、MK57VLS 80セル × 4基、RAM近接対空ミサイル：10連装4基だ」

翔平

「化け物だな」

こんごうを改めて金剛

「誰が化け物なのかしら?」

翔平が振り向くとそこには、引きつった笑みを浮かべた金剛がいた、

翔平

「ひつ…や、やあ金剛久しふつ」

金剛

「毎日あつているでしょ」

翔平

(いかんこじ話の流れを変えねば)

翔平

「金剛どひだつた新しい艦は」

金剛

「広くとどもよかつたわよ」

翔平

「そりやよかつた」(まつよかつた話の流れを変えられたよつだ)

金剛

「ヒーリド…誰が化け物なのかしら?..」

翔平

(全然変えられていない)

金剛

「うふヒーリドちちちオハナシシマシヨ」

翔平

「たすけてー同令たすけてーつていない

金剛

「 わあ いつ間に来なや二 」

翔平

「 ぎやあああああ—— 」

この夜ドックの端っこでくまつていてる翔平が発見されたのは別  
の話。

## 第一話 最新鋭イージス戦艦金剛誕生（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第一話 連合艦隊再建計画

9月17日、吳に一隻の大型空母が入港した、その空母はキティホーク、日本はアメリカと交渉し、この空母を手に入れた、だが手に入れたのは、艦体のみ乗せる航空機は、購入と言つてきた、だが日本に自前の艦載機を作る時間は皆無に等しい、仕方なく日本はキティホークに積む艦載機を購入し、空母乗組員を育成する予定だ。

空母キティホーク飛行甲板

金剛

「キティ久しぶりね」

キティ

「やあ、金剛久しぶり」

金剛

「これからよろしくね」

キティ

「これからよろしくね」

流石は元在日米軍の旗艦、日本語は堪能だ

翔平

「おい、金剛おいでくなよ」

金剛

「ああ、ごめんなーすっかり忘れてた」

翔平

「がーん、俺つてそんなに影が薄いのか、艦長なのに

金剛

「おーい、どこ行こうとしてるんだーもどりとーー」

翔平がふらふらとどこかに行くのを止める金剛

キティ

「ねえ、金剛この人だれ、私たちが見えるみたいね」

金剛

「ああ、あれはこれでも私の艦長よ」

キティ

「へえーそりなんだ」

翔平

「はじめまして、自分が、イージス戦艦金剛艦長林翔平一佐です、  
これからよろしく鳳翔」

金剛

「おい！鳳翔ってなんなの、翔平」

翔平

「なんだー知らなかつたのか、空母キティホークの、新しい艦名だ  
よ」

金剛

「聞いてないぞそんな話」

翔平

「うそ、今はじめで書つた」

金剛

「…ヒートヒートヒート、鳳翔これからようじへね」

鳳翔

「ヘンゼンゼンゼンゼン」

林

「金剛、俺ちよつと司令部に行つてくる」

金剛

「なんで?」

翔平

「司令に呼ばれている」

金剛

「左遷だつた、なぜいる?」

翔平

「そんなことこうなー。」

金剛

「まあ、早く行つたほうがここよ

翔平

「ああ、やうだつたなじやあ行つてくる」

**金剛**

「行つてらつしゃい」

**鳳翔**

「なんか夫婦みたいね」

スツ バタン 滑つてこける金剛

**金剛**

「鳳翔な、な、何を言つてゐるのよ」

**鳳翔**

「そのまま見た感想だ」

**金剛**

「くつまあいいわ」

**鳳翔**

「いいんだ」

**金剛**

「で、これから何をするの」

**鳳翔**

「うへん何をしようか」

「ノンノン

司令

「どうぞ」

翔平

「失礼します」

「待つていただき」

翔平

「親父なんで」「元々」

司令

「私が呼んだ」

翔平

「なぜですか司令」

司令

「今、建造している艦の話を聞くためだ」

親父

「そうだぞ、お前も見ろ」

と父からUSBメモリを渡された

翔平

「司令これですか」

司令

「ああこれだけだが、そういうえば鳳翔は、どうかね」

翔平

「とてもいい艦でした」

司令

「それは、よかったです」

翔平

「これから鳳翔をどうするんですか」

司令

「ドックに入れて改造する」

翔平

「そうですかー」

司令

「もう話は終わりだ帰つていって」

翔平

「はっわかりました[司令」

親父  
「またな」

翔平

「おうまた今度な、でわ失礼しました」

イージス戦艦金剛艦長室

翔平

「なんで金剛と鳳翔がいるんだ」

金剛

「なんでつて見てわからんのか遊んでいるんだよ」

翔平

「そりや見たらわかる、なぜこの部屋で遊んでいるか聞いているんだ」

金剛

「気分よ」

翔平

「はあ～そうですか～」

金剛

「なによその溜息は」

翔平

「気にするな、ちょっと仕事をするから静かにしてくれ」

金剛「わかったわ」

翔平は、パソコンを起動し、USBメモリを差し込み中身を見た、

翔平

「親父、これ本当に作っているのか・・・」

パソコンの画面には、今建造中の艦艇の計画が載っていた。

## 第一話 連合艦隊再建計画（後書き）

作者「どうも、こんにちは天嶽です、今回は、鳳翔のプロフィールを紹介したいと思います。

名前 キティフォーケ **鳳翔**

身長 130cm

体重 に「死にたいのか」・・・

見た目の年齢、10歳くらい

好きなもの 日本の景色、囲碁

嫌いなもの 朝

容姿 金髪の足首あたりまで伸びたロング、碧眼

性格 基本いい人

です。」

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第三話 二笠 爆誕！

10月12日、横須賀林重工ドック

翔平

「親父、なんで俺を呼んだんだ」

親父

「ちょっとこれを見てくれ」

と親父はドックの中で建造中のものを指差した

翔平

「これが、ん、これは、金剛そっくりだな、まさかもう一一番艦が完成するのか？」

親父

「ああ、正確には、三ヵ月後には完成する予定だ」

翔平

「いつから、作っているんだ？」

親父

「三年位前からだったかな」

翔平

「なんで作るのと思ったんだ」

親父

「」

「決まっている、日本を守るために作られたんだ

翔平

「そりか、進んだ道が違えども、親子つてことだな

親父

「そりだな

翔平

「で、親父何のために俺を呼び出した?」

親父

「あっすっかり忘れてた

翔平

「で、頼みたいことってなんだ?」

親父

「この艦の艦名のことでだけど

翔平

「なにこするんだ

親父

「三笠」

翔平

「三笠かいい感じじゃないか

親父

「それで、いまから三笠公園に行ってくれないか？」

翔平

「はあ、なんで」

親父

「三笠公園には、記念艦の三笠がいるからぞ」

翔平

「なんとなく親父の考えてこいることが、読めたけど本氣か」

親父

「本氣だ」

翔平

「はあ～じゃあちよつとへり行つてへる」

親父

「頼んだぞ」

横須賀三笠公園

三笠

「今日も、暇ね～うん」

三笠があぐびをしてると何かにきづいた

三笠

「あの人どこかで見たよつた」

三笠は、自分の記憶の中から一人の少年を思い出した

三笠

「さうか、あの少年か」

そのころ翔平は

翔平

「そういや、何年ぶりだ三笠と会ひのせ」

翔平

「覚えてるかな」

と言いながら翔平は三笠艦内に入つていった

記念艦三笠艦内

翔平

「三笠いるか~」

翔平は三笠艦内で艦魂の三笠を探していた

翔平

「どうしてこんなんだよ」

三笠

「私の」と呼んだか翔平

翔平

「三笠久しづり」

三笠

「大きくなつたわね、翔平」

翔平

「最後にあつた日から何年経つてこると思てるんだ三笠」

三笠

「さうね、… ところで今日は何のために私に会いに来たの?..」

翔平

「三笠新しい艦に乗る気はないかい?」

三笠

「それつてここから離れろつてこと?..」

翔平

「そうだ、三笠も知つてゐるだろつこま日本を守るために連合艦隊を再建してることを」

三笠

「その」とは聞いたことあるけど」

翔平

「なら三笠、これから一緒に日本を守るために働いてくれないか

三笠

「せつこつ」となり……」わ一緒に日本を守りましょ」

翔平

「よつしゃー交渉成立、今夜迎えに来るから、転移の準備をしていてくれ」

三笠

「わかつたわ」

その夜

翔平

「三笠」

三笠

「待っていたわよ」

翔平

「準備は、できたか」

三笠

「できたわよ」

翔平

「分かつた、始めてくれ」

「」のとれ三笠の中から、展示品などすべて撤去されていて、艦

内は空であった

三笠

「うん、 けどなぜ展示品を出したの」

翔平

「親父が、 いつの間にかこの三笠を完全コピーしたものを作つてな、  
三笠が転移したらこの艦体は、 折れてしまうだろ、だからそのコピ  
ー版を展示しようつてわけだ」

三笠

「用意がいいわね」

翔平

「確かに」

三笠

「じゃあ始めるわよ、 危ないから下がつてて

翔平

「分かつた」

三笠は、 翔平が下がるのを確認すると、 転移を実行した、 三笠が  
いなくなると、 記念艦三笠は、 激しい  
轟音を立てて一つに折れてしまった、

翔平

「成功だ、 それじゃ親父後よろしく頼んだぜ」

親父

「分かつた」

翔平

「三笠に会つてへる」

横須賀林重工ドック

翔平

「三笠どりだ」

三笠

「さすが最新鋭艦ね」

翔平

「完成は二ヶ月後らしい、これからようしへ」

三笠

「うらやましい」

翔平

「それじゃ、俺は早く帰るまたな」

三笠

「またね」

日本国海軍吳基地 イージス戦艦金剛艦長室

翔平

「ただいまー」

金剛

翔平

「金剛、変わったことはないか？」

金剛

卷之三

「分かったありがとう、じゃ俺は寝るおやすみ」

金剛

翔平

「軍機です聞かないでください」

金岡

「もう、ならひひで、O H A N A S H I しまじょづ」

翔平

トマツヘイイイイイイ

そののち、日本国海軍吳基地から悲鳴が響き渡った。

## 第二話 二笠 爆誕！（後書き）

「ご意見、ご感想お待ちしております。」

## 第四話 練習航海

11月5日

日本国海軍吳基地からイージス戦艦金剛が練習航海のため出航しようとしていた、

金剛

「やつと外洋にでりれる」

翔平

「たしかに」

金剛は、乗組員が定数に達していないため、今まで瀬戸内海から出たことがなかった

??

「艦長誰と話しているのですか」

翔平

「おお、副長か気にするな」

今翔平に話しかけたのは、清水葵一佐イージス戦艦金剛の副長をしている

翔平

「副長、出航準備はできたか」

葵

「はい、すでに完了しております」

翔平

「よし、出航用一意」

水兵1

「出航用一意 船い放てーーーッ」

翔平

「両舷前進微速」

水兵2

「両舷前進微速」

艦底から心地よい機関音が響き金剛は滑らかに出航していった

葵

「航海長、この艦の艦長の人で大丈夫ですか」

葵が今話しかけたのは、海上自衛隊幹部候補生学校からの翔平の友であり、金剛の航海長を務めている、栗須啓太一佐

啓太

「うん、なんでもう思つん?」

葵

「独り言というか、見えない誰かと話しているような感じです」

啓太

「見えない誰かか~、副長の考えは、半分正解で半分外れだ」

葵

「航海長、どうこう意味ですか？」

啓太

「艦に乗ついたらそのうち分るや」

翔平

「副長、シヒに行つてくるから操艦を任せせるぞ」

葵

「はつ分りました」

イージス戦艦金剛シヒ

翔平

「砲雷長、どうだ新イージスシステムは」

今、将兵が話しかけたのは、護衛艦の時から翔平と一緒に艦に乗つてゐる、この艦の砲雷長の、堀井弘明二佐

弘明

「護衛艦の時は、大違いですまったく化け物で、『ふん』ぐは

バタン

翔平

「砲雷長……金剛何をするんだ」

金剛

「私の」とを化け物なんていうからよ」

翔平

「艦魂も似たよつなものだらうっ。」

金剛

「なんですかー。」

翔平

「ーーー。」

金剛の顔を見た途端、翔平は脱兎の「じとくひ」から飛び出しが、見つかつた。

金剛

「見つけたわよ」

翔平

「金剛さん、いいま、冷静に話しあいましょうつ」

金剛

「「」めんそれは無理」

翔平

「金剛さん上陸の時好きなもの買つてきてあげるから

金剛

「・・・こいわよ、今回だけ許してあげる」

翔平

「ふー助かつた」

イージス戦艦金剛艦長室

葵

「艦長お呼びですか」

翔平

「ああ、早いなちょっと待つていってくれ」

啓太

「翔平呼んだ〜」

弘明

「艦長呼びましたか」

翔平

「よしあれったな、実は明後日に戦闘訓練をやつと想つてな

葵

「かつ艦長」

啓太

「ええんちゃうか

弘明

「いですよ」

翔平

「決まりだな」

葵

「艦長！」

翔平

「副長じつした」

葵

「艦長戦闘訓練なんて早すぎます」

翔平

「副長、なりこいつやるんだ」

葵

「それは・・・」

翔平

「では、明後日に戦闘訓練を行つ、以上解散」

11月7日

イージス戦艦金剛CIC

水兵3

「対空レーダーに感あり、敵対艦ミサイル高速で接近！方位124

。距離10万機影6確認「

## イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「機関最大戦速、取舵20。」

水兵1

「機関最大戦速、取舵20。」

## イージス戦艦金剛CIC

水兵3

「目標よりアクテエブ・レーダー！完全にロック・オンされていま  
す！」

弘明

「VLS発射用 意、イルミネーター連動！」リンク

弘明

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

翔平

「いいぞ」

水兵4

「5機命中確認、一機接近」

弘明

「127mm速射砲迎撃用意！」

水兵4

「よ～そろ～、127mm速射砲打ち方用意ーー！」

弘明

「打ち方はじめッー！」

水兵5

「命中、全機撃墜確認」

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「よし、訓練終了」

金剛

「まあまあね」

翔平

「厳しいな」

水兵1

「艦長、司令部より緊急入電です」

翔平

「うん？」

金剛

「なんて書いてあるの？」

翔平

「副長、今すぐ針路を尖閣諸島へ」

葵

「は？ 艦長何を言つて…」

翔平

「尖閣諸島で、海保の巡視船が中国海軍に拘束されかけている」

艦橋一同

「なんですつて」

翔平

「そういうわけだ、副長針路を尖閣諸島へ」

葵

「よーそろー」

翔平

「航海長、最大戦速」

啓太

「よーそろー、中国海軍に本艦の健脚を見せてやります」

イージス戦艦金剛は、純水素タービンエンジンを6基搭載し馬力は35万馬力最大速度は、50ノットを超える

啓太

「機関最大戦速、針路尖閣諸島へ」

水兵1

「よーそろー」

3時間後

水兵2

「艦長、あと30分で尖閣諸島海域に入ります」

翔平

「早つ何ノット出したん」

金剛

「52'07ノット出たわ」

翔平

「この艦体で…」

水兵

「艦長、巡視船もどぶ視認、さらに後方に中国海軍駆逐艦！」

翔平

「巡視船と駆逐艦の間に入る、取舵20。」

水兵1

「よーそろー」

イージス戦艦金剛は、中国海軍駆逐艦の進路をふさぐ形の針路をとり、

巡視船もどぶの盾になるよつて、中国海軍駆逐艦と睨み合っていた。

翔平

「さあ、どう出る中国海軍」

葵

「艦長、もし中国海軍が攻撃してきたらどうするんですか?」

翔平

「せしたら、本艦の主砲が動く」

葵

「撃沈するんですか?」

翔平

「状況次第だ」

その時、

ドン…ガアーン

翔平

「どうしたー!」

水兵

「中国駆逐艦発砲、第一主砲塔に命中」

翔平

「被害状況報告ー!」

葵

「えー被害らしき被害はありますか？」

翔平

「そりゃ、砲雷長、一、一一番主砲射撃用意！」

弘明

「了解、弾種はどうしますか？」

翔平

「どうあえず空砲でよろしく頼む

弘明

「了解」

グイーン ガシンッ

水兵

「発射準備完了」

翔平  
撃<sup>て</sup>～～つ！～！

ズドオオオオオオーーンッ！！

啓太

「でつかいおとやな～翔ちゃん」

翔平

「あははは～…」

葵

「艦長！ 航海長！ バカやつてないで働いてくださいー！」

翔  
啓

「みんなで」

水兵

「報告！－！中国駆逐艦撤退していきます」

翔平

一分が二分だ。本艦も三十分後に基地に帰投する！」

イージス戦艦金剛艦長室

金剛

「それでも、中國海軍は、何故にんなことをしたのかしら？」

翔平

「さあ中国人の考へることは、分からん」

金剛

「そういえば、連合艦隊はいつ再建されるの？」

翔平

「うん？ 来年の2月には、全艦そろいつやつだ」

金剛

「早やつ……いつからそんなに建造してゐるのよ」

翔平

「5年位前からだそ�だ」

金剛

「何をどのくらい作つてゐるの?」

翔平

「戦艦6隻、空母6隻、巡洋艦12隻、駆逐艦48隻、輸送艦30隻、  
軽空母5隻、  
大型自走浮きドック6隻、小型自走浮きドック8隻、工作艦  
6隻、強襲揚陸艦10隻、病院船3隻  
計137隻こんなもんだ」

金剛

「多いわね、乗組員はどうするの?」

翔平

「その所は作者の力だろ?」

はいはい任しどけ

翔平

「そういえば、金剛をつき撃たれたとこ大丈夫か?」

スルーされた

金剛

「大丈夫よ」

「ン」

翔平

「入れ」

葵

「失礼します」

翔平

「副長が、どうしたんだ?」

葵

「艦長、まもなく基地に入港します」

翔平

「そりが、艦橋に戻るか」

イージス戦艦金剛は、無事基地に到着した。

## 第四話 練習航海（後書き）

作者「お久しぶりです、中間テストで勉強していたので、パソコンを起動できませんでした。」

金剛「作者、本当に勉強していたのかしら？」

作者「ギクッ、何ヲ言ツテイルノデスカ、金剛サン」

金剛「何か怪しいわね、鳳翔こっちに来て」

鳳翔「金剛よんだか？」

金剛「ねえ、鳳翔作者が、三週間も何をやっていたか知ってる？」

鳳翔「ああ、知ってるぞ、作者が何をやっているかE - 2 Dで監視していた」

作者「ギクッ、ヤバイ（こいつは逃げるが吉だ）」

ガシツ

金剛「待ちなさい」

鳳翔「…話していいか

金剛「おねがい」

鳳翔「作者は、学校から帰つたら、まずゲームに飛びついている」

金剛「こんの・・バカ作者へ！」

ゴスツ

作者「ぐふつ…」

バタツ

金剛「さ、帰りましょ鳳翔」

鳳翔「まだ作者が倒れたまゝ「帰りましょ」はい」

「意見」「感想お待ちしています。

## 第五話 連合艦隊集結そして・・・

2月23日

日本國海軍基地司令本部

コソコソ

司令  
「どうぞ」

翔平・金剛・啓太・葵・弘明  
「失礼します」「」

司令  
「待つていたぞ」

翔平

「司令何のために私たちを呼んだのですか?」

司令

「今日君たちに来てもらつたのは、君たちにこれを渡すためだ

司令が渡してきたのは、4通の封筒であった

翔平

「なんですかこれは」

司令

「中を見たらわかる」

翔平たちが、中身を見たら、そこには、辞令が入っていた。

翔平

「司令、何故私なんかが連合艦隊司令長官なんですか！！」

司令

「お前しか適切な人物がいなかつたからだ」

啓太

「何故、俺が参謀長」

司令

「ほか三人は、長官の補佐を頼んだぞ」

三人

「了解」

司令

「よし、戻つていいで」

全員

「」「」「失礼しました」「」「」

イージス戦艦金剛長官室

金剛

「昇進おめでとう翔平」

翔平

「あつがとう金剛」

金剛

「ああ、みんなに挨拶してこなじと」

翔平

「みんなつて?」

金剛

「決まつているじやない、連合艦隊艦艇の艦魂たちの所によ」

翔平

「もう全員集まつてこむのか?」

金剛

「当たり前じやない、わあ早く着替えてー。」

翔平

「何に?..」

金剛

「今月から軍服が変わつたでしょ」

翔平

「ああ、あの旧海軍の軍服か?」

金剛

「やうよそれ」

翔平

「分かつた3分待つていてくれ」

イージス戦艦金剛士官室

翔平

「多いな」

金剛

「全員呼んだからね」

三笠

「翔平、おめでとう」

翔平

「三笠久しぶりだな」

金剛

「翔平、早くみんなに挨拶を」

翔平

「分かつた」

翔平

「えー今回連合艦隊司令長官になってしまった、林翔平だ以後よろしく、まあ堅苦しい」とは「の辺で以上終わり」

？？

「　「　「　「鳳翔」　」　」

翔平

「うん、誰か呼んだか」

紀伊

「初めまして、私は金剛型戦艦3番艦戦艦紀伊です」

尾張

「同じく、4番艦戦艦尾張だ」

駿河

「・・・同じく、5番艦戦艦駿河・・・です」

常陸

「同じく、6番艦戦艦常陸です」

翔平

「おー、これからよろしくな」

全員

「　「　「　よろしくお願ひします」　」　」

翔平があたりを見て回っていると、いかにも不機嫌そうな鳳翔がいた

翔平

「うん？鳳翔なんでそんなに機嫌が悪そうな顔をしてるんだ？」

鳳翔

「うぬやこ、うぬやこ、うぬやーい」

ゴスツ

翔平

「ぐふつ…」

紀伊

「長官…」

翔平

「大丈夫だ」

？？

「長官、今鳳翔に話しかけないほうがいいですよ」

翔平

「もう少し早くいってほしかったな、って誰だ？」

鳳凰

「自己紹介が遅れました、鳳翔型空母2番艦の鳳凰です」

翔平

「これからよろしく」

鳳凰

「うぬやこよろしくお願いします」

翔平

「鳳凰、なんで鳳翔はあんなに不機嫌だったんだ？」

鳳凰

「それは私にも分かりません」

翔平

「そうか、よし常陸」

常陸

「お呼びですか長官」

翔平

「常陸、鳳凰と一緒に鳳翔の機嫌がなぜ悪いか調べてくれ」

常陸・鳳凰

「了解」

翔平

「これで鳳翔のことは、心配ないな」

翔平が腕時計を見ると時間は午後3時を回っていた

翔平

「おつと金剛、俺は仕事があるから戻るが

金剛

「翔平、もう帰るの?」

翔平

「長官になってしまったからな」

金剛

「そうなの」

翔平

「また用があつたら呼んでくれ」

金剛

「分かった」

イージス戦艦金剛長官室

翔平

「あ、～畜生、手が痛い」

連合艦隊司令長官になると翔平の嫌いな机仕事ももうひん増える

翔平

「つむぎい作者」

すいません

翔平

「ちよつと息抜きに出かけるか」

翔平が「ひつわり部屋を出ようとしたら」という

葵

「長官、どこへ行くつもつですか」

翔平

「（見つかったか）ちょっと息抜きに

葵

「だめです、行くのなら全部終わらせてからにしてください」

翔平

「え？」

部屋に戻される翔平

翔平

「はあ～」

常陸

「長官、いますか」

常陸が翔平の前に現れた

翔平

「あ、常陸かちょうどよかつた」

常陸

「え？」

翔平

「常陸、転移だ、急げ」

常陸

「へ？あつ、はい」

イージス戦艦常陸甲板

常陸

「長官何があつたんですか？」

翔平

「ふ、常陸のおかげで、助かつた、実はなかくかくしかじか」

常陸

「だいたい事情が分かりました」

翔平

「しばらく金剛には戻れないな」

その頃、葵がもぬけの殻の長官室を見て、人が変わったように翔平を探していた。

常陸

「分かりました、しばらく間の視察でもしますか？」

翔平

「そうだな」

常陸

「それでは行きましょう」

翔平

「どうへ？」

常陸

「巡洋戦艦天羽の所、まだあったこと無いでしょ」

翔平

「ない」

常陸

「それでは行きましょう」

イージス巡洋戦艦天羽後部甲板

天羽

「暇だわ〜」

天月

「暇ね〜」

十六夜

「二人ともしゃきっとして、長官が来るわよ

天羽

「へ？長官が来るの？」

翔平

「もう来てるけどな」

天月

「長官来るのなら予告してからにしてください」

翔平

「そんなこと言われてもな」

十六夜

「長官、今日は何の用で」

翔平

「視察と自己紹介ってとにかく、じゃ改めまして、今日から連合艦隊司令長官に就任した林翔平だ、以後よろしく頼む」

天羽

「天羽型巡洋艦1番艦天羽です」

天月

「同じく2番艦天月です」

十六夜

「同じく3番艦十六夜です」

天羽・天月・十六夜

「これからよろしくお願いします」

翔平

「さてと、これからどうするか

金剛

「しょううへい」

翔平

「やばい、常陸、転移だ逃げるぞ」

常陸

「アイ・サー」

翔平

「天羽達はここで金剛の足止めを頼む」

天羽・天月・十六夜

「了解」

金剛

「翔平～待ちなさい～」

天羽

「金剛さん落ち着いて」

天月

「そうです落ち着いてください」

十六夜

「長官今のうちに」

翔平

「ありがとうございます、常陸行くぞ」

常陸

「はい」

## 大型自走浮きドック

翔平

「常陸、ビード、リードは？」

常陸

「リードは、私たちの病院です」

翔平

「異？ ああ自走ドックの」とか

常陸

「やつです」

？？

「だれかあるん？」

翔平

「うん？ 異か？」

異

「やつや、ひが異や」

翔平

「今日から連合艦隊司令長官に就任した林翔平だ、以後よろしく頼む」

む

四

「長官、いかがお過ごしくお願いします~」

常陸

「長官~金剛さんたちが来ます」

翔平

「なんだと!~」

翔平は今、気が付いた自分が仕事をすっぽかして、艦隊視察に来て  
いるところとを

戦艦・巡洋艦の艦魂達

「長~官~」

翔平

「ひつ 常陸」

常陸

「つよ、『了解』

金剛

「だめよ、常陸」

血も凍り付きそつた田で常陸をこらむ金剛

常陸

「はい~」

翔平

「（ヤバイ、どうする）」の危機的状況を回避するには、どうすればいいんだ？」

# 「長～官～」 戰艦・巡洋艦の艦魂達

この時、翔平の頭の中にふと名案（？）をひらめいた

翔平

「そうだ今夜はみんなで宴会をしよう」

全員

翔平

「それじゃ、今夜の1900円金剛甲板に集めよう」「うう」と

翔平は脱兎のごとく、呉の艦橋に行き、内火艇を借りて金剛に戻った。

## イージス戦艦金剛長官室（夕方）

翔平

「終わった、もう二んな時間か」

金剛

「翔平、どこで宴会するの？」

翔平

「なじみの店」

金剛

「ふうん」

翔平

「準備するか

金剛

「はい」

イージス戦艦金剛甲板

翔平

「これで、全員か」

艦魂達

「――「はいー。」」

翔平

「じゃ行くか

啓太

「長官、どう行くん?」

翔平

「参謀長、ちよびよかつた、飲みに行くか?」

啓太  
「行く」

吳市市内

翔平  
「ここだ」

つと、翔平は、一軒の中華料理店を指差した。

啓太  
「ここか？」

金剛  
「ここなの？」

翔平  
「そうだ」

と、言って翔平は、店の中に入つていった

翔平

「お久しぶりです」

店主

「おお、来たか、二階に上がつて待つてくれ」

翔平  
「はい」

二階

翔平

「さあ、みんな座つて」

啓太

「翔ちゃん、やっぱり連れてきたんか〜」

翔平

「うん、分かるか」

啓太

「やつて、ほら」

啓太が指をさした先には、コップが浮いた、

翔平

「あははは

一時間後

金剛  
翔平  
「

翔平

「どうした、金剛」

金剛

「旗艦をだれにするのかな、と思つて」

常陸

「長官、まだ旗艦を決めてないんですか！」

翔平

「そうだけど」

常陸

「なら、私を旗艦にしてください」

翔平

「なんで」

常陸

「私は、金剛型の中で情報戦の能力は一番すぐれています」

翔平

「そりなのかな？」

三笠

「翔平、なら私は、どうですか」

翔平

「三笠か」

三笠

「私は、基本的な性能は、金剛と同じです、けど対空戦闘能力が若干上がっています」

翔平

「ほひ

紀伊・尾張

「長官、私は、対艦攻撃力が若干上がっています」

翔平

「へへ

金剛

「翔平、反応が薄いわよ」

翔平

「なんか、どうでもよくなつた」

常陸・三笠・紀伊・尾張

「長官（翔平）！」

そらに1時間後

途中で葵も加わり

船魂達は皆酔いつぶれ眠つてしまい、

翔平、啓太は正座して葵に説教をされていた。  
何故こんなことをしているのかと言つと…、

葵が部屋に入つて来た時フワフワと浮いているコップを見て

葵

「何」れ…幻覚？長官じばらぐの間う「とあえず飲もう」えー

二人して酒をすすめて落ち着かせようした…ところが一口飲ませたらすぐに酔いが回つたらしく顔を赤くし…

葵

「長富！何故仕事をぼつたらかして逃げたのです（ゴク）そんなことでは部下に示しがつきません（ゴクゴク）演習の時もそうですねたは参謀長とタメ口でふざけ合って」

啓太

（雲行きが怪しくなってきたな～今のうち逃げよ！ 参謀長あなたもです！」 遅かった）

葵

翔平・啓太

「「せこ」」

葵

「二二八事件」

バタッ

翔平

「寝てるよ」

啓太

「なあ翔ちゃんこれからはあんまりふざけんよひしよな」

翔平

「ああ…にしても」

翔平・啓太

「恐かったな〜」

2月25日

横須賀林重工

翔平

「親父どうした?」

翔平は親父に呼ばれてはるばる横須賀の林重工業株式会社の本社ビルに来ていた

親父

「実は、見てもらいたいものがあつてな

翔平

「ほつ、何を見てほしいんだ?」

親父

「ここちに来てくれ」

親父に言われて親父についていく、翔平

数分後

翔平は親父に連れられて、地下に来ていた、

翔平

「親父どじだ、じこには？」

親父

「地下の兵器の実験所だ」

翔平

「へ〜」

親父

「翔平、これは、なんだか分かるか？」

翔平

「金剛型に搭載されている46センチ滑空砲と天羽型30センチ砲  
だろ」

親父

「はずれ〜」

翔平

「じゃあ、なんだよ

親父

「こいつは、新兵器のEM-Lだ」

翔平

「EM-L? どつかで聞いたことがあるな・・・つあー」

親父

「分かつたか、こいつは、新兵器46センチレールガンと30センチレールガンだ」

翔平

「えへへ、レ、レールガン!-!」

親父

「正式名称は、91式460mm60口径電磁投射砲と78式305mm60口径電磁投射砲だ」

翔平

「工、SF」

親父

「SFじゃない、現実だ」

翔平

「じゃあ、ビリビリ」

親父「それを言つたら・・・まあいい、今頃、金剛型全艦と天羽型全艦の主砲改装も始まつてゐるだろ?」

翔平

「そういえば、書類に書いてあつたなー」

親父

「大丈夫か？ そんなので」

翔平

「大丈夫だ！ 問題ない！」

親父

「・・・そつか」

翔平

「なあ、親父、レールガンを撃つ時の電力は、どうするんだ？」

親父

「そのことなら心配ない、金剛型、天羽型は、設計時から、電力には充分の余裕を持っている」

翔平

「あつ、そつ」

親父

「まだ見せたいものがあるこっちに来てくれ」

移動中

翔平

「親父、いつまで歩くんだ、もう30分も歩いてるぞ」

親父

「もう着くから、ほりあそじだ」

翔平

「うん？ 航空機研究所」

親父

「・・・これだ、見てくれ」

翔平

「F-22ラプター、何故こんなとこに？」

親父

「ロッキード・マーティンとボーイングと我が社で共同開発した、F-22ラプターの艦上機型だ」

翔平

「だけど、F-22は海外輸出禁止政策だったはず」

親父

「この機体はロッキード・マーティンとボーイング社でF-22ラプターを基にして艦上戦闘機として開発した機体だから問題ない！」

翔平

「あつ、そう」

親父

「この機体は、来月各空母に配備する予定だ」

翔平

「聞いてないぞ！…」

親父

「極秘だつたから」

翔平

「あつ、そつ」

親父

「翔平、どうする」これから

翔平

「明日は、また仕事だから帰る」

親父

「そつか、また来いよ」

翔平

「またな」

3月27日

イージス戦艦金剛長官室

金剛

「翔平、おきて～」

翔平

「あと、5分～」

**金剛**

「いい加減に起きなさい」

**ゴスツ**

**翔平**

「がはっ…」

**金剛**

「ほり早く、着替えて、きょうは艦隊演習の日でしょ」

**翔平**

「そうだった…今何時だ」

**金剛**

「5時30分」

**翔平**

「つた、大変だ、急げ」

数時間後

**翔平**

「艦長、出港準備は？」

**艦長**

「すでに整っています」

**翔平**

「参謀長、全艦の様子の確認を」

啓太

「はつ、分かりました」

じまいくして

啓太

「長官、全艦、出港準備完了です」

翔平

「よし、連合艦隊出航せよ」

全員

『了解』

水兵1

「全艦出港、第一駆逐艦隊より出港せよ」

水兵2

「第一戦隊、第一航空艦隊、機関始動。第二戦隊、第一航空艦隊序列に従い出港せよ」

水兵3

「第一駆逐艦隊抜錨。第二戦隊、第三航空艦隊泊地より移動、水道に向かえ」

翔平

「艦長、軍楽隊を準備させてくれんか、せつかくの門出だ。軍艦行進曲を流してもうおつ」

艦長

「はい、分かりました」

翔平の言葉に従つて、金剛座乗の軍楽隊が、急ぎ後甲板に集合した。

水兵4

「駿河、動きます！」

見張り員が叫ぶと同時に、軍樂長がタクトを振り上げた  
波を豪快に踏み分けて水道に向かう第三戦隊の戦艦群、駿河、常陸  
次いで、第三航空艦隊の翔龍、瑞龍が続いて第二戦隊の紀伊、尾張、  
第一航空艦隊の萃鶴、勇鶴が、巨体を滑るように進みだす。

翔平

「よし俺たちの番だな、抜錨、前進微速！」

続いて、第一戦隊の金剛、三笠、と第一航空艦隊の鳳翔、鳳凰も出  
港していった

4月1日

太平洋

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「順調だな」

金剛

「そうね」

水兵1

「前方に積乱雲」

翔平

「・・・一雨来るな」

金剛

「やうね」

じぱいくじて

翔平

「むし思つたより揺れるな。気象レーダー、雲の様子は?」

気象長

「特に変わった様子は・・・あ、いえ、雲量急増!」

気象長の声が少々うわずつた、翔平が気になりスクリーンをのぞき込む。

翔平

「なんだ、こりゃ?」

スクリーンの上半分がみるみる白くなつていった。

翔平

「通信士、各艦へ緊急連絡!」

水兵2

「・・・電波状態不良、交信できません」

翔平

「なら、発行信号で連絡だ、急げ！内容は、各艦艦隊針路を維持せよ、だ」

水兵3

「了解」

金剛

「翔平、一雨ビビリの騒ぎではなこようね」

翔平

「思つたより、荒れそつだな」

言つなり、横殴りの動搖が艦隊を襲つた。

水兵4

「長官！前方に雷雲・・・竜巻の発生を確認！」

啓太

「なんだ、この絵に描いた様な、天災のフルセットは」

水兵5

「先頭艦、駆逐艦秋月、針路変更」

翔平

「続け」

艦長

「了解、機関全速、面舵

水兵

「ダメです、秋月、渦に飲み込まれます」

翔平

「なんだと」

水兵1

「本艦も、渦に飲み込まれます」

翔平

「総員何かにつかまれ！」

日本が世界に誇る大艦隊は、木の葉のように次々と渦に飲み込まれていった、その先にあるものは、

金剛

「白い・・・闇？」

明らかにおかしいその形容が、なぜか、金剛の頭の中に自然に浮かんだ。

数分後

金剛

「翔平、翔平」

翔平

「うん？うん、なんだつたんだ、あれは？」

金剛

「分からなーいわ」

話してこむつけに、艦橋の全員が田を覚ました

翔平

「急ぎ、全艦との連絡と、現在位置の確認を」

水兵6

「了解

金剛

「みんな無事かしら」

翔平

「今、連絡を取つてこむ

水兵6

「長官、全艦、無事です」

翔平

「そうか」

水兵7

「長官、GPSの信号が受信できません」

翔平

「アンテナの故障じゃないのか」

水兵7

「アンテナの故障じゃないのか」

「いえ、すでに調べたのですが、故障はありません」

翔平

「ほかの艦は、どうなのだ」

水兵1

「今、連絡を取っているところです」

翔平

「どうか」

水兵1

「長官、確認しましたが、本艦と同じで、GPS信号が受信できな  
いみたいです」

翔平

「なんだと！」

啓太

「……は、一旦日本に寄港しませんか？」

翔平

「そうだな、全艦、進路変更」

艦長

「了解、面舵、機関全速」

数時間後

葵

「長官、日本領海に入りました」

翔平

「そうか、まだ呉基地は、応答しないか」

弘明

「はい、沈黙しています」

翔平

「そうか」

水兵

「長官、前方に大型艦」

翔平

「なに！米海軍か？」

水兵

「いえ、無線に応答しません」

翔平

「レーダー、照合だ」

水兵8

「了解」

水兵8

「照合不能・・・いえ、こいつは、旧海軍の金剛型戦艦？」

翔平

「はあ？」

水兵1

「先頭艦、駆逐艦秋月より入電」

翔平

「内容は」

水兵1

「我、不明艦より停船命令を受けた」

翔平

「全艦停止、ただし、本艦はこれより不明艦に接触する」

全員

『了解』

## 第五話 連合艦隊集結そして・・・（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております

## 第六話 帝国海軍艦艇改造計画

4月1日(?)

日本近海

イージス戦艦金剛艦橋

翔平

「あの艦は、なんだ?」

金剛

「分からぬいわ」

翔平

「話し合いで済みますよー!」

イージス戦艦金剛は、駆逐艦秋月に接近する不明艦の針路を邪魔するような針路をとつていた、

水兵

「長官! 不明艦より発光信号! 」 「こちらは帝国海軍所屬 戰艦金剛。貴艦は日本帝国の領海を侵犯している。速やかに所属を連絡されたし。』 です」

翔平

「ひつや、本格的にやばいことになってきたな」

啓太

「艦長、どうする？」

翔平

「どうするも、正直に答えるしかないだろう、発光信号用意！内容は・・・」

戦艦金剛

水兵

「不明艦より、発光信号！』『こちらは日本海軍所属 戦艦金剛』です」

？？

「い、いーじす？なんだ、それ？」

今、イージスという言葉は疑問を持ったのは、岸本 鹿子治大佐、

戦艦金剛の艦長だ

副長

「艦長、停船させて、武装解除しまじょっ

岸本

「その手で行け！」

イージス戦艦金剛

水兵

「長官！不明艦より再び、発光信号一・』停船せよ』です」

翔平

「艦長、停船だ」

艦長

「りょ、了解、機関停止」

水兵

「機関停止」

イージス戦艦金剛は機関を止め、惰性で進んでいた

戦艦金剛

副長

「艦長、不明艦が停船しました」

岸本

「よし、臨検隊の準備だ」

イージス戦艦金剛

水兵

「内火艇、接近、臨検隊の模様」

翔平

「艦長、ラッタルを下ろせ」

艦長

「了解」

金剛

「翔平、どうするの?」

翔平

「・・・」

内火艇

水兵

「艦長、まもなく不明艦に乗り込みますが、」

岸本

「そうか、君は、あの艦をどう思つ?」

水兵

「実に奇妙な艦だと、思います」

岸本

「君も、そう思つか」

水兵

「艦長は、あの艦が、アメリカの偽装艦だと思われますか？」

岸本

「アメリカはこんな、ことはやらん、それに、あの艦と後方の艦の艦尾には、旭日旗が、掲げられているし、さつきから向こうで波を切る音が聞こえる、たぶん10隻以上いる」

実際に、連合艦隊の各艦は、微速で、イージス戦艦金剛に接近していた

水兵

「艦長！不明艦のラッタルが下されています」

岸本

「そうか、よしラッタルから、不明艦の調査のため乗艦する

イージス戦艦金剛艦橋

啓太

「長官、内火艇が接近してきます」

翔平

「じゃあ、行くか」

甲板に行こうとする翔平

葵

「長官！何処へいくのですか？」

翔平

「甲板に行く、お茶の用意を」

葵

「はあ？」

翔平

「じゃあ、そういうことだ

翔平は、数人の水兵を引き連れて、艦橋から駆け足で出て行つた

イージス戦艦金剛甲板

岸本

「でかいな

水兵  
「はい」

金剛の甲板に上がつた、臨検隊

岸本

「軽く、300mはあるな」

水兵

「誰かきます」

岸本

「うん?」

キイイツと扉が開き、そこから翔平たちが出てきた

翔平

「イージス戦艦金剛へ、よつこな私がこの艦隊の、司令官林 翔平です」

岸本

「戦艦金剛艦長岸本 鹿子治です」

翔平

「立ち話もあれですからとまあえず艦内へどうぞ」

岸本

「は、はい」

イージス戦艦金剛艦長官室

翔平

「遠慮せぬかけてください」

岸本

「失礼します」

翔平

「大佐、質問ですが、今日は何年何月何日ですか?」

岸本

「今日? 1935年4月1日だ」

翔平

「・・・そうですか」

岸本

「長官、あなた方は、何者ですか?」

翔平

「・・・我々は、90年後の未来から來ました」

岸本

「長官、からかっているのですか?」

翔平

「・・・そうですか、大佐一寸ついてきてください」

岸本  
「はい」

イージス戦艦金剛CIC

岸本

「これは・・・」

翔平

「『』は、戦闘指揮所です」

岸本

「戦闘指揮所？」

岸本が瞠目するのも、無理もない、岸本の眼の前には、いかにも未來的な光景が広がっていた

翔平

「これで、私たちが未来から來たと、信じてもらいました？」

岸本

「確かに、この裝備を見ればな・・・分かつた、信じよつ

翔平

「ありがとうございます」

イージス戦艦金剛長官室

翔平は、これから日本で起じる「」を、連合艦隊のことを、岸本に話した

岸本

「日本が・・・米国と戦争をして負ける・・・」

翔平

「・・・やつです」

岸本

「そつか・・・あなた方は、これからどうするんですか?」

翔平

「私は、これからも、日本を守るために働くつもりです」

岸本

「日本を守るために?」

翔平

「はい」

岸本

「では、行きましょう」

翔平

「どこへ、ですか?」

岸本

「吳に」

翔平

「はい」

この会談の後、岸本は、戦艦金剛に、戻つていった

翔平

「参謀長、各艦への回線を開いてくれ」

啓太

「了解」

翔平は岸本との会談の内容を、連合艦隊各艦へ伝えた

翔平  
「・・・それで、これからも日本を守るために、一緒に働いてほしい、」

数分後

葵

「長官、全艦から、旗艦と行動を共にするし、返電がきました」

翔平

「よし、戦艦金剛に信号」

水兵

「了解」

1分後

水兵

「長官、戦艦金剛から返信『我に続け』です」

翔平

「よし、艦隊の陣形を単縦陣にする」

弘明

「了解」

翔平

「艦長、戦艦金剛の後に続け」

艦長

「了解」

帝国海軍柱島泊地

戦艦長門の防空指揮所で一人の少女が、瀬戸内海を眺めていた  
もちろん、この二人は、普通の人には見えない

？？

「姉さん」

今喋ったのが、戦艦陸奥の艦魂の陸奥だ

？？

「うん？なに」

今喋ったのが、戦艦長門の艦魂の長門だ

陸奥

「金剛さんだが、わざわざ帰つてくれぬよ」

長門

「例の、気象異常の調査が終わったの?」

この気象異常とは、連合艦隊が巻き込まれた、嵐のことだ

陸奥

「やうみたい、なんかお土産があるやつよ」

長門

「お土産?」

陸奥

「うそ」

そのとおり、汽笛の音が聞こえた

長門

「金剛さんが帰つてきたみたいよ」

陸奥

「あつ本当だ・・・つえ」

陸奥が戦艦金剛を見ていると、島影から連合艦隊旗艦イージス戦艦  
金剛の艦体が姿を見せた

長門

「なに・・・あれは」

絶句する長門

陸奥

「と、とうあえず金剛さんの所に行いつ

長門

「わ、分かつたわ」

戦艦金剛防空指揮所

長門と陸奥が驚いている頃、戦艦金剛の艦魂金剛は連合艦隊の駆逐艦秋月と二人でお茶を飲んでいた

秋月

「…というわけです」

金剛

「へ～そつなの」

なぜか、すっかり仲良くなっている二人

長門

「金剛や～ん」

金剛

「あら、何の用かしら」

陸奥

「なにかつて、あの艦隊は、なんですか！」

金剛

「90年後の未来から来た艦隊」

長門

「へ～未来から・・・どつかで頭打ちました?」

確かにこんな話をまともに聞きつける人はいない

金剛

「私は、至つて正常よ」

陸奥

「なら・『あの～』うん?」

秋月

「あの～、私邪魔ですか?」

長門

「そりいえば、あなた誰?」

秋月

「私は、連合艦隊の第一駆逐艦隊旗艦、駆逐艦秋月です」

秋月は椅子から、立ち上がり直立不動の態勢で自己紹介をした

長門

「本当なの、あなた達が未来から来たといふことは」

秋月

「はい」

## イージス戦艦金剛艦橋

金剛

「翔平、」

翔平

「なに」

金剛

「翔平、私の艦名が、向こうとかぶる」と云つてゐる。

翔平  
「あっ・・・もうひと回り飛んでいたぞ!」

金剛

「本当に?..」

翔平

「もちろん、えへと、新しい艦名は、播磨だ」

金剛改めて播磨

播磨

「今思つてたでしょう?」

翔平

「ソンナコトナイヨ」

播磨

「まあ、いいわ」

4月2日

帝国海軍柱島泊地

イージス戦艦播磨長官室

との会議の結果、連合艦隊は、大日本帝国海軍に籍を置くことになつた（指揮系統などは別）また、帝国海軍の艦船を改造すること、これから日本は、どうなるかを伝えた、帝国海軍は1936年に起ころ一二・二六事件を止めることと、陸軍の暴走を抑えることに頭を抱えていた、

翔平

「ふう疲れる」

播磨

「おつかれさま」

翔平

「一寸、宗谷に行つてくる」

播磨

翔平は、必要な書類を鞄に入れ扉に向かつた

「送つてこいつか」

翔平

「頼む」

工作艦 宗谷

翔平

「あつがどつ」

播磨

「えりいたしましほ」

翔平

「じゅあ、ひよひと親父と話してへる」

播磨

「え? なんで翔平のお父さんがいるの?」

翔平

「出港前日に、宗谷に来て、降り遅れたりして」

播磨

「・・・」

翔平

「播磨、言いたい」とは、分かる

播磨

「わ、私は、艦に戻るわ」

翔平

「分かった」

工作艦 宗谷 設計室

設計室、じけいしつ、文書づくり、艦船の設計をする部屋だ、そこで翔平の親父、林武は、何やら嬉しそうに、パソコンに向かいっていた

翔平

「親父、楽しそうだな」

武

「おお、翔平か、今ちょうど長門の改造図面ができたところだ」

翔平

「そうか」

林重工が、わずか5年で、連合艦隊、全艦を作り上げたのは、設計の早さからきている、

武  
「今、伊勢の図面を作っている」

翔平

「やる気満々だな」

武 「こや、宗谷にも手を貸してもらひてゐるからな」

翔平

「そひいえば、宗谷は？」

武

「昨日は、徹夜だったからな、今自分の部屋で寝てこい」

翔平

「そつか」

武

「あと3日もあれば、全艦艇の、図面ができるから」

翔平

「そつか、でも無理するなよ、もう歳なんだから」

武

「お前もな」

翔平

「分かっている」

武

「頼んだぞ、司令長官」

翔平

「はい、はい」



## 第六話 帝国海軍艦艇改造計画（後書き）

「意見、感想お待ちしております。」

## 第七話 運命の開戦

1941年10月23日

帝国海軍柱島泊地

（）柱島泊地は、今、艦艇で埋め尽くされていた、その中には、改名し第一連合艦隊となつた旗艦の、イージス戦艦播磨、史実より早く、そして強力になつて、生を受けた、第一連合艦隊旗艦、戦艦大和、武藏、そして、強化された、長門、陸奥を始めとする、戦艦群、さらにその後方には、アングルドッツキになつた、赤城、加賀、蒼龍、飛龍、さらに、新造空母の、翔鶴、瑞鶴がいた

イージス戦艦播磨 長官室

今長官室では、二人の人物が話していた

翔平

「山本さん、我々が来てしまつたことで、今の日本は、史実よりもことになつています」

山本

「君たちのせいではない」

今話したのは、山本五十六大将だ

翔平

「ですが、日独伊三国同盟を結ばなかつたことにより、独国は、英國と組みました、それによつて、独国

は、全力でソ連と戦つて、そのソ連は、今は、冬将軍の、支援を待つている有様ですよ」

山本  
「そりやひどいな」

翔平

「アメリカは、日本の海軍力に危機感を募らせてているし」

山本

「確かに、今の日本の海軍力は、世界第一位だが、君らがいるから日本は、負けんさ」

翔平

「そうですが…」

山本

「それにだ、何ために、君達は、今までやつてきたのかね」

翔平は笑い出してしまった

翔平

「はははは、そうですね、ここまで来たら、あとは全力をつくすのみです」

山本

「その通りだ、とにかく、今日は、宴会を開く日だったな」

翔平

「はい、そうです」

山本

「やあ、おっと、もうこんな時間かやんすな、おこたましよつ」

翔平

「長官、今夜、播磨の、予備士官室で」

山本

「分かつた」

イージス戦艦播磨 長官室

播磨

「翔平、やうそろ時間よ」

翔平

「やあ、じやあ行くか」

播磨

「行きましょ」

イージス戦艦播磨 予備士官室

山本

「おつ長官遅かったな」

翔平

「やつらが卑ひきのでは、ないでしょつか」

山本

「やうか?」

翔平

「やうです」

山本

「ふつ、まあ、そんなこと気にしない」

翔平

「じゃあ、始めますか」

山本

「やうしょい」

その時、扉が開き、武と啓太、葵が入ってきた

武

「翔平、遅れてしまん」

啓太

「じめんな~」

葵

「すいません」

ちなみに、堀井弘明は、現在、海軍省で勤務中であった

翔平

「やつと来たか、まあ、座つて」

山本

「全員、集まつたな」

翔平

「はい、人間、艦魂、全員集合しております」

山本

「よし、全員集まつたといふことで、宴会を始める、皆今夜は無礼講だが、飲みすぎで、次の日は、一日酔いにならないよつにな」

全員

『はい』

それから宴会が始まった、ちなみに、啓太と葵はなぜか、艦魂が見えるようになつていた

啓太

「将ちゃん、飲もうぜ」

翔平

「おつ、任しつけー」

数時間後

播磨

「翔平、そんなに飲んで大丈夫?」

翔平

「大丈夫だ、問題ない!! ヒック」

播磨

「全然大丈夫じゃないでしょう!」

啓太

「まあ、ヒック、播磨いいじゃねえか」

播磨

「参謀長も飲みすぎですよ」

翔平

「細かいことは気にするな~」

啓太

「そうだ、そうだ」

まあ、こんなことをやつていてるうちに、ほとんどの、艦魂、人間が  
酔いつぶれてしまった

残っているのは、翔平、山本、武、播磨、大和、そして第一連合艦  
隊一の酒豪、空母萃鶴の六人だけであった、

山本

「こんな平和がいつまでも続けばいいんだが」

翔平

「そうですね、長官」

山本 「君たちが未来から、来なければ、今頃はこんなことはしてなかつただろうな」

翔平

「はい」

山本

「これから、どんな、事があつても我々は、この日本を守り続けよう」

翔平

「はい……」

萃鶴

「長官、お酒～もつと～」

翔平

「飲みすぎだぞ、萃鶴、お前一人で人の何倍飲むつもりなんだ？」

萃鶴

「え～と、・・・いっぱい」

翔平

「ダメだこいつや」

山本

「はつはつはつは

こうして宴会も終わり、大日本帝国は、戦争という、嵐の中へと飲み込まれつて行つた

11月30日 単冠湾

ここには、史実の、第一機動部隊ではなく、第一連合艦隊の戦艦6隻、空母2隻、巡洋艦8隻、駆逐艦12隻、総合輸送艦4隻が、今までに、真珠湾に向けて、出撃の時を待つていた、

イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「いよいよだな

播磨

「うん」

翔平

「それにしても・・・寒い」

啓太

「長官、全艦出撃準備完了です」

翔平

「そつか」

播磨

「翔平、外務省への連絡体制は?」

翔平

「その事なら大丈夫だ、宣戦布告をしたら、外務省から連絡が来る」

播磨

「そうそれなら大丈夫ね」

葵

「長官そろそろ」

翔平

「おう、分かった・・・第一連合艦隊全艦出撃せよ」

全員

『了解』

第一連合艦隊は、北太平洋の荒波を超えて、ハワイ真珠湾へと針路を向けた

12月8日（日本時間）

ハワイ諸島近海

第一連合艦隊旗艦播磨に「ニイタカヤマノボレ一一〇八」という電文が届いた、在米大使官が、米国に宣戦布告通知書を渡し、同時に各マスコミに声明を発表したのだろう、

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、真珠湾までの距離240kmです」

翔平

「よし、萃鶴、勇鶴に、発光信号!」

葵

「了解」

旗艦播磨から、の信号で、2隻の空母は、飛行甲板に並べられていた機体を、発進させていた、カタパルトから、F-22、F-2、E-2D、が発艦していた、

水兵

「長官、空母萃鶴、勇鶴から信号「ワレ、コウゲキタイノカイシユウチテソニムカウ、キカンノケントウヲキタイスル」以上です」

空母萃鶴、勇鶴、そして、護衛の駆逐艦8隻は攻撃隊の回収地点に向かった

翔平

「よし我々も真珠湾に向かうぞ、艦長! 機関一杯、進路真珠湾へ」

艦長

「よーそろー」

第一連合艦隊は、真珠湾に針路をとつた

## 第七話 運命の開戦（後書き）

作者「いよいよ開戦だ」

播磨「今日は、更新が早かつたわね」

作者 ー その代わり、話が短いけどな、ハツハツハト

「一回、開封の御内閣にかづかれて、

作者 なんか 開こえたけど気にならしく

撒磨　そよ　しゃあ心の準備はいし  
三省　くわく　元氣　くわく

作者　六　方語云六三六

指揮の45マソチ／オレガノが、作曲

作著「才、才チツ#マシヨ」

番替「二んの・・バカ乍者う！」

作者「ギヤアアアア～～～」

播磨「やりあせたかしら、うん?」

作者の落としたプリントを播磨が持

播磨「え」と、作者は来週から期末考査に入

うことは、小説の更新できないことなの・・・えへへ戻ってきて説

明しなさし  
作者

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 第八話 真珠湾奇襲

12月8日（日本時間）

真珠湾

現在真珠湾に近い空域には、第一連合艦隊の艦載機であるF-22、80機、F-2、60機、E-2D、6機が編隊を組み、真珠湾に近づいていた。攻撃隊の隊長は山口昇中佐である、

山口

「そろそろ見えるはずだが

??

「隊長見えてきました」

今喋ったのは、一番機の木之本哲也少佐だ

山口

「いよいよだ、各機打ち合せ道理にやれよ」

全員

『了解』

山口

「全機攻撃開始」

全員  
『了解』

山口は、機体を旋回させ、攻撃目標のヒッカム飛行場へと向かつた  
30分後、真珠湾は、地獄に変わっていた、艦船は、沈み、飛行場  
の滑走路には大穴があいていた、無事な所は、燃料タンク群と3隻  
の戦艦と駆逐艦数隻であった、

戦艦メリーランド 艦橋

「抜錨だ！ 急げ、ジャップの戦艦が来るぞ」

「J-1、戦艦メリーランド艦内は、大慌てで出港準備をしていた

「艦長、ジャップの戦艦は、どうやら新型のハリマクラスの模様で  
す」

「何ーじゃあ、あのGF2が来てるのか！？」

米国を、始め、連合国軍は第一連合艦隊の事は名前だけは、知つて  
いた、

「艦長どうしますか？」

メリーランドの副長が尋ねる

「Jのまま、いてもただの的だ、出港する」

「アイアイサーー」

10分後戦艦メリーランドは、生き残った、戦艦テネシー、カリフ  
オルニア、駆逐艦数隻を連れて、真珠湾  
から出港した、

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、主砲射程内に入りました」

今、第二連合艦隊は、真珠湾から120キロ離れた海上を、航行し  
ていた

翔平

「よし、全戦艦砲撃開始！弾種榴弾！目標燃料タンク群！」

艦長

「撃ち方始め！！撃！～つ～！」

カツ ズドオオーン

播磨の主砲の先の方が光り、光線を放つた

翔平

「そりゃあ、レールガンに変わったんだよな」

播磨

「そうよ」

カツ ズドオオオーン

翔平

「早いな、まだ5秒も経つてないぞ」

播磨

「日本の技術の結晶ね」

翔平

「そうだな」

カツ ズドオオオーン

レールガンが3回目の光線を放つた

戦艦メリーランド 艦橋

「なんだ!? 何が起こった」

あわてる艦長理由は、いきなり真珠湾の燃料タンク群が凄い勢いで燃え始めたからだ

「わ、分かりません、しかし見張り員からの報告では西の方から青白い光が見えたそうです」と報告する

副長

「西? その方角は、ジャップの艦隊がいる方向だが、偵察機からの

報告だと一〇〇キロ以上距離があるさあだ

艦隊は疑問に思つ

「ロケットかもしれません」

副長が叫び

「うむ、やうだとしても、このままでは、真珠湾せ、もつとひどいことになるべ、」

艦長が叫び

「はこ、駆除せよしづく」

と叫ぶ

「機関室、出せぬだけでいい、罐をめいつぱいたいてくれ」

戦艦メリーランドの速力は二三ノットで近づいていた

イージス戦艦播磨

葵

「艦面一・二・二〇から報生一・真珠湾から戦艦三隻を含む艦隊が出港したそりです」

翔平

「そりゃ、・・・よし艦隊決戦だ、」

啓太  
「やるんか?」

翔平  
「そうだ、」

啓太  
「よつしゃー、操艦の事なら任せてや」

翔平

「なんで、そんなに気合が入るんだか?」

播磨  
「さあ?」

翔平

「とりあえず、最大戦速」

啓太

「よ～そろ、最大戦速」

オワフ島近海

戦艦メリー・ランド 艦橋

「敵艦隊視認！ 戦艦6隻や10隻？」

これは、播磨に、随伴する巡洋戦艦天羽を戦艦と見間違えたのだ

「戦艦が10隻！？」

呆然とするメリーランド艦長

「か、艦長」

副長が艦長に話し掛ける

「くそ、差し押さえででも一隻は貰つてこくぞ」

艦長の決意に艦橋が凍りついた

「か、艦長？！ 正氣ですか？」

副長が尋ねる

「ああ、俺は、正氣だ、」

艦長が答える

「了解しました」

イージス戦艦播磨 艦橋

葵

「CICより報告、敵戦艦、針路変更！巡洋戦艦十六夜に艦首を向けました」

翔平

「何！体当たりする気か、啓太！針路変更だ、急げ！！」

啓太

「了解！面々舵、機関一杯！」

艦長

「よ～そろ～」

翔平

「間に合えよ」

イージス巡洋戦艦十六夜

？？

「く、ぶつけん気か、取舵一杯！最大戦速！」

今喋つたのは、イージス巡洋艦十六夜艦長、山崎雄哉大佐だ

副長

「了解」

巡洋艦十六夜は、急速に針路を変えたが、敵戦艦メリーランドの主砲弾が命中した

十六夜

「くつ・・・」のくらいで・・私は、死にません」

雄哉

「被害報告急げ」

副長

「後部甲板エレベーターに被弾！甲板直下の艦載機格納庫大破！火災発生！現在全力で消火中です」

雄哉

「そうか、浸水は？」

副長

「ありません」

機関長

「艦長！」

機関長の大西秀介中佐があわてて、報告をしだした

雄哉

「どうした！？」

秀介

「今の衝撃で、燃料タンク破損、安全のため、主機関を止めます」

巡洋戦艦天羽型は、イージス戦艦播磨と同じ純水素タ・ビンエンジンを、使用している、水素燃料の引火

点が低く、爆発の恐れがあるために、機関長は主機関を止めたのだった

雄哉 「なんだと！」

秀介

「現在、副機関のディーゼルエンジンを起動しましたが、現在の出せる速力は半分の32ノットです」

雄哉

「そうか……反撃だ、主砲射撃始め、目標敵戦艦、艦橋」

砲雷長

「了解、主砲射撃始め、目標敵戦艦、艦橋・射撃準備完了」

十六夜の30センチレールガンが、回頭した

雄哉

「撃ち方始め！…撃！…つ！…」

カツ ズドオオーン

十六夜の主砲が9本の光線を放った

砲雷長

「敵戦艦艦橋に命中確認」

副長 「敵戦艦、速力低下」

雄哉

「よし、火災の方は？」

副長

「あと、10分ほどで消火する見込みです」

雄哉

「そうか」

戦艦メリー・ランド

その頃メリー・ランドは、大混乱であつた、艦橋が被弾し艦長以下、艦橋に居たものは、全員戦死し、おまけに米旧式戦艦独特の籠型マストは折れて指揮系統が麻痺していた、その艦橋に艦魂が一人転移してきた、

？？

「メリー・ランド、大丈夫ですか！！」

メリー・ランド（以下長いのでメリー）

「…テネシー…さん」

どうやら、メリーが心配で飛んできたみたいだ

テネシー

「手当てしなきや」

その頃、テネシーが降伏し、それに続いてカリフォルニア、メリーランドも降伏した、各戦艦の乗組員は、生き残った駆逐艦に全員を乗せオアフ島に帰還させた、

イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「さて、捕獲した戦艦をどうするか・・・そうだ神戸がいるじゃん」

播磨

「そうね、ちょうど3隻がきてるはずよ」

神戸とは、呉型自走浮きドックの小型のドックであり艦隊隨伴型でもある、補給艦隊として、もうじき来るはずだ、ちなみに、呉型が出せる速力は、25ノット、神戸型は35ノット出せる

翔平

「さて、じゃあ、合流地点まで曳航するか

播磨

「疲れそうね」

翔平

「播磨、十六夜の所まで連れつてくれ

播磨

「いいわよ」

イージス巡洋戦艦十六夜

雄哉

「十六夜、大丈夫？」

十六夜

「大丈夫よ」

雄哉

「そうか、よかつた」

十六夜

「誰か来たみたいよ」

雄哉

「誰が？」

翔平

「邪魔するよ、おつと山崎艦長もいたのか」

雄哉

「長官！ いつ本艦にいらしてつたんですか」

翔平

「何時つて、つこさつきだけど、十六夜大丈夫か？」

十六夜

「大丈夫です、長官私のためにわざわざ來たんですか？」

翔平

「やつだけど？」

十六夜

「ふつ、そうですか」

翔平

「一体どうしたんだ？」

雄哉

「長官、そろそろ仕事に戻った方がいいと思いますよ」

翔平

「なんで」

雄哉

「清水参謀長が、「分かった、今すぐ戻る、播磨…つていない」…

・

翔平

「十六夜…」

十六夜

「分かりました、送りましょう」

翔平

「ありがとうございました」

「うして真珠湾奇襲は成功し第一連合艦隊は空母部隊との合流地点

に向かつた

## 第八話 真珠湾奇襲（後書き）

作者「テスト期間中なのに更新だ」「

十六夜「今日のテストはどうだったの？」

作者「オワタ～」

十六夜「ちなみに明日は」

作者「はつはつは、聞かないでくれ」

播磨「え～と明日は、作者の苦手な英語みたいよ」

作者「え…なぜそれを…・・・」

十六夜「英語くらいできなきゃいけません、こっちに来なさい」

作者「え～、だ、誰か助けてくれ～」

作者は十六夜に襟首をつかまれて部屋に戻った

播磨「～」意見、「～」感想お待ちしています「

## 第九話 合流

12月9日

イージス戦艦播磨 長官室

翔平

「・・・」

作戦報告書默読中だ

翔平

「・・・よし、上々だ」

その時、長官室の扉がノックされた

翔平

「どうぞ・・・どなたですか?」

翔平は長官を任せられてから、ほとんどの人、艦魂と話してきたので、顔は覚えていた、が入ってきた、少女は、全く見たことがなかった

テネシー

「私は、戦艦テネシーの艦魂テネシーです」

翔平

「テネシーさん何か御用ですか？」

テネシー

「この、艦隊の司令官に挨拶をと、・・・あなた本当に司令官?」

ガツタン

翔平

「な、何を言つてるんですか」

テネシー

「若すがいむ」

翔平

「・・・俺は、正真正銘、この第一連合艦隊の司令官です」

テネシー

「・・・」

その時、播磨がやつてきた

播磨

「翔平、神戸達が来たわよ・・・誰?」

翔平

「そつか、播磨、テネシー、最上甲板に行へぞ」

播磨

「ちよ、ちよつと待ちなさい~」

テネシー

「あの～」

播磨

「うん？あなた誰？」

テネシー

「テネシーです」

播磨

「へ～あなたが、私は、播磨この艦の艦魂よ」

イージス戦艦播磨 最上甲板

翔平

「来たか」

補給艦隊が護衛の駆逐艦に守られてやってきた

翔平は、艦内電話を取り、艦橋へ連絡した

翔平

「・・・艦長、対潜、対空警戒を厳重に、・・・よし分かった」

播磨

「翔平」

翔平

「播磨か

テネシー

「長官、何をするつもりですか?」

翔平

「見たらわかる、テネシーあの艦はなんだと思ひ

テネシー

「特大の油槽艦ではないのですか」

播磨

「翔平、横から見たら誰だつて油槽艦だといつわよ

翔平

「あたりまえだ、そう思つよつて設計をされているんだから、テネシ  
ーあれは、浮きドックだ」

テネシー

「えへへ」

自走浮きドック神戸 艦橋

今神戸は、歯獲艦メリーランド後方800mまで接近していく

水兵

「艦長、田標艦まで800を切りました」

艦長

「速度5ノット、針路このまま、ドック注水」

水兵

「よ～そろ～」

神戸のドックが注水された

水兵

「ドック注水完了、目標艦まで500」

艦長

「機関停止」

神戸の機関が止まり、惰性で進んでいた

水兵

「目標艦まで100」

艦長

「ゲート開け」

水兵

「ゲート開きます」

神戸のゲートがゆっくりと開かれた

水兵

「目標艦まで50…40…10…入渠確認」

艦長

「機関後進、速度2ノット」

神戸が後進をかけて、停止した

艦長

「機関停止、ゲート閉め、艦固定」

水兵

「よ～そろ～」

戦艦メリーランドの艦体が固定された

水兵

「艦固定完了」

艦長

「ドック排水、作業員作業開始」

鹹獣艦メリーランドに続いてテネシー、カリリフォルニアもドック入りし改装が始まった

翔平

「テネシー、驚いたか？」

テネシー

「正直、日本がこんなに技術が高いとは思わなかつたです

翔平

「そうか、そりやあ、そうだよな、」

何やら一人で納得していた

テネシー

「？」

翔平

「テネシー、この艦の中は自由に見学していいが、迷うなよ」

テネシー

「長官は、私をバカにしているのですか？」

翔平

「いや本気で言っている、本艦は上下1-2層に分かれている、しかも各層が、2000くらいの区間に区部されているから、迷子にならない方がおかしい」

テネシー

「・・・」

播磨

「どうしたのテネシー？」

テネシー

「あ、いや複雑すぎでは、ないでしょ？」「？」

翔平

「そうだな、よく迷子になるやつもいるへりこだ」

テネシー

「水兵泣かせの艦ですね」

播磨

「なによ、それ？」

翔平

「はっはっはっは

その後、第一連合艦隊は、補給をしてウエーク島攻略支援のため、艦隊を分散した、日本に帰還する艦は、日本に針路をとり、本隊から離れていった

イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、強襲揚陸艦新宿より無線連絡です」

新宿とは、第一連合艦隊が未来から持つってきた艦の一隻であり艦内には、L C A C 4隻、20式戦車20輢、155mm自走砲20輢、諸車両100輢が、積まれている

翔平

「うん、私だ

？？

「長官、支援に感謝します」

無線の向こう側で話しているのは、上陸隊隊長の野村純平大佐だ

翔平

「早いとこ、終わらして次に行きましょう」

純平

「分かりました」

無線が切れた

翔平

「10分後に砲撃を開始する」

全員

「了解」

10分後

翔平

「全艦砲撃開始」

艦長

「撃ち方始め！！撃～～つ！！」

カツ ズドオオオーン

ドン ドン ドン

播磨を始めとする戦艦隊から駆逐艦部隊の秋月までの全艦が砲撃を

していった

播磨

「こまままだと、島の形が変わっちゃつわよ」

すでに砲撃を開始して20分が経っていた

翔平

「ふつ、そうだな、砲撃止め、上陸開始」

啓太

「了解」

この上陸作戦は成功の内に終わり、第一連合艦隊は帰投した

## 第九話 合流（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています

## 第十話 フィリピン攻略

12月11日

フィリピン沖

現在フィリピン沖120キロの海上には、戦艦大和を旗艦とする第一連合艦隊がいた、

旗艦 戦艦大和 艦橋

山本

「向こうの作戦は、大成功だつたようだな」

宇垣

「はい」

水兵

「電探室から報告！接近中の航空機あり！偵察機の模様」

山本

「林君からもつた、誘導弾を試すか」

宇垣

「はい長官、一式対空誘導弾発射用意」

砲術長

「了解、一式対空誘導弾発射用意、電探と連動！」

大和に配備されている、一式対空誘導弾は、大和以下主力艦に配備されている、ちなみに、大和型戦艦は、史実とは違い、51cm砲を9門、完全防御方式を採用している、大和型と同じように、長門型もワンランク上の主砲つまり46cm主砲9門を搭載し、ほかの戦艦は41cm砲9門に統一されている

水兵

「電探と連動、目標補足」

砲術長

「発射」

「ゴー ウーー

誘導弾は轟音を立てて、敵機に向かって飛んで行った

宇垣 「長官、誘導弾は当たるんでしょうか」

山本

「分からん、だが未来では、いついた兵器が使われている」

宇垣

「恐ろしいものですね」

山本

「そうだな、だが誘導弾を使いこなせれば、空襲にもびくつかなくて済む、もしこれがだめでも、今日日本の艦は対空火器の城だ」

宇垣

「そうですね、対空火器の方は兵たちも慣れております」

水兵

「敵機視認、……誘導弾命中確認！」

山本

「つまくこったようだな」

宇垣

「はー」

水兵

「長官、誘導弾命中の前に敵機からの電波を観測しました」

山本

「どうやら、招待されない客が来そうだ」

宇垣

「戦闘機部隊をだしますか？」

山本

「ああ、そうしてくれ、後ろの輸送船隊はどうしても守らなければ

な

宇垣

「はい、各空母に打電、護衛戦闘機隊発艦せよ」

現在第一連合艦隊には、第一連合艦隊の空母鳳翔、鳳凰の一隻が派遣されていた

空母鳳翔、鳳凰の飛行甲板からF - 22ラブター発艦した、

空母赤城 防空指揮所

？？

「F - 22ラブターか、日本名を考えないとね

？？

「ふつ、そうね、赤城」

赤城

「加賀、何時の間に」

加賀

「今来たところよ」

赤城

「さて、どんなのがいいかしら」

加賀

「そうね~」

？？

「なにをしてるんだ?」

赤城

「小沢、艦橋に居なくていいの」

小沢

「いいんだよ、ところで何をしてたんだ?」

加賀

「ラブターの日本名を考えていたところです」

小沢

「そりが、で何にするんだ?」

赤城

「まだ考へてゐる途中です」

小沢

「じゃあ一緒に考えよ!」

加賀

「いいんですか、作戦の途中ですよ」

小沢

「おつと、そうだった、また後でな」

小沢中将は、艦隊指揮のため、艦橋に戻つていった

赤城

「さて考えるか」

赤城からも、防空戦闘機の零戦52型が飛び立つていつた、この零戦52型も史実とは違い、F6Fなら互角に戦える性能を持つていた、

旗艦 戰艦大和 艦橋

宇垣

「長官、戦闘機隊の発艦完了しました」

山本

「そりが」

水兵

「電探室より報告、敵機来襲! 数約80機」

山本

「対空戦闘用意!」

宇垣

「長官、戦闘機隊が全部落としますよ」

山本

「いや、あらかじめ、10分の1は残すよ!」と言つてある

宇垣

「なぜですか？」

山本

「まだ、速射砲や機関砲の操作に慣れていない者もいるからな、訓練は十分したが、実戦と訓練違うからな」

宇垣

「そうですね」

B - 17を含む攻撃隊は第一連合艦隊近くにつつあった

爆撃機機長

「偵察機からの報告だとこの辺のはずだが」

戦闘機隊隊長

「敵戦闘機接近！な、速い！」

ゴー、F - 22が高速で敵攻撃隊に接近し、攻撃を開始した  
F - 22の20ミリ機関砲が命中し米軍のP - 40は、爆散した、  
F - 22が護衛戦闘機の相手をしているうちに、零戦52型がB -  
17に挑んでいた

零戦のパイロットはB - 17を半分撃墜したところで、旗艦戦艦大和から通信が入った

『旗艦大和より、戦闘機隊へ、これより本艦は対空戦闘を行う、至急退避せよ』

戦闘機隊は、敵機から離れ米軍搭乗員は、疑問に思ったが目の前の大艦隊が見ると、そんな疑問は、飛んで行つた。

爆撃機隊 隊長

「あの、でかいやつをやるぞ、全機ついてこい」

砲術長

旗艦 戦艦大和 艦橋

「主砲射撃用意！電探と連動、弾種三式弾」  
大和の51cm主砲が敵機に照準を定める、ちなみに三式弾は近接信管になっている

水兵

「射撃準備完了！」

砲術長

「撃ち方始め……撃……つ……！」

ズドオオオーン

三式弾は、見事に敵機の周辺で炸裂し、10機のB-17のうち、7機がジュラルミンの塊となって落ちて行った

砲術長

「ちつ、まだ残ってるな、127mm速射砲射撃開始！」

大和に装備された、速射砲が敵機に照準を定め射撃を開始する  
ドン、ドン、ドン

砲弾が敵機に命中した

山本

「これほどの命中率とは

宇垣

「はい、私もこれほどまでは思いませんでした」

山本

「よし、マニラへ急ぐぞ」

宇垣

「了解

その後、第一連合艦隊は、マニラを砲撃しマニラを占領し、マッカーサー元帥は、捕虜となり、その後捕獲した輸送艦で、米本土へと送られた。

## 第十話 フィロソフィン攻略（後書き）

作者「更新！」

播磨「作者が壊れた」

作者「はつはつは」

播磨「次回の更新はいつになるのかしら」

作者「分らん！」

十六夜「へへ、私を被弾させておいてね～」

作者「げつ・・・（十六夜がなぜここに）」

十六夜「・・・何回死にたいですか？」

作者「できれば生涯で一回がいいな」

言い終わると同時に、全力で逃げる作者

十六夜「逃がしません」

十六夜も全力で作者を追いかけた

播磨「・・・」意見ご感想お待ちしております

## 第十一話 シンガポール攻撃

1月12日

ブルネイ

現在ブルネイでは、第一、第二連合艦隊が集結していた、第一連合艦隊の艦艇はブルネイ産の石油で腹を満たしていた、

第一連合艦隊旗艦 戦艦大和

山本

「林君、いよいよシンガポールを攻略するぞ」

翔平

「いよいよですか」

山本

「陸軍が新型戦車配備が完了したからな」

翔平

「一式中戦車の事ですか？」

今までてきた、一式中戦車とは、第一連合艦隊の技術が提供され生まれた、中戦車であり、M4なら、互角以上に戦える性能を持つて

いる

山本

「3日後に出撃する予定だが、英独東洋連合艦隊の陣容は、分かる

か」  
翔平

「はい、暗号無線解読、偵察機による航空写真で確認しましたが、大艦隊です、英戦艦2隻、独戦艦2隻、英戦艦はキングジョージ5世型が2隻、独戦艦はビスマルク型だと思われます、ほかに

は、英巡洋戦艦フッド、レパルス、レナウン、独巡洋戦艦シャルンホルスト型が2隻他巡洋艦、駆逐艦多数・・・どう思います山本長官、ヒトラーは何を考えているのでしょうか？」

山本

「確かに、英國ならまだしも、獨国の艦隊は、これは獨海軍の水上艦艇の8割以上だな」

??

「大方、英國のチャーチルに対抗したんでしょう」

翔平

「うわ！や、大和急に出てきて、びっくりするじゃないか」

大和

「別に驚かしたつもりは、有りませんけど」

山本

「いきなり出てきたら、どんな人間でも驚くさ」

翔平

「うん、そうだぞ大和」

大和

「そうですか、これから氣負つけます」

山本

「よし三日後に出撃する、大和も各艦魂に伝えてくれ」

大和

「宜候」

大和は光とともに消えていった

翔平

「では、長官私も準備があるんで」

山本

「搖動の方は頼んだぞ」

翔平

「任してください」

1月15日

第一、第二連合艦隊は出撃した、なお第一連合艦隊の第二戦隊つまり、扶桑、山城、伊勢、日向は、護衛の巡洋艦、駆逐艦にも守られ本土防衛のために帰還した、これは、第一連合艦隊の常陸が、ここ最近で米国の無線情報が活発化しているのを、キャッチしたからだ、

第一連合艦隊旗艦 イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「順調だ」

播磨

「そうね」

水兵

「ソナーに感あり、11時方向」

翔平

「対潜戦闘用意！数は」

水兵

「一隻です」

翔平

「友軍ではないのか」

水兵

「いえ、この音は、たぶんリポートです」

翔平

「どうか、駆逐艦秋月に打電、五式対潜ミサイル発射だ」

水兵

「了解」

駆逐艦秋月

艦長

「旗艦から発射命令が来たぞ」

砲雷長

「はい！五式対潜ミサイル発射用意」

水兵

「VLS、五式対潜ミサイル、データ入力完了！」

艦長

「発射！」

グワツ ズツシヤアアア

砲雷長

「五式対潜ミサイル、目標に向かつて飛翔中」

水兵

「敵潜からの電波を受信しました」

艦長

「旗艦へ報告」

水兵

「宜候！」

イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「そうか、シンガポールの飛行場には航空機何機あつた？」

葵

「え～と、重爆撃機が60機、軽爆撃機が40機、戦闘機多数だそうです」

翔平

「ほ～、英國も結構やるな～」

播磨

「そうね」

葵

「長官、なんで他人事みたいに言つていいんですか……」

翔平

「え、…………なにが?」

播磨

「まあまあ、参謀落ち着いて」

葵

「播磨! 貴女もです!」

播磨

「え、…………私ちょっと、鳳翔の所に行つてくる」

翔平

「へー? 播磨なら俺も行……措いてかれた」

葵

「長官」

翔平

「う～～～（播磨後で覚えてるよ）」

こうして、翔平は、清水参謀長の説教を小一時間ほど聞かされた、

啓太

「長官、偵察に出ていた幻夜が敵の大編隊を発見しました、てつ、

長官まだ怒られてたんですか」

幻夜とは、E - 2Dの日本名だ、

翔平

「そんなことは、どうでもいい、何機見つけたんだ!」

啓太

「はっ、敵爆撃編隊接近! 数約140」

翔平

「来たか、各空母に連絡、攻撃隊発艦せよ

啓太

「宜候」

空母 鳳翔 飛行甲板

鳳翔

「久しぶりの出番だ~」

鳳凰

「そうね」

播磨

「敵が来たみたいよ」

鳳翔

「くくっく

鳳凰

「どうしたのよ」

鳳翔

「全機発艦! 敵を蹴散らせ! !」

鳳凰

「・・・(変なスイッチが入ったみたいね)」

この会話の間に攻撃隊の音神という名になつた、F-22、さらに蒼山という名になつたF-2、がシンガポール攻撃のために飛び立つていつた、

イージス戦艦播磨 CIC

攻撃隊が発艦して30分後、播磨の電探が140機の編隊を探知した

水兵

「対空レーダーに感、機影多数発見! 戰闘機30、大型爆撃機60、小型爆撃機40、本艦隊に向かつて急速接近中! 接敵まで約1時間です」

砲雷長

「対空戦闘用意!」

ウ〜〜、ウ〜〜、ウ〜〜

警報が艦隊のいたるところで鳴り響いていた

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「全艦対空戦闘用意！一式対空ミサイル、射程圏内に入り次第発射せよ、ただし、発射弾数は、全艦5発までだ、いくらこの時代でも、弾薬の生産ができるように、なつたとはいえ、まだ大量生産ラインに乗つていなければ」

日本各地で増設された、兵器工場で、各種ミサイル、砲弾、機関砲弾などを増産体制を調経つつある。

啓太

「了解、各艦へ、連絡します」

このことが、各艦へ連絡された、

イージス戦艦播磨 CIC

水兵

「敵編隊、一式対空ミサイルの射程圏内に入りました」

ちなみに、一式対空ミサイルの射程距離は、200kmだ

砲雷長

「一式対空ミサイル発射用」意！弾数5！後部VLS発射用意！VL  
S発射用 意、イルミネーター連動！」

砲雷長

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

グワツ ズツ シヤアアア

白い煙を噴き上げて発射される、一式対空ミサイル、その数は、90本、90本の矢が今、敵編隊に襲いかかろうとしていた。

水兵

「一式対空ミサイル着弾まで5秒…3…2…1…着弾！」

砲雷長

「敵編隊90機を撃墜、敵残機50機」

水兵

「敵編隊針路変えません、接敵まで残り30分、まもなく主砲の射程圏内に入ります！」

イージス戦艦播磨 艦橋

翔平

「全艦主砲射撃用意！」

46センチレールガンの射程は120キロ、もちろんいくら優秀なレーダーがあつても、そう簡単に命中するわけない

播磨

「翔平、こんなに遠くからじゃ、私も充てる自信はないわよ」

翔平

「それは承知の上さ、射撃は、距離が8万になつたら射撃開始」

艦長

「宜候」

イージス戦艦播磨 CIC

砲雷長

「主砲射撃用意！弾種三式弾！」

水兵

「データ入力、距離8万1千、射撃準備完了！」

砲雷長

「距離8万で射撃を開始せよ」

水兵

「宜候…距離8万撃ち方用意！」

砲雷長

「主砲、撃ち方始め、撃～～～！」

カツ ズドオオオーン

播磨の主砲の方のが光り、光線を放つた

上空

英爆撃隊は、先ほどまで順調に飛行していたが、先ほどの攻撃「？」によつて既に90機を失つていた、

爆撃機隊 隊長

「くそ、何故だ、何故いきなり90機も墜落したんだ！！！」

その時、米軍から貸し出された、B-17の機体が大きく揺れた

爆撃機隊 隊長

「なんだ、何がおこ『ドーナン』…」

後方を飛んでいたB-17が爆散した

爆撃機 機長

「隊長、後方を飛んでいた、B-17がやられました、本機も第一エンジンがやられました」

レールガンの齊射で編隊の半分つまり20機前後が墜落した、ほかの機体も、少なからずの損傷を受けていた。

爆撃機隊 隊長

「くつ、全機基地へ帰投せよ」

英爆撃隊は、第一連合艦隊を見ることなく基地へ帰投したが今その基地が攻撃を受けている最中であった。

シンガポール要塞

英軍兵1

「段幕を密にしろ！くそ、あんなに敵機が速いなんて聞いてないぞ、情報部は何をしていた！」

英軍兵2

「くつ、銃身が焼ける、水だ」

英軍兵 3

「おい、弾もつてきてくれ、急げ！」

英軍兵 4

「くつ、何が優秀なドイツの高射砲だ、全然当たらないじゃないか」  
シンガポールには、英、独、米の混合部隊が必死に、弾幕を張つて  
いた。だが音神が速すぎて、照準が全然合つてなかつた。

英軍兵 1

「ああ、飛行場が…」

この時すでに飛行場には大穴があき、燃料タンク、弾薬集積所で誘  
爆が起こつていた、

英軍兵 4

「敵機が引き揚げます」

音神と蒼山は風のように母艦に帰つて行つた。

イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「そうか、シンガポールに艦隊はいなかつたか」

啓太

「長官！、第一連合艦隊から入電です！」

翔平

「内容は？」

啓太

「え〜『本艦搭載電探二感アリ、英独東洋連合艦隊ト判断ス、コレ  
ヨリ本艦隊ハ、敵艦隊 二、突撃セントス』以上です」

翔平

「そつか、艦隊を分けるぞ、第一、第二、第三航空戦隊は、第三、  
第四、第五駆逐艦隊とともに、北へ退避、ほかは、全部ついてこい」

啓太

「宜候」

翔平

「さて、艦隊決戦と行きますか、全艦最大戦速」  
播磨以下戦艦5隻、巡洋戦艦6隻、駆逐艦12隻は、  
超える速度で、敵艦隊との会敵予想地点に向かつた。  
50ノットを

第十一話 シンガポール攻撃（後書き）

作者「ふつ、疲れる」

播磨一  
こんな程度で疲れてどうするの作者

作者「やつて、冬休みに入つてないのに、冬休みの宿題が出たん  
ざ」

播磨「もつやつてるの?」

作者 美乃口前方 50歳 女性 会社員

作者「もちろん遊ぶに決まって…十六夜さん

十六  
心の浴儀はいいですか

十六夜「さよなら」・・・

作者：ナイアはいしてでも、レーリー川カンは人に向けたら、キヤニア

十六夜「『』」感懸翁持其事而作之

## 第十一話 マレー沖海戦

1月15日

マレー半島沖

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

現在大和以下第一連合艦隊は、英独東洋連合艦隊に向けて針路をとつていた、

山本

「敵艦隊との距離は」

宇垣

「約6万です」

山本

「そうか、距離4万になり次第砲撃開始だ」

宇垣

「了解」

山本

「第一連合艦隊はこの海戦に間に合ひうかな」

宇垣

「どうでしょ、第一連合艦隊の戦艦は50ノットを超えるもんですね」

山本

「そうだ、俺も一回、演習につけあつたことがあるが、あれは高速戦艦の枠を超えている早さだつた」

宇垣

「そうですね、本艦も未来のエンジンの採用により、最大速力は35・46ノットを出せる高速戦艦ですが、本艦と比べたら、播磨型

は化け物ですよ」

山本

「それもそつだな」

水兵

「電探に感あり、偵察機の模様、まもなく一式対空誘導弾の射程に入ります!」

艦長

「一式対空誘導弾発射用意!」

砲術長

「宜候、一式誘導弾発射よーい、電探と連動!..」

水兵

「電探と連動、目標補足!」

砲術長

「発射!..

グワツ ズツシヤアアア

誘導弾は轟音を立てて、敵機に向かつて飛んで行った

水兵

「一式対空誘導弾着弾まで5秒…3…2…1…着弾!..」

水兵

「敵機撃墜、確認!..」

山本

「ほう、結構なれたみたいだな」

宇垣

「そうですね」

艦長

「現在、敵艦隊との距離4万8千を切りました」

山本

「全艦砲撃戦用意! 目標、英独東洋連合艦隊」

宇垣

「宜候!..」

砲術長

「砲撃戦用意！」

水兵

「主砲、電探と連動…よし！」

水兵

「光学照準いつでも行けます！」

砲術長

「弾種徹甲弾！射撃用意！」

大和の主砲に51cm徹甲弾が装填される

水兵

「射撃用意よし！」

砲術長

「距離4万まで待機せよ」

水兵

「了解」

水兵

「距離4万2千」

砲術長

「まだだ」

水兵

「距離4万1千…距離4万！」

山本

「艦長。撃ち方始めだッ！！」

艦長

「撃ち方始めッ！！」

砲術長

「撃ええ―――ッ！」

ズドオオオオ―――ンッ！！

翔平

「始まつたな」

播磨

「始まつたわね」

翔平

「艦長、あと何分で射程圏内に入るか」

艦長

「あと約5分です」

翔平

「そうか」

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

水兵

「敵艦隊発砲ッ！！」

見張り員の報告に防空指揮所にいたウェールズが笑う。

ウェールズ

「ふん。あんな距離から当たるもんですか」

ヒュウウウーーンッ！！

ズシュウウウーーンッ！！

ズシュウウウーーンッ！！

この時、プリンス・オブ・ウェールズ以下の戦艦は主砲塔を右舷側へと旋回中であった。

同航戦の体勢となつた敵の単縦陣へと主砲塔を向けてたのだ。

そこへ、四隻から放たれた砲弾36発が時間差をつけて落下してきました。

それらは、一瞬で海面を沸騰させ、巨大な水柱を立ち上げた。しかしも

ウェールズ

「初弾から夾叉ですってッ！！」

ウェールズは愕然とした。

大和、武藏、長門、陸奥の放った砲弾は一斉射程から夾叉つまり、その落下範囲内にウェールズを捉えていのだ。

水兵

「敵先頭艦再び発砲ッ！！」

見張り員の悲鳴みたいな報告にウェールズは顔を青ざめた。  
そして51cm砲弾が再びウェールズを襲った。

ズガアアアーーンッ！！

戦艦プリンス・オブ・ウェールズに51cm砲弾が命中した。

ズガアアアーーンッ！！

ズガアアアーーンッ！！

旗艦プリンス・オブ・ウェールズの艦首から黒煙が吹く。

ウェールズ

「キヤアアアアアアアアアツ！！」

防空指揮所でウェールズが絶叫した。

辺り一面に血が飛び散る。

トーマス

「ひ、被害報告ッ！！」

艦橋でトーマスが焦りながら副官に命令する。

水兵

「被害報告ツ！！A主砲塔に敵砲弾一発命中ツ！！A主砲及びB主砲は射撃不能、弾薬庫誘爆の危険があります！！」

トーマス

「なんだと、主砲が2基も使えないというのか！！」「キング・ジョージ？世型は前部の所に6門後部に4門という、変則的な主砲のレイアウトをしている、いま、ウェールズは、A主砲塔に大和の51センチ徹甲弾が命中してA砲塔はくだけ、爆発の衝撃でB砲塔の主砲が曲がってしまった、

リーチ艦長

「提督！このままでは、いずれ弾薬庫に引火し大爆発を起こしてしまいます、弾薬庫に注水します！」

トーマス

「仕方あるまい、指揮を2番艦のキング・ジョージ？世に渡す、本艦は戦闘海域をり・・・」

トーマスは次の言葉が言えなかつた、長門が放つた、46センチ徹甲弾が命中し機関室から火災が発生したからだ、

水兵

「艦中央に敵弾命中！敵弾は装甲を貫通！機関室火災発生！」

トーマス

「馬鹿な！装甲を貫通だと・・・」

水兵

「機関室連絡途絶！」

水兵

「艦停止します！」

水兵

「後方より、キング・ジョージ？世接近！衝突コースです！」

リーチ艦長

「総員衝撃に備えろ！」

水兵

「旗艦に命中弾！火災を確認！」

艦長

「これより指揮を継承する、全艦最大戦速！各個自由射撃せよ！」

水兵

「プリンス・オブ・ウェールズの機関停止を確認！このままでは、衝突します！！」

艦長

「面舵一杯！！右後進！左前進一杯！急げ！」

水兵

「ア、アイ・サー！」

キング・ジョージ？世は急速に針路を右に変えたが、プリンス・オブ・ウェールズもこの時、針路を右にとつて惰性で進んでいた、

水兵

「プリンス・オブ・ウェールズ面舵をとりました！」

艦長

「なんだと！」

水兵

「駄目だ、ぶつかるぞ！」

艦長

「総員衝撃に備えろ！」

ガツコン ガガガツギギ

キング・ジョージ？世は、プリンス・オブ・ウェールズの艦尾に衝突した

独逸戦艦ビスマルク

水兵

「キング・ジョージ？世、プリンス・オブ・ウェールズ衝突しまし

た！」

砲術長

「艦長！あと少しで本艦の射程圏内に入ります！」

艦長

「機関最大戦速！ドイツ海軍の意地を見せてやれ！」  
艦橋に居た、水兵たちは、声にならない声で叫ぶ

砲術長

「主砲！射程内に入りました！」

艦長

「主砲射撃用意！目標敵超戦艦！撃て

」

砲術長

「撃ええーーーッ！？」

ズドオオオオーーーンッ！？

ビスマルクの38センチ主砲が火を噴く

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「英戦艦2隻戦闘力を損失した模様、独戦艦2隻突っ込んでできます

砲術長

「射撃目標変更！目標独戦艦！」

水兵

「あつ、敵艦発砲確認！敵弾来ますっ！」

艦長

「取舵20度！転舵急げっ！」

ガツキン

ビスマルクの38センチ主砲弾が大和甲板中央部分に命中した

艦長

「被害報告急げっ！」

水兵

「被害報告急げっ！」

「甲板中央に被弾！されど戦闘航行に支障ありません、ですが5番速射砲射撃不能！他機銃座が吹つ飛びました！」

山本

「砲術長！反撃だ目標独逸戦艦！主砲射撃準備急げっ！」

砲術長

「宜候！主砲射撃準備・・・完了！」

山本

「撃ええーーーツ！！」

ズドオオオオーーーンツ！！

大和、武蔵が独逸戦艦に向けて射撃を開始した

独逸戦艦ビスマルク

水兵

「敵先頭艦に命中弾確認！」

艦長

「やつたか？」

水兵

「敵艦、速度針路共に変化なし、本艦の攻撃効いてません！」

艦長

「なんだと！38センチ砲が直撃したんだ、効いていないわけが」

水兵：敵艦発砲「面舵一杯！機関最大戦速！」

グツワアアアア

大和が放つた51センチ徹甲弾は9発のうち3発が命中した、被弾箇所は艦首、後部艦橋、4番砲塔であった

艦長

「ひつ被害報告急げっ！」

水兵

「艦首に敵弾命中！浸水発生！」

水兵

「後部艦橋被弾！副長以下後部艦橋に居たもの全員戦死！」

水兵

「4番砲塔被弾、射撃不能！付近にて火災が発生中です」

艦長

「ダメージコントロール急げっ！」

グツワアアアア

艦長

「どうした！？」

水兵

「後続のティルピツツ艦橋に被弾を確認！速力低下落後していくます！」

これは、武藏の砲弾が命中したのだ

艦長

「なんだと！？」

水兵

「シャルンホルスト、グナイゼナウ、英巡洋戦艦、敵艦隊へ向かっていきます」

艦長

「まさか、本艦とティルピツツの盾になるつもりか！」

巡洋戦艦シャルンホルスト 艦橋

水兵

「後方より、英巡洋戦艦接近！」

艦長

「ふつ、考えることは、皆同じか…機関室出せるだけでいい速度を上げてくれ」

機関室

「了解！いきます！」

艦長

「砲術長射程に入り次第撃て、弾薬庫が空になるまでだ」

砲術長

「了解」

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「敵巡洋戦艦多数接近！」

艦長

「長官、敵もなかなかやりますな」

山本

「そうだな」

水兵

「後方に艦影多数確認！」

山本

「敵の増援か！」

水兵

「いえ、あれは播磨です第一連合艦隊の到着です」

水兵

「長官、林大将より無線です」

山本

「わかつた・・・山本だが」

翔平

「長官、遅くなりました」

山本

「いや丁度良かつたよ」

翔平

「では、これから作戦を開始します」

山本

「宜しく頼む」

翔平

「はい、ではまた」

山本

「これより、戦術Fを展開する、各艦に連絡！」

宇垣

「了解！ 戦術F展開！」

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

翔平

「戦術F展開！ 最大戦速！ 敵艦隊の後方に回る」

啓太

「宜候！」

播磨

「翔平、こんなに、成功するの？」

翔平

「人間やれば何でもできる！」

播磨

「そうね」

翔平

「各艦砲撃戦用意つ！」

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

トーマス

「被害報告つ！」

水兵

「艦尾にキング・ジョージ?世、衝突つ！ 推進軸、舵、大破！」

水兵

「火災！ 消火不能つ！ 応急指揮所にまで広がりましたつ！」

リーチ艦長

「なんだと、それでは自沈もできんのか！？」

水兵

「はい・・・残念ながら」

トーマス

「（砲塔はまだ使えるか？）

水兵

「はい、照準さえ出来ればいつでも使えます！」

トーマス

「よし、ロイヤルネービーの意地を見せやがれ」

リーチ艦長

「はい！（砲塔旋回！照準を敵艦隊へ！）

砲術長

「イエッサ ッ！！」

戦艦キング・ジョージ?世 艦橋

艦長

「被害状況報せつ！」

副長

「艦首大破！浸水により前進不能！」

艦長

「主砲は無事か！」

副長

「はい、大丈夫です、何時でも撃てます」

艦長

「撃ち方始めつ！！」

砲術長

「撃ええ―――ッ！！」

ズドオオオオ―――ンッ！！

第一連合艦隊 巡洋艦 十六夜

水兵

「敵巡洋戦艦接近シャルンホルスト型です！」

雄哉

「面白い！主砲射撃用意！十六夜行くぞ！」

十六夜

「はい」

砲雷長

「主砲射撃準備完了！」

雄哉

「主砲撃ち方始め！！撃～～つ！！」

力ツ ズドオオオーン

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

啓太

「敵艦隊の後方約30キロ地点です」

翔平

「全艦回頭180度！回頭が終わり次第、各艦自由射撃！作戦道理に行動せよ」

葵

「宜候！」

第一連合艦隊各艦は回頭を終えて射撃に移るつもりしていた

啓太

「回頭完了！」

砲術長

「主砲撃ち方始め！！撃～～つ！！」

力ツ ズドオオオーン

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェーリズ

戦艦プリンス・オブ・ウェーリズは停船してもなお、後部に残された主砲で第一連合艦隊へ砲弾を放つていた

水兵

「右舷に敵艦隊！ 戰艦5いや6巡洋戦艦6駆逐艦を前衛にして高速接近中！ つあ敵艦発砲敵弾きますつ！！」

リーチ艦長

「なに！」

ガン グツワアアアン ズツシャアアア

ウェールズ

「ギヤアアアアアア、 つく何・・・かん・・・つづ・・・した？」

トーマス

「被害報告！」

水兵

「敵弾艦尾に命中、 艦尾大破、 装甲を貫通し左舷へ抜けました」

リーチ艦長

「提督・・・」

トーマス

「分かつた、 残存艦艇へ連絡戦闘行為を終了せよ」

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「敵巡洋戦艦シャルンホルスト級轟沈！」

水兵

「長官、 敵艦より発行信号です」

山本

「なんだ」

水兵

「敵艦隊降伏しました」

山本

「そうか、砲撃止め、本艦は敵艦隊旗艦に接近する、他の艦は脱走艦がないように、敵艦隊を囮め、あと対潜、対空警戒を密にしろ」

宇垣

「宜候！」

こうして海戦は終わり、大和と播磨は英独連合東洋艦隊、旗艦、戦艦プリンス・オブ・ウェールズに向かつた。

## 第十一話 マレー沖海戦（後書き）

「遅くなりましたが、新年あけましておめでとハピネットます」  
播磨

「作者、今頃出てきて……」

「あ、え、その、あれですね、冬休みの宿題とか山ほどあります  
ですね……」

常陸

「あれれ、でも作者は年末東京にいたみたいだよ5日間も」

作者

「げつ 常陸」

十六夜

「たしかに作者の部屋には誰もいなかつたわ」

作者

「つぐ……」

鳳翔

「私もE-2Dを飛ばしていたが、確かに作者は東京にいたぞ」

播磨

「どうこいつ」となのか、説明してくれるよね、作者

作者

「ひつい、」

作者ダッシュ

常陸

「あつ 逃げましたね」

鳳翔

「逃げたな」

## 第十二話 船団護衛

1月15日 午後2時30分

英独連合東洋艦隊 旗艦戦艦プリンス・オブ・ウェールズ 艦橋

水兵

「日本戦艦2隻接近中！」

トーマス

「艦型は分かるか？」

水兵

「左舷から接近中の艦は、ハリマクラス、右舷からは、識別表にありません、新型戦艦でしょう」

右舷から接近中の戦艦は山本長官座乗の戦艦大和であった

水兵

「日本戦艦2隻とも停止しました・・・つあ、内火艇接近中！」

トーマス

「艦長、ラッタルを下ろせ、私は甲板へ行く」

リー・チ艦長

「提督危険です！」

トーマス

「大丈夫さ、日本海軍は我らの弟子みたいなものだからな」

リー・チ艦長

「では、私もご一緒に」

トーマス

「では、行くか」

戦艦プリンス・オブ・ウェールズ ラッタル

翔平

「よつと、わあ、想像以上にひどいことになつてゐる」

山本

「何言つてゐるんだ、林君、我々が破壊したんだろう」

翔平

「そうでしたね」

ラッタルを上りながら翔平と山本はそんな会話をしていた

甲板

トーマス

「私が英独連合東洋艦隊司令長官トーマス・フィリップス大将だ、」

山本

「私は、大日本帝国海軍第一連合艦隊司令長官山本五十六大將」

翔平

「大日本帝国海軍第一連合艦隊司令長官林翔平大將」

トーマス

「え！若いが幾つですか？」

翔平

「今年で24になりますが」

トーマス

「若い若すぎる」

翔平

「そうですか？」

山本

「ゴホン、え～これから、貴方たちをどうするかだが」

トーマス

「ジュネーブ条約道理に扱つてもらいたい」

山本

「いや日本にそんな経済力はないから、貴方たちは駆逐艦、巡洋艦、輸送艦に乗つて母国に帰つてもらいます」

トーマス

「え！」

翔平

「意外ですか？」

トーマス

「いや、こんなこと言わるとほ、思つて、なかつたからな」

翔平

「そうですか」

山本

「では、さつそくですが」

トーマス

「わかつた、また会おう」

林

「はい」

こつして、英独連合東洋艦隊の艦艇に乗つていた将兵は駆逐艦、輸送艦に移りオーストラリアに向かつた

山本

「さて、捕獲した艦艇をどうするか」

翔平

「もうすぐ、第一支援艦隊が来ますからそつちに任せましょ」

啓太

「林長官」

翔平

「うん?なんだ」

啓太

「設計主任から無線連絡です」

翔平

「親父から、分かつた、出よう、何だ親父」

武

「翔平、捕獲艦はなんだ」

翔平

「いきなりだな、えーと、キング・ジョージ?世型が2隻これは両方大破している」

武

「ほう」

翔平

「次にレパルス、レナウン、フッド、ビスマルク、ティルピツィ、シャルンホルスト以上」

武

「ほう大漁だな」

翔平

「字が違うんだ」

武

「いいじゃねえか、細かい」とは気にしない

翔平

「ふつ、じゃあ早く回収してくれよ」

武

「任せとけ」

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 長官室

長官室では翔平がこれからのこと話をしていた

翔平

「本艦隊はこれより第一支援艦隊と第三輸送艦隊を護衛しつつ日本に帰還する」

第三輸送艦隊には、南方の物資、主に石油等の戦略物資を満載した輸送艦隊であり、輸送船20隻、油槽船10隻、護衛駆逐艦35隻、護衛空母2隻、輸送船と油槽船は戦時標準船でわずか、3ヶ月で完成する船であった、もちろん。脆性破壊については解決されている、護衛駆逐艦も短期工事で就役できるように設計されている。

啓太

「はい分かりました」

翔平

「なお、帰還途中に潜水艦による攻撃が行われる可能性が高い対潜哨戒を厳重にしてくれ」

葵

「はい」

翔平

「以上だ、では解散」

啓太

「はい」

参謀達が持ち場に戻った

翔平

「この輸送艦隊無事に持つて帰れるかな」

播磨

「翔平気にしそぎよ」

翔平

「播磨か、捕獲艦の様子はどうだった?」

播磨

「呉の大きさに目を丸くしていたわ」

翔平

「どうか、よし日本へ帰還するか」

播磨

「はい」

1月17日午後7時

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

第一連合艦隊は第一支援艦隊と第三輸送艦隊を護衛しながらバシー

海峡を通過していた、

翔平

「順調だが、なんか嫌な予感がするな」

播磨

「そう?」

翔平

「来るぞ、間違いないく

その時艦隊全体に警報が鳴り響いた

翔平

「どうした! ?」

艦長

「ソナーに感あり! 待ち伏せですッ! 」

翔平

「数は? !」

艦長

「10隻以上おそらくボートですッ! 」

翔平

「対潜戦闘用意! 」

艦長

「宜候」

翔平

「そういえば、啓太は」

艦長

「それが・・・」

翔平

「どうしたんだ?」

葵

「栗須参謀長なら、お酒の飲みすぎで寝てますよ」

スツベン! 艦橋に居た全員が滑ってしまった

翔平

「酒の・・・まあいいだろう、寝かせておけ」

水兵

「魚雷注水音、感知！」

翔平

「駆逐艦部隊に命令！攻撃せよ」

葵

「宜候！」

駆逐艦秋月

水兵

「攻撃命令來ました」

砲雷長

「五式対潜ミサイル発射用意」

水兵

「VLS、五式対潜ミサイル、弾数5、データ入力完了！」

艦長

「発射！」

グワツ ズッシャアアア

この時、5隻の秋月型駆逐艦から各5発の五式対潜ミサイルが発射された

砲雷長

「五式対潜ミサイル、目標に向かって飛翔中」

水兵  
「着水確認、命中まで、15秒」

水兵

「命中確認！圧壊音撃沈です！」

艦長

「旗艦へ報告」

水兵

「宜候！」

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「敵潜の機関音消失しました」

翔平

「そうか」

水兵

「長官！第一連合艦隊から入電！シンガポール制圧に成功したそうです」

翔平

「いまさら、英米各国では大騒ぎしてるだろ？な」

播磨

「いろんな意味でね・・・」

この後、潜水艦の襲撃もなく無事日本の呉に入港した

## 第十二話 船団護衛（後書き）

作者 「ふ～最近ネタがわいてこない」

播磨

「だからこんない遅いのね」

作者

「それだけではないぞ、学校が始まつてネタを考える暇は授業中しかない！」

播磨

「作者、授業中何やつているの」

作者

「なにつて、もちろん勉強だよ」

播磨

「・・・もつといわ、なんか疲れた」

作者

「そう？」

播磨

「～」意見～」感想お待ちしております

## 第十四話 改造終了

3月24日

呉

現在、呉海軍工廠では、戦艦、プリンス・オブ・ウェールズ以下3隻の英國戦艦、巡洋戦艦を改造中で、大いに活氣づいていた、このほか、ビスマルクほか3隻の、独逸艦は大分の大神海軍工廠で、米戦艦は、神戸以下3隻の自走浮きドックで改造を受けている、

自走浮きドック神戸

翔平

「親父どうなんだ、何時になつたら、改造が終わるんだ?」

武

「こつちの方は予定通りに進んでいる、それと護衛の駆逐艦やら、巡洋艦、空母等は現在、各国内の工廠、造船所で急ピッチで建造中だ、だが、こんなに艦が有つても、乗せる将兵がいなきや意味がないけどな」

翔平

「そつちの方は心配ない、ちゃんと手を打つてある」

武

「どんな?」

翔平

「機密だ」

武

「ふつ、まあいい、俺はこれから、横須賀に行つてくれる」

翔平

「なぜ？」

武

「新鋭空母が来月就航するからな、その様子を見に」

翔平

「ああ、大鳳のことか」

武

「そうだ」

大鳳は史実なら川崎重工業神戸造船所で就航する予定であったが、工廠等に優先して設備配備した結果、民間の造船所は1930年代のままで止まっていた、だが現在は、工作艦宗谷型を各地に派遣し、各民間造船所の整備、指導を行っている。

翔平

「つで、なにで、横須賀まで行くつもりだ」

武

「え、電空で」

翔平

「そうか」

電空それは、V-22オスプレイの日本名だ

翔平

「気負つけてな」

武

「分かつているつて」

第一連合艦隊旗艦 戦艦大和

会議室

翔平

「山本長官、捕獲艦の事ですが、予定通り、4月には全艦の改造が終わります」

山本

「早いな、そろそろ各艦がどう改造されるか教えてくれてもいいだろ？」

翔平

「そうでしたね、えーとまず、米戦艦3隻は主砲を41センチ3連装4基に統一しまして、もちろん艦幅と全長は伸ばしましたそして速力は30ノットに、英戦艦は、これも米戦艦とほとんど変わりません、レナウン型巡洋戦艦は、主砲が41センチ2連装、3基に改造し、機関、装甲等を少々いじりました、フッドも同じような感じで改造しました、次に独戦艦ですが、こいつは主砲が41センチ2連装、4基に改造しています、ですが、巡洋戦艦は主砲を、30,5センチ砲に変更して、対潜、対空、ミサイルを装備し、護衛戦艦として、今再編成中の第一護衛艦隊旗艦になつてもらいます」

第一護衛艦隊とは旧式巡洋艦などを、超近代改装しそれらの艦を艦隊に編入させた艦隊である、いわゆる寄せ集め？

山本

「長々と説明ありがと！」

翔平

「いえ、」

山本

「本土の防衛の方はそちらはひとつもりなんだ」

翔平

「はい、各航空基地には、海軍の零戦、陣風、紫電、陸軍の疾風等の迎撃戦闘機を各30機以上配備し、さらに重要都市の基地には、音神を5機配備します」

山本

「音神、搭乗員は育成済み聞いているが、整備員の方はどうなんだ？」

翔平

「そちらの方も、すでに育成済みです」

山本

「やることが早いなー」

翔平

「それが仕事ですかー」

山本

「そうか」

翔平

「そうです、おつともうこんな時間ですか

時刻は午後7時を回っていた

翔平

「そろそろ帰ります、そちらの出撃は明後日でしたね」

山本

「そうだ、ちょっと横須賀へ」

翔平

「こちらは、1週間後に横須賀に

山本

「では、また1週間後に会おつ」

翔平

「はい」

翔平は大和の会議室を後にし、内火艇で播磨へと戻つていった

3月27日

イージス戦艦播磨 会議室

翔平

「遅れません、

会議室には、第一連合艦隊の全艦魂と英戦艦、米戦艦、独戦艦の艦  
魂がいた

そこに、啓太、葵、武、翔平の4人がはいってきた

翔平

「播磨、全員の自己紹介は終わったか?」

播磨

「終わったわ」

翔平

「そうか、では、改めてようこそ大日本帝国海軍へ、私は、本艦隊の司令長官、林翔平です、以後よろしく」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私は元英独東洋連合艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズです、こちらこそよろしくお願ひします」

翔平とプリンス・オブ・ウェールズ握手をする。

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官、ちょっと聞いていいですか」

翔平

「うん、なんだ」

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官、貴方たち第一連合艦隊は未来から来たというのは本当ですか」

翔平

「うつ、事実だ」

テネシー

「本当ですか」

翔平

「我々は西暦2025年の日本からやってきた日本人だ、我々は太平洋上で奇妙な嵐に会い、この時代に飛ばされたんだ」

プリンス・オブ・ウェールズ

「長官たちがこの時代に来なかつたら、今頃世界はどうなつていたんですねか」

翔平

「啓太、例の映画の準備だ、俺が話すより、直接見てもうつた方が早いからな」

啓太

「了解、1分待ってください」

翔平

「分かつた」

1分後

会議室に隠されていた、大型液晶テレビが姿を現した

翔平

「今から、俺たちが、過ごしてきた、歴史の映像を見てもうう、主に第二次世界大戦から現代までの、歴史の映像、写真を編集して作つたやつだ、小1時間で終わる、見ていてくれ」

翔平がBDレコーダーにBDをいれ、映画がスタートする、

一時間後

翔平

「どうだつたか」

プリンス・オブ・ウェールズ

「原子爆弾・・・あんな恐ろしい兵器が・・・」

翔平

「そうか・・我々は原爆の開発も阻止しなければならない、このことは、我々がこの時代に来た、時から決まっていた、君達の力私に預けてくれないか?」

ビスマルク

「祖国残酷なことをしていたんだ、協力しよう」

この残酷なことは、ナチスドイツの強制収容所の事だ

ティルピツ

「私も協力してあげるよ」

テネシー

「私も」

カリフォルニア

「協力させていただきます」

メリーランド

「協力しよう」

プリンス・オブ・ウェールズ

「私達、英國艦も日本海軍に協力します」

翔平

「ありがとうございます、全艦の同意が確認されたところで、全艦に新しい艦名にする、まず、プリンス・オブ・ウェールズには、上総、キングジョージ?世には下総、レパルスには豊前、レナウンには豊後、フツドには対馬、次にカリフォルニアは相模、メリーランドには甲斐、テネシーは淡路、次にビスマルク、丹波、ティルピット、丹後、シヤルンホルスト

は、磐城以上、これからよろしく頼む」

全員

『一いちじやようしくお願ひします』

翔平

「以上!では解散!」

翔平以下、3人は仕事に戻った

長官室

翔平

「さて・・・やる気なくすな・・・」

翔平は目の前の執務机に置かれているパソコンを見ていった、これは、家に帰る前までは、宿題をやる気でいた、小学生みたいな感じだと思つてくれればいい

翔平

「はあ〜〜、逃げるか・・・」

翔平は回れ右をして長官室から出ようとしたが・・・

播磨

「どうに行こうとしているのかしら、翔平」

翔平

「播磨ー、どうしてこんな所に立っているんだ」

播磨は長官室の前の通路で立っていた

播磨

「翔平がサボらないように、交代での見張りが今田からやれるの」

翔平

「へ～それでこんな所に立っているのか」

播磨

「そうよ、まあ、早く仕事に戻りなさい」

翔平

「は～い」

翔平は長官室に戻され、播磨以下第一連合艦隊各艦魂の監視下で仕事をすることになった

4月4日

吳

第一連合艦隊は午前2時に静かに出撃した、夜中に出撃したのは、敵の諜報員にきずかれないためだ、史実道理なら、4月18日に帝都初空襲があるはずだ、帝都初空襲を阻止するために、出航し、太平洋洋上で米艦隊を迎撃する作戦が軍令部による堀井弘明参謀によつて立案され、実行するために、2日後に横須賀からは第一連合艦隊が出撃する手はずになつてゐる。

水兵

「水道抜けました、これより外洋に入ります」

翔平

「全艦巡航速度へ、」

艦長

「宜候！」

こつして、第一連合艦隊が出撃し、作戦の準備が整いつつあった。

## 第十四話 改造終了（後書き）

作者  
「ふ~疲れた」

播磨

「作者なにもやつていないのでしょう?」

作者

「なに言つてゐるんだ、今日も大変だったんだぞ、いろいろと」

播磨

「なにやつていたの?」

作者

「朝起きて、宿題して、飯食つて、勉強して、予習して、まあいろいろとしていたんだよ」

播磨

「それは大変ね~」

作者

「なんだその、気の向けた返事は」

播磨

「どうでもいいわそんなの」

作者

「はあ~そうですか、まあいいですか」

播磨

「では、「じ意見」」感想お待ちしております」

## 第一五話　日本本土初空襲

4月17日（日本時間午後6時）

太平洋洋上

現在、第一連合艦隊は太平洋洋上を駆進していた、幻夜による、敵艦隊探索の結果、米艦隊の陣容は、空母4、巡洋艦8、駆逐艦12隻から編成された艦隊であることが分かった、米艦隊は、史実道理の針路をとり、日本本土へ近づきつつあった、

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、敵艦隊を発見しました」

翔平

「よし、作戦道理、艦隊を分離する」

啓太

「了解、各艦に通達、支持道理にペアを組んで航行、各部隊は指定海域に移動！米艦隊を追い返せ！！」

翔平

「帝都防空基地に打電、航空隊の発進準備、敵さん、明日来るぞ」

葵  
「了解、暗号回線で打電します」

翔平

「よし、常陸に打電！電子戦用意！」

水兵

「了解！」

## 第一連合艦隊 イージス戦艦常陸

常陸には、2025年の米軍を凌ぐ、電子戦用の機器が満載されていた

水兵

「旗艦より、入電、電子戦用意、です」

ちなみに、艦長は、釘宮信也大佐である

信也

「電子戦用意！いよいよだ、本艦の能力を見せてやれ！」

砲雷長

「了解、電子戦用意！」

水兵

「用意よし！」

砲雷長

「E C M 攻撃開始！」

常陸

「電子戦専門戦艦の名は、伊達じやありません！その力見せてあげましょーー！」

イージス戦艦常陸から強力な妨害電波が実施された

第一連合艦隊 イージス巡洋艦十六夜

副長

「艦長、電波妨害が始まりました」

雄哉

「うん、米艦隊の位置は特定できているか？」

副長

「副長、電波妨害が始まりました」

「はい、現在史実道理の針路を航行中、50ノットで行けば明日の朝に会敵するでしょ?」

雄哉

「よし、雪月に通達、速度50ノット本艦の後方200㍍つけよ」  
雪月とは、秋月が駆逐艦の6番艦である

水兵

「宜候!」

イージス巡洋艦十六夜と駆逐艦雪月は50ノットの速力で暗い闇の中に入つていった。

4月18日（日本時間午前7時）

第18任務部隊 空母エンタープライズ

現在、米艦隊はレーダーが突然真っ白になり混乱していた

士官

「レーダーはまだ復旧しないのか?」

水兵

「はい、調べてみたところ、アンテナにも異常はありません」

士官

「だったらなぜ、レーダーが真っ白なんだ?」

水兵

「分かりません」

士官

「くつ、早急に復旧しろ」

水兵

「了解」

士官

「提督、爆撃隊の発艦準備完了しました」

ハルゼー 提督

「全機発艦だ、ジャップに真珠湾のお返しをしちゃ……」

士官

「サー・イエッサー……」

その命令の後、空母エンタープライズから、16機のB-25が発艦しようとしていた、ちなみに、B-25を搭載している空母は、史実とは違い、エンタープライズの他に、ヨークタウンである、あと2隻、ホーネットとワスプは、護衛機や哨戒機を搭載している。エンタープライズの艦橋トップ、マストには、一人の少女が腰を掛けていた、この少女はもちろんエンタープライズの艦魂である。

エンタープライズ

「見てなさいジャップ、今アメリカからのプレゼントを届けるから」

爆撃隊の最後の機体が発艦したのは、史実と同じ、8時18分であった

士官

「提督、全機発艦しました」

ハルゼー 提督

「・・・全艦回頭、これより帰還する」

その時

水兵

「左舷に艦影を視認・・・あれば、テンワクラス巡洋戦艦……」

ハルゼー 提督

「なんだと、何故気づかなかつた」

士官

「それが、レーダーが故障してしまいました」

ハルゼー 提督

「糞！全艦対艦戦闘用意！いくら巡洋戦艦と言つても一隻だ、数で押さえろ！！」

水兵

「敵艦発砲！」

ズッドーーン

水兵

「重巡ノーザンプトン、爆沈！」

重巡洋艦ノーザンプトンは十六夜の一斉斉射により艦中央に30,5センチ徹甲弾が命中、爆沈した

ハルゼー 提督

「重巡が一発でしかも初弾命中だと・・・」

士官

「提督・・・」

ハルゼー 提督

「くつ、全艦回避行動をとりつつ、東へ退避しろ」

士官

「了解」

空母エンタープライズから、発行信号が打たれた

第一連合艦隊 イージス巡洋艦十六夜

水兵

「米艦隊、退避していきます」

雄哉

「ううん、なんか張り合いかないな」

十六夜

「それを言つたら可哀そつよ」

雄哉

「それもそつか」

天羽型巡洋戦艦の30・5センチレールガンの威力は、通常の艦砲に直すと42センチ砲と同等らしい

雄哉

「よし、最後に七式魚雷発射用意」

砲雷長

「宜候！・・・発射用意よし」

雄哉

「発射！」

パツシユ

乾舷のシャッターから隠されていた魚雷発射管から4本の魚雷が米艦隊に向けて放たれる

雄哉

「さて、戻るか、雪月に打電、本艦についてこい」

第18任務部隊 空母エンタープライズ

水兵

「敵艦反転、退避していきます」

ハルゼー提督

「おかしい、こんな簡単に引き上げるわけが・・・

ズガーン！

水兵

「艦尾に被雷しました」

ハルゼー提督

「おちつけ、被害報告急げ！」

水兵が艦橋に走ってきた

水兵

「報告！艦尾に被雷、第一スクリュー損傷、艦尾から若干の浸水があります」

さらに、見張り員からの報告が来た

水兵

「空母ヨークタウン、ホーネット、ワスプも被雷しました」

ハルゼー提督

「損傷は？」

士官

「各空母も小破乃至中破です」

ハルゼー提督

「損傷艦を中心に輪形陣で航行、本艦隊は撤退する」

茨城県上空

現在、茨城県上空には、陸海軍合同の迎撃部隊が編成されて飛んでいた、その数約100機、たった36機のB-25には、過剰防衛と言えるほどの迎撃の数であった、主な機体は、海軍の零戦、陣風、紫電、陸軍の疾風、飛燕、隼、鍾馗さらに音神5機が待機していた。音神を操っているのは、海軍、陸軍の中から厳選した、エースパイロット達、もしくは、なる予定の男たちであった、その中には、軍鶏とあだ名、されている、笹井醇一少尉もいた。

笹井

「いつもながら、この機体の乗り心地は最高だ」

笹井は音神のコックピットで行った、笹井の乗っている音神は、この時代で最初に作られた機体であり、オリジナルとは若干性能が落

ちていた、おもにステルス性能が、だが、レーダーの性能が、悪いこの時代ではあまり関係ないだつと、武は言つていた。

笹井

「おつと、敵さんが来たみたいだぞ、全機俺続け！」

音神のレーダーが、敵の機影を映す

音神が轟音を立てて、あつという間に飛んでいく、後方にいた零戦以下の機体も速度を上げて音神の後についていく。

笹井

「居たぞ、全機攻撃開始！！」

笹井気が速度をさらに上げ、米軍機B-25にすれ違はずまに、機銃掃射をする、

ズウウウウ

この攻撃によつて、7機のB-25が爆散、米軍機は大混乱にをち  
いった

米兵1

「敵機発見！！」

ズウウウウ

米兵2

「後続の10番機、12、13、14、15、16、18機爆散！」

ドーリットル

「各機弾幕を密にしろ！敵機を近づけるな！」

米兵3

「速い！」

米兵1 「3番機、爆散！」

米兵2

「前方から敵機接近！」

ドーリットル

「何！・・・多すぎい」

海軍陸軍の混合迎撃隊が今到着し、各機が迎撃に入った

ドーリットル

「糞！残った機は超低空で、進め！行くぞ！」

ドーリットル爆撃隊は超低空で東京を指した

笹井

「おっと、敵さん低空でこちらの攻撃をまじつこいつのか、残念だがそれは無理だな」

なぜならドーリットル爆撃隊の先には、陸軍の防空部隊が待機していた、主武装は、一式対空戦車、一式戦車の砲塔を外し、その砲塔を高射砲に変えただけの、簡単な構造だが、高射砲は、完全自動装填装置と対空電探との連動により、射撃速度、命中率、両方にとっても、現時点で世界最高の高射砲であった、

陸兵1

「2時の方向敵機接近！－数20－！」

部隊長

「全車、対空戦用意！」の訓練の成果見せてやれ

全員

『了解！！』

一式対空戦車の高射砲の口径は75mm有効射程は6'300mである

陸兵2

「敵機射程圏内に入りました！」

部隊長

「各車自由射撃、撃つて――！」

ドン ドンドン ドン

米兵1

「機長！前方敵部隊！」

ドーリットル

「なんだと！」

グッワッ

ドーリットル機は大きくバランスを崩し

ズッガン

墜落した

陸兵3

「敵機墜落！」

部隊長

「火は出でないな、よし、救助に向かえ、丁重にな」

陸兵 4

「了解」

このやり取りの間でも、高射砲は火を噴き、戦闘機は、敵機に群がり、攻撃を続けた、米軍にとつては地獄であったであろう、高度を上げれば、音神、低く飛べば、一式対空戦車、がいたのだから、

笹井

「敵機全機撃墜を確認・・・これより帰還する」

迎撃部隊は風のよつに帰還した。

陸軍病院

ここでは、ドーリットル空襲での、捕虜が治療を受けていた、その中に今は、指揮官ジミー・ドーリットル中佐も含まれていた。

看護兵

「どうですか、」気分は？

ドーリットル

「君たちは、馬鹿なのかね？捕虜にこんなにいい待遇をして、これはもう捕虜の扱いではない、私はゲストみたいなものだ」

看護兵

「いいえ、これが我が帝国の方針の一つです、中佐も怪我が完治したら、母国に送られるでしょう」

ドーリットル

「我々は、捕虜ではないのかね」

看護兵

「はい、我が大日本帝国は基本的に捕虜をとらないので」

ドーリットル

「・・・なんて国だ・・・ハツハツハツ」

太平洋洋上

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

啓太

「長官、帝都防衛に成功しました」

翔平

「うん、作戦道理だな」

播磨

「堀井参謀もよく」ここまで予測できたわね」

翔平

「ふつ、あいつは昔からこうこうことが得意だったからな」

播磨

「そりいえばそうね」

翔平

「そういうことだ・・・全艦針路変更トラック島に向かう」

啓太

「宜候！・全艦針路変更！」

翔平

「さて、次の準備をしますか」

## 第一五話 日本本土初空襲（後書き）

作者

「大変遅れて申し訳ありません」

播磨

「本当にね、今日は間が空きすぎじゃないかしり」

常陸

「本当ですね」

作者

「すいません、反省しています、許してください」

十六夜

「いいえ、許しません」

作者

「出た～～！ギヤアアア～～」

播磨

「・・・」

常陸

「（）意見（）感想お待ちしております」

## 第一六話 トラック諸島に入港

4月25日

太平洋上

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 長官執務室

翔平

「なんなんだよ！入港する時のこの書類の量は「ンチクショウ～！」

入港するときや、帰港の時は大抵書類が多い、主に補給関連で

翔平

「はあ～疲れた～、な～紀伊～休憩していいか～」

紀伊

「駄目です、後一時間もすれば、トラックに入港する予定ですから」

翔平

「あ～～、やつてやるうじやないか～～！」

何かに取りつかれたように、ハイペースで書類に目を通し止づけて  
いく、翔平

45分後

翔平

「ふつ、終わつたぜ・・・」

バタン

疲労によって倒れる翔平、

紀伊

「ちょっと長～官～大丈夫ですか！？」

翔平

「大丈夫だ！問題ない！紀伊、俺ちょっと疲れたから寝る、オヤスミ～」

紀伊

「こんな所で寝てはダメです！長官～ちゃんとベッドで寝てください！」

翔平

「スウ～、スウ～」

ちなみに今翔平の体勢は紀伊の膝を枕にしていて体制であった、こんなところをもし誰かに見られたら・・・

コンコン

播磨

「翔平入るわよ・・・え！？」

常陸

「失礼します」

播磨

「翔～平～何やつているのかしら？」

翔平

「うーなんだ！・・・播磨さんそのだらだら漏れている殺氣はなん

あつもう時すでに遅し翔平の命運はいかに！？

ですか？！

ただなぬ、殺氣に翔平は飛び起きた

常陸

「これは…やつそく各艦魂に緊急電を…！」

紀伊

「…」

顔を明かしながら黙つてゐる、紀伊

播磨

「翔平・・覚悟はいいかしら？」

と言いながら軍刀の鞘を抜く播磨

翔平

「よくない！なんでこんな・・・退避…！」

長官執務室を飛び出し、全速で退避する翔平、  
その時、各艦魂が一斉に長官執務室に集合した

尾張

「紀伊！私を差し置いて、翔平に膝枕をしただと…！」

紀伊

「ええと・・その・・ですね・・」

三笠

「言い訳は聞きたくありません紀伊」

普段は温厚な三笠も怖い

鳳翔

「セトビツヒトとか話しても、もうつか・・・紀伊」

拳銃を向け脅す鳳翔

紀伊

「ひつ～～」

ダッシュして長官執務室を飛び出す紀伊

鳳翔

「アツ！逃げた、追うぞーー！」

播磨

「待つて、半数は翔平を半数は紀伊を追つて」

全員

『了解』

イージス戦艦播磨 艦内

翔平

「なんだよ、書類が片付いたと思ったら、播磨は怒っているし、俺何かやってしまったかな？」

艦魂達が怒っている理由も知らない、全くこの男は

翔平

「ハア、ハア・・・ちょっと思い出してみよつ」

（青年記憶探測中）

翔平

「うん？ 何のやつていいよな、うん」

一人で納得する翔平

十六夜

「見つけましたよ、長官」

十六夜の手にはなぜかロープが

翔平

「え！ なぜ十六夜が！」

十六夜

「確保！」

翔平

「だが！ 甘い！」

翔平は間一髪で避けるが

十六夜

「ふつ」

十六夜が微笑んだ

天羽

「・・確保・・・」

翔平

「しまった！ 囮か！？」

ロープで簾巻きにされた翔平

十六夜

「さあ、話してもらひましょ、長官殿の前で」

翔平

「何を話せばいいんだかさっぱりわからないんだが」

十六夜

「とぼけないでくださいー紀伊が長官に膝枕をしていたとこを、播磨さんと常陸さんが見てるんですよー」

翔平

「膝枕？（何言っているんだ、あの時俺は・・・回想中・・・）あつ！」

十六夜

「思い出しましたか

翔平

「いや、あれは、わざとじやないし、その前に執務で疲れたから横になつただけであつて、故意にやつたわけではない、よつて俺は悪くない！..」

その時翔平の後ろから播磨が現れた

播磨

「翔平、何一人で納得しているのかしら」

翔平

「いやその、ですね・・・」

播磨

「ふん、まあいいわ、皆が長官公室で待つてているから、早く来て

翔平

「・・・はー」

その後、懸命に訳を話し、皆には納得してもらえた翔平と紀伊であった

トラック諸島 泊地

イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「機関停止、双錨泊」

第一連合艦隊は予定通り北東水道を通過しトラック諸島に入港した

啓太

「了解」

播磨

「写真で見るとではずいぶん違うのね」

翔平

「親父が魔改造したんだよ、ほらあそこ見てみたら」

播磨

「うん？あれはドックねえ、それも私が入りそつながらーの」

翔平

「そうだ、建設するのには苦労したと親父が言っていたぞ」

播磨

「へえ～そつなの」

トラック諸島の七曜諸島最大の島、水曜島に大型ドックを4、中型ドックを6作りさらに、ある程度自然を壊さないように、大型船が着岸できる岸壁を作った、これにより、トラック諸島の重要度はかなり高くなり、連合国も最重要拠点とそれでいた。

翔平

「啓太、全艦に回線を開いてくれ」

啓太

「了解・・・開きました」

翔平

「総員よく聞いてくれ、長い航海ご苦労であった、今日から、しばらくは敵も攻めてこないだろう、よって今日から二日間、宿直員以外は両舷上陸を許可する、総員よく休んで英気を養つように・・以上！」

この放送が終わった直後、各艦からは内火艇、カッター、が出て行つた

翔平

「うつりのやつらは、やるこ」とが早いな

播磨

「そうね」

翔平

「さてと俺たちも休みますか

第一連合艦隊全乗組員は、三日間の休日を堪能しました戦場へと戻るのであつた。

## 第一六話 トラック諸島に入港（後書き）

作者  
「さて、ストックも一応できたし更新だ」

播磨  
「なぜストックなんて」

作者  
「今週の木曜日から学期末テスト、学生にとって最大の難関、海戦に言い換えるなら、駆逐艦一隻で100隻以上の大艦隊と戦闘するような感じだからな」

播磨  
「そ～なのかな？」

作者  
「なんだよ氣の抜けた返事は」

播磨

「じゃあ作者、しばらくは更新できないといつことかしぃ」

作者  
「それは分らない、知らない」

播磨

「ストック出来たんでしょう」

作者

「正確に言つと書きかけ・・・」

播磨

「一回死ね〜〜バカ作者〜」

作者

「ギャアアアアアアアアア」

播磨

「ふう、『意見』感想お待ちしていきます」

## 第一七話 珊瑚海海戦前編

5月7日

南太平洋上

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨

現在、第一連合艦隊は、MO攻略部隊の支援艦隊として、南太平洋上を目立つように進行中であった、ちなみにMO攻略部隊の戦力は・  
・

MO攻略部隊

司令官：井上成美中将 旗艦：戦艦丹波

戦艦

丹波 丹後

空母

龍驤 隼鷹 飛鷹 祥鳳 瑞鳳 龍鳳

重巡洋艦

青葉 加古 衣笠 古鷹

軽巡洋艦

長良 五十鈴 名取 由良 鬼怒 阿武隈

駆逐艦

吹雪 白雪 初雪 深雪 叢雲 東雲 薄雲 白雲 磯波 浦波  
綾波 敷浪 朝霧 夕霧 天霧 狹霧 腻 曙

漣 潮

強襲揚陸艦

千歳 千代田 世田谷 文京 黒田

輸送艦

札幌型三隻 油槽艦二隻

| 航空機  | 戦闘機 | 零戦 | 陣風  | 100機 |
|------|-----|----|-----|------|
| 攻撃機  | 天山  | 流星 | 40機 |      |
| 爆撃機  | 彗星  |    | 60機 |      |
| 偵察機他 | 彩雲  | 雲洋 | 30機 |      |

ちなみに千歳型が強襲揚陸艦になつている理由は、甲標的母艦だつたため艦内の格納スペースには余裕がありその格納スペースを上陸用舟艇に置き換えて艦尾にハッチを設けてさらに、少數の航空機を運用できるように飛行甲板を設置した艦に改造されていたまた、巡洋艦、駆逐艦も対空対潜兵装、駆逐艦に至つては、主砲をOTOメララ127mm連装速射砲に改めるなどの大改造を施した、ちなみに、軽巡洋艦は全艦155mm55口径3連装砲3基又は4基に改造されている、もちろん完全自動装填式だ。

以上の戦力をもつて、ポートモレスビーを攻略しようとしていた、なおツラギ島は、2日に、攻略完了し、司令官の志摩清英少将は酋長たちを集め島の統制布告を出した、その代償として贈り物を寄付し、また酋長たちの要求を志摩司令官は受諾した、翌日には早々には医療テントの前に原住民の列ができていた、今まで占領してきた地域も、大日本帝国は、解放、建国のためも支援などを行つてゐる。

翔平

「さて、作者の長い説明も終わつたし、やらせていただきますか」

あつじうわ

翔平

「対潜、対空警戒を厳重に！だが、けして許可するまで攻撃するなよ、本艦隊は囮なんだから」

啓太

「宜候！」

水兵

「対空レーダーに感！数1、方位075、距離440キロ、データ解析結果米海軍艦載機ダグラスSBDドーントルレス」

翔平

「敵機が電波を出すまで落とすなよ」

葵

「了解」

米偵察機 ダグラスSBDドーントルレス

米パイロット

「うん、航跡だ」

米搭乗員

「おー、本當だ、多いぞ！」

米パイロット

「高度600まで降りるぞ」

米搭乗員

「何時でもいいぞ」

米パイロット

「いぐぞ」

SBDドーンタレスは艦種が何とか確認できるところまで降下した

米パイロット

「戦艦が6、空母が6おじこの陣容は？！」

米搭乗員

「ああ・・間違いないこいつらは・・・第一連合艦隊！？」

米パイロット

「何故こいつらがここの海域に？！」

米搭乗員

「分からん、先日まではトラックにいたはずだが・・無電を打つぞ」

米パイロット

「早く打て」

第17任務部隊

第17任務部隊の戦力は空母ヨークタウンの代わりに、サラトガがその穴埋めに編入されていて、一応戦力を出しておく以下の通り

司令官・フランク・J・フレッチャー米少将 旗艦・レキシントン

重巡洋艦

ミネアポリス ニューオーリンズ アストリア チェスター ポー  
トランド

オーストラリア (HMAS) シカゴ

軽巡

ホバート (HMAS)

駆逐艦

パーキンス ウォークフェルプス デューーウィ ファラガット エ  
ールワイン  
モナガン モ里斯 アンダーソン ハンマン ラッセル シムス  
ウォーデン

空母

サラトガ レキシントン

油槽船

ネオショーン テイペカノー

水上機母艦

タンジール

航空機

|     |        |
|-----|--------|
| 戦闘機 | F4F44機 |
| 爆撃機 | SBD74機 |
| 攻撃機 | TBD25機 |

このような史実とさほど変わらぬ戦力で、米艦隊第17任務部隊は、日本艦隊を迎撃しようとしていた。

士官1

「提督！敵艦隊を発見しました」

フレッチャー提督

「陣容は？」

士官1

「偵察機からの報告によつますと、戦艦6、空母6、巡洋戦艦駆逐艦多数、その後方に輸送船団を確認とのことです」

フレッチャー提督

「なんだとその陣容は？！」

士官1

「はい、あの第一連合艦隊です！」

フレッチャー提督

「なぜだ！情報部は、まだトラックにいると言つていたじゃないか！」

士官2

「分かりません、ですが敵はまだ我々に気づいていません、ここは攻撃機を出し先制攻撃をしましょう」

士官1

「そうです、先制攻撃をし、空母飛行甲板を発着艦不能にするのがいいと思ひます」

フレッチャー提督

「・・・よし分かつた、攻撃隊発艦用意！」

40分後、攻撃用に機体が準備され発艦した、目指すは第一連合艦隊、連合国では、真珠湾を焼き払い、英独連合東洋艦隊、ドーリットル攻撃隊を撃破した、恐るべき艦隊だと認識されていた、攻撃隊

のパイロット達は、自分たちが初めて日本海軍の艦船を撃沈するかも知れないと、胸を高鳴らせていた。

### 米攻撃隊隊長

「全機よく聞け、今から俺たちが攻撃するのは、第一連合艦隊の旗艦戦艦播磨だ、ほかの艦には、目を向けるな、分かつたか」

### 攻撃隊パイロット全員

『イエッサー』

米攻撃隊80機は第一連合艦隊に攻撃に向かった

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「CICより報告！ 対空レーダーに感！ 数80！ 方位210！ 距離450！ 速度約150ノット！ 本艦隊に接近中！」

翔平

「対空戦闘用意イー！ 鳳翔に連絡！ 音神発艦せよ！」

啓太

「宜候！ 対空戦闘用意イー！」

葵

「空母鳳翔に打電します！」

航空母艦鳳翔

空母鳳翔の飛行甲板ではすでに、20機の音神が待機していた。鳳翔の艦長は、東岡孝彦大佐である

孝彦

「発艦準備は」

水兵

「すでに完了しております」

孝彦

「よし！音神隊発艦せよ！」

鳳翔

「無事全機帰還を祈る」

鳳翔が敬礼をして音神を見送る

昇

「全機ついて来てるか！」

哲也

「もうひりんですか？」

昇

「よし！よく聞け、敵は80機これからその発分の40機を迎撃残り半分を第一連合艦隊が迎撃する」

哲也

「何故ですか？」

昇

「さあな俺にもよくわからん」

哲也

「なんですかそれ？」

昇

「さあ？おつと来たぞ」

音神の機上レーダーが反応する

哲也

「先に行つていいつすか隊長」

昇

「ああ、行つて来い」

哲也

「はい！」

哲也はスロットルを全開にして、米攻撃隊に攻撃をかけようとしていた

哲也

「イツケエエーー」

音神のM60バルカン砲が火を噴く

哲也

「2機撃墜！」

米攻撃隊隊長

「なんだ！」

パイロット1

「あれは・・・ソニックー！」

パイロットの一人が音神を見て叫ぶ

パイロット2

「なんだと！」

米攻撃隊隊長

「落ち着け各機散開！」

パイロット3

「駄目だ、速すぎ・・・」

「ワーン！'

パイロット1

「糞！喰らえ！」

無我夢中で機銃を撃つが軽くかわされて

ズッドーン

F4Fは爆散した

## 米攻擊隊隊長

「見えたぞ、第一連合艦隊だ全機攻撃！」

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 CIC

水兵  
1

敵機全機本艦に向かってきます！」

翔平

全艦対空戦闘専用！全火器使用自由！

「了解！127mm砲、射擊用意！」

水  
兵  
1

「射撃用意よし！」

炮雷長

「撃ち一方が始め！」

水兵  
1

一撃ち一方始め！」

CICからの信号が各速射砲に伝わり、射撃を開始する

水兵  
2

「敵機12機を撃墜残り5機は退却していきます」

翔平

「よしー・各空母に連絡！攻撃機発艦」

啓太

「宜候！」

鳳翔、鳳凰、翔龍、瑞龍、萃鶴、勇鶴の6空母から10機ずつ蒼山と音神が発艦した、目指すは、第17任務部隊・・・

## 第一七話 瑞瑚海海戦前編（後書き）

作者

「正直に言います、次の更新はいつになるか分りません」

播磨

「へ～珍しく勉強するの」

作者

「そうです、これも休憩の間に投稿しています」

播磨

「やうなの」

作者

「やうです、ではこの辺で」

播磨

「い」意見「」感想お待ちしております」

## 第十八話 珊瑚海海戦中編

5月7日

南太平洋上

第17任務部隊

現在、第17任務部隊は、大混乱に陥っていた。攻撃部隊は壊滅し、対空レーダーが敵の編隊を確認したからだ。

フレッチャー提督

「全艦、対空戦闘用意！兵器使用自由！」

フレッチャー提督はいち早く防戦を下令した。

水兵1

「敵機襲来！」

見張りの水兵が敵機らしき機影を見つけたが、それは、蒼山が発射した98式空対艦ミサイルであった。

フレッチャー提督

「こいつは無人か？」

フレッチャー提督は98式空対艦ミサイルを見て言った、人間が乗るにはあまりにも小さすぎたからだ

フレッチャー提督

「撃ち落とせッ！－！」

士官1

「黙目です速めますッ－！－！」

ドォーン、ドォーン

ドンー、ドンー、ドンー、ドンー

タンタンタンタンタンタン－

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

重巡の主砲、両用砲、機銃、レキシントンの主砲までもが火を噴く

ズッドーーン

レキシントンの巨大な艦体が大きく揺れた

フレッチャー提督

「ツ被害報告急げッ－！－！」

水兵2

「左舷艦中央に被弾！」

副長

「格納庫にて火災発生！機関室浸水！」

ズッドーーン ドッカーノン

海で爆発音が響いた

フレッチャー提督

「どうした？！」

水兵1

「重巡洋艦ミネアポリス、ニューオーリンズ被弾！…ミネアポリス大破！炎上中！」「ユーオーリンズ・爆沈しました」

水兵3

「駆逐艦パーキンス、ウォーク、フェルプス、デューイ、ファラガット、エールワイン、撃沈されました！」

水兵2

「空母サラトガ被弾！火災発生！」

98式空対艦ミサイルは正確に米艦艇に命中しその使命を終えた

ゴオオオオオ ドッカーン

フレッチャー提督

「今度はなんだ！？」

副長

「格納庫付近での誘爆です！」

フレッチャー提督

「消火はできそつか？」

副長

「最善を尽くしていますが・・・」

その時一人の水兵が艦橋に飛び込んできた

水兵4

「報告！機関室浸水増加！現在艦傾斜8。！」

この報告を聞いた途端、艦のダメージコントロールのトップである副長は青ざめた

副長

「提督・・・もう復旧は・・・」

フレッチャー提督

「・・・これより将旗をアストリアに移動する、無事な艦は各艦の乗員の救助を急げ！」

艦長

「イエス・サー！」

フレッチャー提督

「総員・・・退艦！」

ウ、イ　　ウ、イ　　ウ、イ

艦内スピーカーから、退艦を知らせる、警報が鳴った

30分後、空母レキシントンは、沈まずに漂流物となっていた

空母サラトガ

「・・・お姉ちゃん」

飛行甲板には漂流するレキシントンを心配そつたで見つめていた少女がいた。

その少女は空母サラトガの艦魂であるサラトガであった

サラトガ

「仇は必ず・・・と言つても私ももうだめか」

そのサラトガも艦首に98式空対艦ミサイルが命中していく火災は消火したが、浸水がひどく、現在も全力で排水作業中であったが、復旧の見込みは低かった。

副長

「艦長、機関室まで浸水しました、本艦はもう・・・」

艦長

「分かつた、総員退艦」

副長

「イエッサー」

空母サラトガからも、乗員が退艦した

重巡洋艦アストリア

士官1

「提督、空母サラトガの乗員の退去が完了しました」

フレッチャー提督

「やうか・・自沈はできやうか」

士官2

「はい、駆逐艦による魚雷でしたら」

フレッチャー提督

「救助が終わり次第、自沈処分せよ」

士官1

「イエッサー」

1時間後

士官2

「乗員の救助が完了しました」

1時間たつても空母レキシントン、サラトガはまだ浮いていた

フレッチャー提督

「レキシントンとサラトガの自沈の準備・・」

そのとき水兵が何かに気づいた

水兵1

「ツ敵艦隊視認、巡洋戦艦2駆逐艦12大型輸送艦多數、本艦隊に急速接近中！」

水兵2

「敵艦発砲！」

ズズツゥン ズズツゥン ズズツゥン

これは、巡洋戦艦天羽と十六夜の射撃であつた、米艦隊に接近中の艦隊は、天羽と十六夜を、引き抜き一時編入させた、第一支援艦隊だつた

フレッチャー提督

「つぐ、各艦艇に連絡！煙幕を展開し本艦隊は撤退する！」

士官1

「イエッサー」

巡洋戦艦十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦隊撤退していきます」

雄哉

「なんだ張り合いがないな」

十六夜

「雄哉、まだあそこには空母がいるわ」

雄哉

「もうすでに、無人みたいだな」

十六夜

「一寸私見てくるわ」

雄哉

「ああ、頼んだぞ」

空母レキシントン

十六夜

「わあ、攻撃隊の人達やりすぎじゃないかしら」

十六夜は空母レキシントンの飛行甲板に転移した  
空母レキシントンの飛行甲板は大穴が空き、浸水により、機関室は  
全滅もはや誰が見ても廃艦5分前という有様であった

レキシントン

「誰？」

十六夜

「私は、天羽型巡洋戦艦の4番艦十六夜」

レキシントン

「私はレキシントン型のネームシップ、レキシントン」

十六夜

「あなた大丈夫なの」

レキシントン

「大丈夫と言いたいけど、流石にもう無理かも」

十六夜

「大丈夫よ、諦めないで、すぐに神戸に入渠させるから」

レキシントン

「入渠？こんな海のど真ん中で、面白いことを書つたのね、日本人は」

十六夜

「冗談ではないわ、ほら」

レキシントン

「あれは？」

レキシントンはドック艦神戸を見て絶句した

十六夜

「自走浮きドック神戸よ」

レキシントン

「あれが噂の」

帝国海軍が大型の浮きドックを所有していることは、航空機による  
目撃情報である程度は米軍も知っていた

十六夜

「安心して、帝国海軍の工作能力は世界一だから」

レキシントン

「そう・・サラトガを入れてくれるの」

十六夜

「もちろんよ」

レキシントン

「よかつた、これで」「

十六夜

「これで？」

レキシントン

「少し眠れる」

第一連合艦隊

旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

一時間後、第一支援艦隊と第一連合艦隊は合流した

啓太

「長官、空母レキシントンとサラトガの捕獲に成功しました」

翔平

「そうか、では、本艦は、三笠、天羽、天月、十六夜、十五夜、秋月以下3隻と共にMO攻略部隊の支援に向かつ、他の艦はトラック諸島に寄港せよ」

啓太

「了解、他艦に連絡します」

10分後

葵

「艦隊分離完了しました」

翔平

「よし、全艦最大戦速！MO攻略部隊と合流する

播磨以下11隻の艦は機関を唸らせ、海面を切るように単縦陣で爆走した。

## 第十八話 珊瑚海海戦中編（後書き）

作者 「勉強の合間に書いていたら、いつの間にか限のいいところまで来てしまいました」

播磨

「作者、勉強する気あるの？」

作者 「もちろん、そんなものはねえよ」

播磨

「はあ～・・大丈夫かしら」こんな作者で

作者

「大丈夫じゃない！大問題だ！！（成績的に）」

播磨

「明日の教科は？」

作者

「数学A、情報A、リスニングの3教科」

播磨

「何時間勉強したの？」

作者

「数学を中心に9時間ぐらいかな？」

播磨

「アリなの」

作者

「アリだ・・・アリアリアリ」

播磨

「アリな、『意見』『感想』お待ちしておつまます」

## 第十九話 珊瑚海海戦後編

5月8日

第一連合艦隊、第一戦隊はMO攻略部隊に合流しポートモレスビー攻略へと向かつた

第一連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵1  
「対空レーダーに感！方位210距離200数1偵察機の模様、機種はB-17フライングフォートレス」

イージス戦艦播磨のSPY-2対空レーダーが敵機影を捉える

啓太  
「撃墜しますか」

翔平

「もちろん、艦橋よりCIC、一式対空ミサイル発射用意！」

CIC

砲雷長

「宜候！一式対空ミサイル発射用意！数1」

水兵2

「了解！・・・一式対空ミサイルの射程圏内に入りました」

砲雷長

「一式対空ミサイル発射用意！弾数1！後部VLS発射用意！VLS発射用意、イルミネーター連動！」

砲雷長

「発射5秒前、4…3…2…1…発射」

グワッ ズツシャアアア

白い煙を噴き上げて発射される、一式対空ミサイル、

水兵3

「一式対空ミサイル着弾まで5秒…3…2…1…着弾…」

砲雷長

「命中！周辺に敵機影無し！」

艦橋

啓太

「敵機撃墜！」

翔平

「そうか、全艦このまま第一級戦闘配置のまま待機」

啓太

「了解！」

翔平

「よし、このままポートモレスビーまで直進だ！」

葵

「宜候！」

45分後

ポートモレスビー沖10キロ

M〇攻略部隊と第二連合艦隊、第一戦隊はポートモレスビー沖10キロの海域にポートモレスビーを囲むように展開していた

啓太

「全艦射撃準備完了！」

翔平

「よし！全艦砲撃開始！」

カツ ズッドオオーナン

M〇攻略部隊 旗艦 戰艦備前 艦橋

水兵1

「第二連合艦隊、砲撃を開始しました」

井上

「こちらも、全艦砲撃開始だ！」

砲術長

「了解！撃ち方用意ッ！」

ズッドオオ ン

ズッドオーン  
ドンドンドン

続いて、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦も射撃を開始する

この艦砲射撃は1時間にも亘って続けられた

第一連合艦隊 旗艦 イージス戦艦 播磨 艦橋

翔平

「撃ち方止め！揚陸艦は陸戦隊と陸軍の揚陸を開始せよー。」

啓太

「了解、連絡します」

世田谷、文京、黒田の艦尾のハッチからLCAが発進する。

千歳、千代田からは、大発が発進する

LCACは25式戦車等の戦闘車両を海岸まで運ぶ  
陸軍も一式中戦車、一式対空戦車等の戦闘車両の揚陸を大発で開始する

純平

「全員よく聞け！これより上陸するがくれぐれも己を過信するな、過信は油断につながる、良いか！決して己を過信するな！絶対生きて帰つてくるように、ここで死んでしまつては勘定も、合わないからな」

野村大佐が言つたら、全員が笑つた

純平

「よし、全車、オイルは行き渡つてているかツ！？」

全員

『はい！』

純平

「タービンは回つてているかツ！」

全員

『おおツ！』

純平

「弾はたつぱり持つたろうなツ！」

全員

『ばつちりですツ！』

純平

「よおし・・・上陸開始！！」

野村率いる、陸戦隊はポートモレスビーに上陸を開始、橋頭堡を築

いた

橋頭堡も築いている間も米軍から散発的な砲撃はあったが、25式戦車の125mm滑空砲で、次々に撃破された、その隙にLCACは、母艦から海岸へとピストン輸送をして、25式戦車15両、20式自走砲20両、装甲車10両他武器弾薬の輸送を終えていた

陸兵1

「隊長！物資の揚陸がすべて終わりました」

野村

「よし、全車射撃をしつつ突撃！」

陸兵1

「了解」

20式戦車はエンジンを唸らせて突撃していった

陸兵1

「隊長！3時の方向に敵戦車アーネス3」

野村

「1号車から3号車応戦用意イ！」

陸兵2

「了解」

米軍が出してきたのは、M3軽戦車であった

陸兵3

「射撃準備よし」

野村

「撃て ツ！」

ドン

25式戦車から放たれた125mmの砲弾は正確にM3に命中し、  
M3を粉々にした

米指揮官

「なんだあの戦車は・・・」

米陸兵1

「モンスターだ！」

米指揮官

「何をしている、速く撃たんか」

米陸兵1

「りょ、了解」

米指揮官

「ファイアーツ！」

ドン

ガーン

米陸兵2

「弾かれた！！」

当たり前だ

25式戦車は、日本の誇る第4・5世代戦車だ、M3の37mm戦車砲で効くわけがない

米指揮官

「じ、次弾装て・・・」

ズッドオオン

M3に125mm砲弾が命中した

その後、陸戦隊と陸軍は破竹の勢いで進行し、ポートモレスビーをわずか2日で攻略した。

5月10日（日本時間）

アメリカ合衆国 首都ワシントンDC

ホワイトハウス

補佐官

「大統領閣下、ポートモレスビーが陥落しました」

ルーズベルト大統領

「なんだと、いくらなんでも早すぎる」

補佐官

「ですが、敵は新型戦車を実戦配備し、この戦車を使って我がM3軽戦車を蹴散らしたようで・・・」

### ルーズベルト大統領

「なんだと、あの戦車後進国のジャップ共にそんな戦車が作れるわけがない」

### キング大将

「ですが、大統領閣下、日本軍はジェット戦闘機始め誘導ロケット等の数々の新兵器を投入しています、さらに、8万トンクラスの戦艦ハリマクラス、さらに10万トンクラスの戦艦ヤマトを就航させています、残念ながら、我が海軍いえ連合国軍の戦艦では歯が立ちません」

### マーシャル大将

「それらの兵器を用いて、日本軍はパールハーバーを焼き、フィリピンを占領、さらに、シンガポールをはじめ東南アジアから我が連合軍は完全に駆逐されました」

### ルーズベルト大統領

「む・・・問題はそのジョット戦闘機と誘導ロケットそして、ハリマとヤマト・・・」

### キング大将

「はい、大統領閣下、それらの兵器を超す兵器を作らなければ、1年後にはハワイいえ、西海岸も占領されかねません」

### ルーズベルト大統領

「分かった、戦闘機については、チャーチルとヒトラーに相談しそう、海軍工廠には空母と戦艦の増産を急ぐように連絡しよう、それ

から、ヤマトに対抗できる戦艦を設計させよう・・・キング大将、我々は開戦以来負け続けた、何とかジャップの裏をかく作戦を立てよ

「よ

キング大将

「了解しました」

その日午後ルーズベルト大統領は、英國首相チャーチルと話した、航空機の技術交流強化について・・・

第十九話 珊瑚海海戦後編（後書き）

「意見」「感想お待ちしております。」

## 第一十話 暫しの休息

5月15日

帝国海軍 吳海軍工廠

現在、呉海軍基地では、珊瑚海海戦で捕獲した、サラトガ、レキシントンの改造修理中であった、そのドックの横では、第二連合艦隊の旗艦イージス戦艦播磨、三笠が2年に一度の、機関等の定期点検が行われていた、定期点検の期間は5日間とされていた、その間、第一連合艦隊の旗艦はイージス戦艦紀伊になっていた。

イージス戦艦紀伊 長官室

翔平

「・・・つあ、間違えた」

翔平は仕事中であった

コン コン

翔平

「どうぞ」

山本

「林君、失礼するよ」

第一連合艦隊司令長官山本五十六大将と宇垣纏少将が入ってきた

翔平

「山本長官、宇垣参謀長も、どうしたのですか突然」

山本

「いや、次の作戦の最終の打ち合わせをやひつと思つてな」

翔平

「そんな事でしたら、此方から行きましたのに、あつどひざかけてください」

山本

「山本

「うん、林君いよいよ、M工作戦改が実行されるときは来た、我々が史実で大敗北した海戦を乗り越える時がな」

翔平

「はい、その作戦のために、すでに第一潜水機動艦隊がPに向かっています」

宇垣

「それに最新鋭の空母大鳳型2隻さらに空母雲龍型4隻もすでに就役、現在完熟訓も終了し、現在第一機動部隊に編入され、陸奥湾で待機中です」

第一機動部隊・・・空母大鳳型2隻、空母雲龍型4隻、戦艦、上総、下総、豊前、豊後、重巡最上型6隻、軽巡阿賀野型10隻、駆逐艦30隻で編成された艦隊の事である

翔平

「それと、実は、英國、独逸に動きがあります」

山本

「どんな、動きだ」

翔平

「英國はH部隊を太平洋に回航させるつもりです、それと独逸は大量のヒボートを東シナ海に送り込むつもりです」

宇垣

「H部隊ですか、確かに地中海に展開されていた部隊ですね」

翔平

「そうです」

山本

「IJのタイミングで、ミッドウェーに出でるのか」

翔平

「たぶん出できます、その時は戦艦部隊に出でもらいます」

宇垣

「そうすると艦船の油の消費量が膨大な量になるぞ、第一連合艦隊はいいとして、他の艦は重油で動く、内地の燃料備蓄が底をついてしまうぞ」

翔平

「その所は問題ないでしょう、南方からの燃料輸送は順調ですし、内地の燃料備蓄は十分あります、それに、満州国からも極秘に大量の原油が輸入されますしね」

満州では、史実の大慶油田を1939年に発見し、連合国には極秘で、掘削施設、生産施設等の設備を建設、今年に4月やつと生産が始まった、大油田である、これにより満州国の港湾施設も大規模なものに拡張した。

山本

「それは俺も聞いている、完全なる独立と、軍整備の手助けと引き換えに、だろう」

翔平

「はい、もつすでに、輸出用の駆逐艦5隻と、海防艦10隻、さらに防空用の零戦21型100機が輸出されています」

このように細々の国々では、独立を果たした国の要請があれば、大日本帝国は、資源等との引き換えで、艦船、戦闘機等を譲渡している、もちろん、ソナー、レーダー等の電子機器と主砲は、劣化版だが、この時代の、連合国との、比べるとまだ日本製の方が性能的に上であった

山本

「素早いな」

翔平

「いえ、全部私がやつた事じゃありませんから」

山本

「これで問題は一つ解決したな、後は艦隊の位置だが」

翔平

「小沢中将の第一機動部隊は第一連合艦隊と事実通りの航路でお願

いしまや

山本

「林君、君達はどうするんだ?」

翔平

「我々は、そうですね、南回りで、連合軍艦隊を挟み撃ちにしまし  
ょう」

山本

「林君、やれるのかね、」

翔平

「もちろんです、山本長官」

山本

「そいつが、では次はダッヂハーバーを攻撃する艦隊だが」

宇垣

「それは、第一機動部隊でいいと思います、ダッヂハーバーには、  
敵の有力な戦力は確認されていませんし」

翔平

「そうですね、それがいいでしょ?」

山本

「でもそつすると本土の守りが」

翔平

「そこは、本土防衛航空隊に任せましょ?」

本土防衛航空隊とは、文字通り、航空隊であり、主な機体は、一式陸攻改、銀河、日本初の4発機、深山を中心に編成されており、本土に侵攻してきた敵艦隊に攻撃する部隊だ。

山本

「そうだったな」

翔平

「そうですよ、それにまだ、戦艦他巡洋艦駆逐艦30隻以上を本土に残しておきますから、大丈夫ですよ」

山本

「ではこれで本土の防衛も強固になつたわけだ」

翔平

「はい、しばらくの間は大丈夫でしょう、でも米国の工業力を甘く見てはいけません」

山本

「そうだな、二つはその分、策で勝たねばならないな」

翔平

「はい」

山本

「では次に・・・」

この作戦会議は、1時間続き、より綿密に作戦が立てられた

## 第一十話 暫しの休息（後書き）

「意見」感想お待ちしております

## 第一十一話 バトル・オブ・ミッドウェー（前編）

5月27日（海軍記念日）午前五時

広島湾 柱島泊地

広島湾柱島から、第一、第二連合艦隊と第一機動艦隊が出撃した、同じころ、陸奥湾からも第一機動艦隊が出撃した、艦隊は史実どおりの進路をとり、哨戒機または哨戒ヘリを隨時飛ばしていた、ここで艦隊の編成を説明しよう。

### 第一連合艦隊

司令長官：山本五十六大将 旗艦：戦艦大和

#### 戦艦

大和 武蔵 長門 陸奥 伊勢 日向 扶桑 山城

#### 空母

龍驤 隼鷹 飛鷹 祥鳳 瑞鳳 龍鳳

#### 重巡洋艦

高雄 愛宕 摩耶 鳥海 青葉 加古

#### 防空軽巡洋艦

阿賀野型 12隻

#### 駆逐艦

松型 32隻

#### 補給艦

一等補給艦 5隻

### 第一連合艦隊

司令長官：林翔平大將 旗艦：イージス戦艦播磨

戦艦

播磨 三笠 紀伊 尾張 常陸 駿河

空母

鳳翔 凰凰 翔龍 瑞龍 萃鶴 勇鶴

巡洋戦艦

天羽 天月 十六夜 十五夜 石狩 十勝

駆逐艦

秋月型 20隻

補給艦

札幌型 3隻

第一機動艦隊

司令長官：小沢治三郎中將 旗艦：赤城

戦艦

金剛 比叡 榛名 霧島

空母

赤城 加賀 蒼龍 飛龍 翔鶴 瑞鶴

重巡洋艦

利根 筑摩

防空軽巡洋艦

阿賀野型 12隻

駆逐艦

松型 32隻

補給艦

一等補給艦 5隻

## 第二機動艦隊

司令長官：山口多聞少將 旗艦：空母大鳳

戦艦

上総 下総 豊前 豊後

空母

大鳳 雷鳳 雲龍 嵐龍 雷龍 虹龍

重巡洋艦

最上 三隈

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

第二支援艦隊

司令長官：小田切理 旗艦：大型自走浮きドック神戸

巡洋戦艦

石垣 佐渡

防空軽巡洋艦

阿賀野型6隻

駆逐艦

秋月型15隻 松型30隻

自走浮きドック

神戸 横浜 大阪 名古屋、

**強襲揚陸艦**

新宿 中央 文京 台東

**輸送艦**

札幌型 5隻

総参加艦艇 292隻

総参加航空機 1500機以上

これを見ての通り、帝國海軍の総力を結集した作戦であり、帝國海軍がこの作戦に負けられない、意気込みが反映されていた、さらに、極秘に角田覚治少将率いる、第一潜水機動艦隊がPつまりパナマ運河に進撃中だ。

第二連合艦隊 旗艦イージス戦艦播磨 艦橋

水兵

「今外洋に出ました」

翔平

「よし全艦、針路変更、マーシャル諸島へ機関第二戦速、両舷一杯」

水兵

「よ～そろ～」

翔平

「参謀長、対潜警戒を厳重に」

啓太

「了解！」

第一連合艦隊は、第一連合艦隊、第一機動艦隊、第二支援艦隊と離れ、大きく南に回り、マーシャル諸島近海から針路をミッドウェー島に変更して進撃する予定であった。

第一連合艦隊 旗艦戦艦大和 艦橋

水兵

「第一連合艦隊離れます！」

山本

「よし、本艦隊はこのまま、ミッドウェー島に進撃する」

宇垣

「了解」

山本

「それと、この電文を大本営に打つといってくれ」

宇垣

「了解」

第一連合艦隊、旗艦大和から、大本営に向けて電文が打たれた、

発、第一連合艦隊、旗艦大和 宛、大本営

第一連合艦隊ハ、A F攻略一出擊ス

という短い電文であつたが、この電文は米軍の諜報部に感知されて

いた。

6月5日 ニッドウエー近海

第一機動艦隊 旗艦空母赤城 艦橋

士官1

「総航空機発艦用意イ！」

空母赤城の飛行甲板では、すでに、攻撃隊の発進準備を終えていた

小沢

「第一次攻撃隊発艦はじめツ！」

飛行甲板に待機していた、第一次攻撃隊の零戦、陣風、彗星、天山  
が爆音を響かせて発艦していく。

続いて、加賀、飛龍、蒼龍、翔鶴、瑞鶴からも攻撃隊が発艦してい  
く、

第一次攻撃隊の総数は300機、

蒼空へ荒鷺が翔けていく

その荒鷺の中には、30機ほどの、双発機、銀河改も含まれていた、

銀河改は、大型正規空母翔鶴型、又は大鳳型で運用することを前提  
とした機体であり、射出機によつて、発艦する、もちろん機体の強  
度も、強化されている。

小沢

「アメさんびつくりするだらうな」

草鹿

「まさか、米軍も双発機が飛んでくるとは思はないでしょ？」

小沢

「それもそりだ、電探員、対空電探から田を離すくなー。」

水兵1

「了解」

ミッドウェー島、米守備隊

『空襲警報発令！空襲警報発令！』

ミッドウェー島の米守備隊は、迎撃準備を調経つつあった

米兵1

「来いよ、ジャップ！」

米兵2

「俺が真っ先に落としてやるのー。」

米対空陣地部隊長

「来たぞ！手厚く歓迎してやれー！」

隊長が言つた途端、対空陣地から、対空砲火が上がる

先陣を切つた、銀河改30機が、陣地に25番爆弾を投下していく。

米兵1

「おい、何故双発機が！」

米兵2

「知るか！」

米対空陣地部隊長

「喋つてないで、どんどん撃つて！」

その時はるか遠くから轟音が響いた

米兵2

「なんだ！」

轟音の正体は・・・

米兵3

「ソニックだ！」

第一連合艦隊の音神と蒼山合計40機が到着した

米対空陣地部隊長

「撃つてー！弾幕を張れ！」

音神、蒼山は、爆弾を滑走路、対空陣地に投下したのとそりそり引き揚げた

その後、第一次攻撃隊も投弾を終えて母艦に帰つていった。

第一機動艦隊 旗艦空母赤城 艦橋

小沢

士官1 「第一次攻撃隊の収容急げ！」

小沢

「収容終わり次第、防空戦闘機を全部出せ！」

草鹿

「了解」

30分後

草鹿

「第一次攻撃隊収容完了！」

水兵1

「電探に感！敵機来襲ッ！！数約200機ッ！！」

小沢

「米軍は手持ちの空母を持ってきたみたいだ」

草鹿

「そうですね」

水兵2

「ちょっと待ってください、別方向からも、反応があります

小沢

「なに!」

水兵2

「数約100機ッ!! 速度約290ノット!!」

草鹿

「290ノット!! 違いではないのか!!」

水兵2

「いえ、確かに、290ノットです間違いありません」

小沢

「なら、きっとあれだろ?」

草鹿

「あれとは?」

小沢

「多分、英海軍のシーファイアだろ?」

草鹿

「ですが、戦闘機ですよ」

小沢

「戦闘機でも物は使ひよつだ、乱戦になつたら」

草鹿

「あつ」

小沢

「その隙をついて、米軍が攻撃をかける」

草鹿

「いづしてはいられません」

小沢

「ああ、速く迎撃機を上げるんだ！」

赤城と加賀から零戦、陣風が発艦する。赤城と加賀は防空指揮所で敬礼して見送る。

赤城

「気をつけて・・・」

加賀

「頑張つてくれ・・・」

一時間後

水兵3

「右舷前方、敵雷撃機接近！」

士官1

「右舷対空砲座撃ち方始めッ！！」

水兵4

「一、二番高角砲、射撃開始！」

ドン ドン ドドン ドン

赤城の高角砲が火を吹く

水兵5

「1番機関砲射撃用意よし！」

水兵6

「2番準備よし」

士官2

「各銃座自由射撃！」

水兵5・6

『了解！』

ババババババ

米雷撃機テバステーターが爆散する

水兵5

「敵機撃墜イ！」

士官2

「臨戦態勢を解くな」

水兵 5

「了解」

その時

水兵 1

「敵機イー直上！…急降下アーーー！」

上空から、米急降下爆撃機ドーントレスが降下してきた！

青木艦長

「面々舵一杯ツ！」

操舵手

「よ～そろ～」

水兵 2

「敵機投弾！」

赤城の艦体が針路を急速に変える

青木艦長

「くつ総員衝撃に備えろーー！」

ズッガアアアアアン

ズッガアアアアアン

ズッガアアアアアン

青木艦長

「ツ被害報告ツ！急げツ！！」

士官1

「飛行甲板に直撃弾！数3！飛行甲板は使用不能です！」

水兵2

「飛行甲板にて火災発生！現在消火作業中です！」

青木艦長

「機関室ツ！報告急げ！！」

青木艦長が高声電話に向かって叫ぶ

すると

機関長

「こちら機関室、機関6機とも異常なし！」

と返ってきた

小沢

「おい！赤城しっかりしろ！」

赤城

「お、小沢、私は・・大丈夫よ・・」

小沢

「そうか、火災は甲板だけだ、沈む気配はない」

その時

水兵 1

「加賀、翔鶴、上空に急降下アアアアアアアア！」

加賀と翔鶴に米急降下爆撃機ドーントレスが逆落としに来た！－！

第一十一話 バトル・オブ・ミッドウェー（前編）（後書き）

「意見」感想お待ちしております。

## 第一十一話 バトル・オブ・ミッドウェー（中編）

6月5日

第一機動艦隊

空母 加賀

水兵1

「敵機イー直上！…急降下アーーー！」

岡田艦長

「取～舵一杯！…！」

操舵員

「よ～そろ～」

ヂン ジン ジン ジンシ…！

ダダダダダダダダッ！…

高角砲、対空機銃が敵機に向かって火を噴く

水兵2

「敵機投弾！」

岡田艦長

「機関一杯！…総員衝撃に備えろッ！…！」

加賀は機関を唸らせ、加速するが・・・

ズツガアアアアン

ズツガアアアアン

ズツガアアアアン

ズツガアアアアン

被弾した、さらに

ズツガアアアアアン

機銃弾が命中し、操縦不能になつたドーントレスが1機

飛行甲板の後部昇降機付近に激突した

岡田艦長

「ひ、被害報告！」

水兵1

「飛行甲板に直撃弾3飛行甲板は使用不能です」

水兵2

「後部昇降機付近に敵爆撃機が激突！付近にて火災発生！」

岡田艦長

「消火急げッ！！消火が済み次第、飛行甲板の養生を開始せよ！」

士官2

「了解！」

空母 翔鶴

水兵3

「左舷上空、敵機急降下アアーー！」

有馬艦長

「機関最大戦速、面々舵一杯！」

操舵手

「よ～そろ～」

水兵3

「敵機投弾ツ！間に合いませんツ！」

有馬艦長

「つく、総員衝撃に備えろツ！－！」

ズッガアアアアアン

ズッガアアアアアン

有馬艦長

「被害報告！－！」

水兵4

「飛行甲板後方に直撃弾されど、火災なし！被害軽微！！」

翔鶴型空母は史実とは違い、飛行甲板を装甲化、急降下爆撃対策を図っている

有馬艦長

「そうか、翔鶴も大丈夫ですか」

翔鶴

「ちょっと痛かつたけどこのくらい平気よ」

有馬艦長

「それはよかったです」

水兵3

「旗艦赤城から信号！<敵艦隊へ向けて攻撃隊を準備せよ>です」

有馬艦長

「そうですか・・・彗星、天山発進準備！」

士官3

「了解」

格納庫から彗星、天山と護衛の零戦と陣風、計90機があげられる。

？？

「有馬艦長」

有馬艦長

「何でしようか、野中大尉

野中大尉、陸攻操縦の腕を買われ、翔鶴の銀河改隊の隊長をしていた

野中

「我々も出撃許可を……」

有馬艦長

「ですが、銀河改は、先ほどのミッヂドウニー空襲で被弾機が多く修理しないと使えないことが多いとか」

野中

「いえ、先ほどの機体とは別に、15機の銀河改が既に攻撃準備を終えて、命令待ちです」

有馬艦長

「なつ！」

野中

「艦長！出撃許可を！」

有馬艦長

「・・・分かりました、銀河改発進準備！」

野中

「あつがとうござります」

有馬艦長

「野中大尉、必ず帰還してください」

野中

「了解、全機連れて帰りますよ」

飛行甲板では既に、天山、彗星と護衛の零戦、陣風が発進準備を整えていた、

士官3

「銀河改を飛行甲板に！」

後部の昇降機から銀河改が飛行甲板にあげられる

水兵5

「天山、一番機発艦せよ」

天山が風を切つて発艦していく

翔鶴に続いて、瑞鶴、蒼龍、飛龍からの攻撃隊があげられる。

30分後

水兵5

「零戦、陣風、全機発艦しました」

士官3

「よし！次、銀河改発艦準備イ！」

水兵5

「よ～そろ～」

銀河改がカタパルト発艦のため、艦首に運ばれる

水兵 6

「射出機連結よし」

水兵 5

「射出機圧力一杯！」

士官 4

「銀河改、発艦せよ！..！」

ズツシャアア

射出機から銀河改が大空へ飛び立つ

第一連合艦隊 旗艦

戦艦 大和

水兵 7

「赤城、加賀被弾！火災発生！」

山本

「やられたか」

宇垣

「でも、消火はできそうです」

士官 5

「赤城、加賀から報告！両空母とも火災あれど、沈没の心配はなし

安心されたし、だそうです

山本  
「そりゃ

水兵  
「敵機襲来！」

高柳艦長  
「対空戦闘用意！」

山本  
「敵機の機種は」

水兵  
「ちょっと待つてください・・・機種判明、英攻撃機ソードフィッシュ  
シュー！」

山本  
「やはり」

宇垣

「この近くに英空母部隊もいると」

山本

「その可能性が高いだろ」

宇垣

「なら、索敵機の機数を増やしましょ」

山本

「いや、もうすぐ連絡が来るだろ?」

宇垣

「そうですか?」

宇垣が首をかしげていると

水兵8

「報告ー。」

水兵が艦橋に飛び込んできた

水兵8

「第一一連合艦隊より報告ー.を発見、貴艦隊より北西400キロの地点に英空母部隊を発見ー.」

山本

「うへん、近いな」

宇垣

「攻撃機を出しますか」

山本

「いやその地点なら」

山本が海図を指す

宇垣

「つあ」

山本

「攻撃隊の救難用に出してあつた、第一戦隊がいる」

第一連合艦隊は、攻撃隊の救難、誘導用に戦艦伊勢を旗艦とする第二戦隊を北西300キロの海域に展開させていた

宇垣

「今すぐに、第一戦隊に連絡します」

宇垣参謀長が艦橋から飛び出しつて言った

高柳艦長

「主砲発射準備」

砲術長

「主砲三式弾装填！」

水兵9

「装填完了！」

砲術長

「方位、右2度修正！撃ち方用意！」

高柳艦長

「大和行くぞ」

大和

「はい！」

高柳艦長・大和

『撃つ〜〜〜〜〜!』

ズツドオオオオ  
ン

大和から放たれた三式弾は、ソードファイツシュの10メートル手前で炸裂し、ソードファイツシュを全機撃墜した。

水兵8

「電探感なし」

山本

「油断するな、警戒態勢で待機」

宇垣

「了解」

第16任務部隊 旗艦  
空母 エンタープライズ

米士官1

「攻撃隊より報告! 敵大型空母2隻炎上しているとのことです」

スプルーアンス提督

「そりゃー! よくやつてくれた」

スプールアンスが嬉しそうに言つた

「これも、英海軍との共同戦線のおかげだな」

参謀達も皆嬉しそうだ

ここで米海軍と英海軍の艦隊編成を説明しよう

### 第16任務部隊

司令官：レイモンド・A・スプルーアンス米少将 旗艦：エンタープライズ

#### 重巡洋艦

ペンサコーラ ソルトレイクシティ ノーザンプトン ルイビル ヒューストン

オーガスター ニューオーリンズ アストリア ミネアポリス

#### 軽巡洋艦

アトランタ ジュノー サンディエゴ セントルイス ヘレナブルックリン フィラデルフィア

#### 空母

エンタープライズ ヨークタウン ホーネット ワスプ レンジ

#### 駆逐艦

ニブラック リヴァーモア エバール プランケット ケア  
ニー グワイン メレディス グレイソン モンセン  
ウールゼイ ラドロー エディソン エリクソン ウィルクス  
クス ニコルソン スワンソン イングラハム ブリスト  
ル エリソン ハンブルトン  
ロッドマン ホモンズ

#### 給油艦

マリアス マナティー

航空機

合計 430 機

さらにこの部隊とは別に、ウイリアム・パイ中将が率いる、旧式戦艦7隻もミッドウェー島より150キロの地点にいる。

では次に英海軍の艦隊を説明しよう

英國太平洋艦隊

司令官：エドワード・サイフレット中将 旗艦：イラストリアス

戦艦

クイーン・エリザベス ウォースパイア ヴァリアント

重巡洋艦

ヨーク エクセター

軽巡洋艦

アルゴノート ボナヴェンチャーラ カリブティイス クレオパトラ

空母

イラストリアス フォーミダブル ヴィクトリアス ハーミーズ

駆逐艦

ミルン マーティア マスケティア ミュルミドン マッチレス ミーティア マーン マーティン ラフォーレイ ランス グルカ

航空機

合計128機

英國太平洋艦隊には、戦艦が配備されているが、空母との速力差があるため、現在、パイ中将が率いる、艦隊に、臨時編入中だ

スプールアンス提督

「だが、まだ空母の数は歴然だ、これを機に一気に叩くぞ、第一次攻撃隊発艦準備…」

そのとき、艦橋に水兵が飛び込んできた

米水兵1

「レーダー室より報告！敵機来襲！数約200機…！」

スプールアンス提督

「なんだと…急いで防空戦闘機を出せッ…！」

スプールアンス提督が焦りながら指示を出す。

スプールアンス提督

「こんな所で一隻でも空母を失えば…この戦争…」

さらにスプールアンス提督に追い打ちをかけるような、電文が飛び込んだ

米士官1

「提督！英國太平洋艦隊より緊急電です！」

スプールアンス提督

「どうしたんだ」

米士官 1

「はつ読みます。く我、敵艦隊の攻撃を受ける。敵艦隊は新型戦艦4隻を含む強力な水上打撃艦隊。至急応援を求むゝ。以上です」

スプールアンス提督

「なんだと！」

## 第一十一話 バトル・オブ・ミッドウェー（中編）（後書き）

「意見」感想お待ちしています。

## 第一二三話 バトル・オブ・ミッドウェー（後編）

ミッドウェー沖

第一連合艦隊

第一戦隊 旗艦 戰艦伊勢 艦橋

水兵1

「対水上電探に感！敵艦隊！空母3、重巡2、軽巡4駆逐艦多数！  
まもなく主砲の射程圏内に入ります」

この第一戦隊を率いているのは、松田千秋少将

松田

「主砲戦用意！全艦最大戦速！」

士官1

「よ～そろ～」

武田艦長

「砲術長！主砲射撃準備はできているか？！」

砲術長

「もちろんです艦長！すでに全砲塔には、徹甲弾が装填済みです

武田艦長

「よし、距離3万5千で射撃を開始する」

砲術長

「了解」

英國太平洋艦隊

旗艦 空母 イラストリアス 艦橋

英水兵 1

「前方約3万8千に艦影！視認！敵艦隊です」

英士官 1

「なんだと！何故気づかなかつた、レーダーは？」

慌てる英國艦隊の司令部

英水兵 2

「レーダー室より報告！戦艦らしき艦影を発見しました！」

サイフレット提督

「つぐ、全艦180度回頭、駆逐艦隊に煙幕を張らせろ！」

英國艦隊は一斉に回頭する

英水兵 1

「敵艦隊発砲！来ます！」

距離が3万5千メートルになり、第二戦隊の旗艦伊勢が発砲、続い  
て日向、扶桑、山城も射撃を開始した、

サイフレット提督

「大丈夫だ、まともなレーダーも持っていない、ジャッブが初弾で  
あてるわけg・・」

ズシュウウウウウンツ！！

ズシュウウウウンツ！！

ズシュウウウウンツ！！

英水兵1

「夾叉されました！」

サイフレット提督

「落ち着け！ まぐれに決まつている、ジャップg・・・・

ズッドオオオオオオオオンツ！！

サイフレット提督

「どうしたツ！」

英水兵1

「空母ハーミーズ・・・轟沈」

戦艦日向が放つた、6発の徹甲弾のうち、一発がハーミーズの飛行  
甲板を突き破り、機関室で役目を終えた徹甲弾が、ハーミーズの竜  
骨を圧し折つた、その結果、ハーミーズは、くの字に折れ、1分も  
かからずその姿を深い海に沈めた。

??

「そ・・そんな、ハーミーズ姉さま..」

目の前で沈み逝く、ハーミーズの名を叫ぶ、イラストリアス

イラストリアス

「・・・許さない・・・絶対許さないわよ」

その時、

伊勢が第一射を放つた

第一連合艦隊

第一戦隊 旗艦 戰艦伊勢 艦橋

水兵1

「敵空母撃沈！」

砲術長

「やるなあ、日向の連中」

武田艦長

「感心している場合ではないぞ砲術長、日向の連中に後れを取るな」

砲術長

「了解、第一射用意イ！」

砲塔長1

「1番主砲、装填完了！」

艦内電話を通じ一番主砲塔から装填完了の連絡が入る

砲塔長2

「同じく2番主砲装填終わりッ！」

砲術長

「第一射用意！完了！」

武田艦長

「撃～～つ！！」

ズツドオオオオーン

水兵1

「着弾・・・今！」

水兵2

「敵空母、艦橋に命中弾確認！敵空母速力低下」

水兵3

「敵巡洋艦に向かってきますッ！」

武田艦長

「目標変更、敵巡洋艦に照準！」

砲術長

「了解！」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米士官1

「英國太平洋艦隊旗艦イラストリアスからの通信が途絶しました」

米水兵1

「敵機、来ますッ！！」

スプールアンス提督

「くッ、各銃座自由射撃開始！全兵器使用自由！」

米艦隊旗艦エンタープライズが対空砲火を撃ち上げる、それを合図に重巡、軽巡、駆逐艦も、必死に弾幕を張る、

米水兵2

「左舷より敵機、雷撃体勢！」

米士官1

「何としても撃ち落とせ！」

米水兵3

「駄目だ、上からも来やがったッ！！」

急降下爆撃機彗星2機が、エンタープライズに襲いかかつた

エンタープライズ

「来るなーッ！…ジャッブッ！！」

エンタープライズが叫びながら、セイバーで彗星を切り下ろす

それに伴い、対空砲火が彗星に向けられる

だが、

彗星はそれに臆することなく、

急降下を敢行する

米水兵1

「敵機投弾！回避を！…」

艦長

「面々舵！」

米操舵手

「アイ・サー」

操舵手が舵輪を懸命に回す

だが、

ズガーン

ズガーン

250キロ爆弾2発が、エンタープライズの飛行甲板、中央と後部に命中した

エンタープライズ

「グハアアアツ！！」

エンタープライズが吐血する。軍服が血だらけになる。

エンタープライズ

「くっ、このぐらいで・・・」

セイバーを杖のようにして、何とか立つすると・・・

彼女の目に映つたものがあった

後方で必死に対空戦闘を行つている

空母ホーネットに

忌々しい、日の丸をつけた双発機が

襲いかかろうとしていた

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「ほう、艦爆隊の連中やるじやないか

野中

「よし、最後尾のヨークタウン型からだ！」

『了解』

無線から、銀河改全機の搭乗員が答える

銀河改の発動機、誉一一型が唸る、

野中

「まだだぞ・・・」

猛烈な対空砲火を潜り抜けて

野村大尉機が雷撃体勢に入る

野中

「いまだ！投下アアーー！」

ズッシャア

銀河改から九一式航空魚雷改2が投下された

九一式航空魚雷改2は真っ直ぐ、突き進み

空母ホーネットの艦尾に命中した

野中

「やつたぞ、命中だ」

銀河改搭乗員1

「艦尾なら、推進器か舵のどちらかに被害を与えているはずです」

野中

「全機攻撃は終わったか

銀河改搭乗員2

「はい、終わったようです

野中

「よし、後は、第一連合艦隊に任せ、全機帰還する」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米士官1

「敵機が引き揚げます」

スプールアンス提督

「全艦の被害を報告せよ」

米士官2

「了解、空母ヨークタウン、ホーネットも破、ワスプ、レンジャー  
は大破しています」

艦長

「本艦は飛行甲板後部に爆弾が命中し、発艦はできますが、着艦は  
できません」

スプールアンス提督

「・・・英國艦隊は?」

米士官1

「現在、巡洋艦ヨークから撤退するとの無電を傍受しました」

スプールアンス提督

「ヨークだと、旗艦のイラストリアスはどうしたんだ」

米士官2

「はい、報告だと、敵戦艦からの砲撃を艦橋に受けた……」

スプールアンス提督

「……そうか……本艦隊はこれより撤退する、戦艦部隊にも打

電せよ」

米士官1

「了解」

米水兵1

「敵機来襲！」

第17任務部隊に第一次攻撃隊が襲来した

スプールアンス提督

「まだ来るか……対空戦闘用意！」

米士官2

「アイ・サー」

第二次攻撃隊

第二次攻撃隊には、第一連合艦隊の音神、蒼山そして、何故か電空  
が一機含まれていた

その電空に搭乗していたのは・・・

翔平

「おっ、山本長官見えてきましたよ」

山本五十六

「おっ本当だ、機長もう少し降りられないか?」

第一第一連合艦隊の長官であつた。

伊藤整一

「何言つているんですか、山本長官」

伊藤整一中将も乗つていた

翔平

「もう少し高度を下げないとよく見えないじゃないか」

機長

「林長官まで、これ以上高度を下げたら間違いなく、対空砲火にや  
られますよ」

翔平

「だ、そうですよ、山本長官」

山本五十六

「それは残念だ」

翔平

「大丈夫ですよ、なにせ着艦を敢行するのですから」

山本五十六

「そりだつたな」

機長

「林長官、音神隊が突撃命令を待っています」

翔平

「よし全機突撃！」

機長

「了解」

音神 山口中佐機

昇

「命令が来たぞ、全機突撃、アメさんを脅かしてやれ」

哲也

「了解、では先に行きます」

昇

「おお、行つて來い」

哲也

「では、行つてきま～す！」

おい、どこかに買い物に行くみたいな会話だな

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

米水兵1

「敵機一機突っ込んでくる、速い！」

スプールアンス提督

「何としても撃ち落とせッ！これ以上攻撃されたらパールハーバーに帰れなくなるぞ！」

音神が超音速でエンタープライズの艦橋横一メートルの地点を通過する

すると

バリン

艦橋の防弾ガラスが全部割れた

スプールアンス提督

「わつ、何が起こったんだ！」

米士官2

「分かりません、敵機が高速で通過したらいきなり・・・」

スプールアンス提督

「・・まさか・・奴らは音速を超えているのか?」

そうだ、と言わんばかりに、音神が急降下や急旋回を繰り返す

それから30分間、音神、蒼山は米艦隊の周りを高速で飛び回り

米艦隊、将兵の精神を削つた

スプールアンス提督

「なぜだ、何故奴らは、一思いに攻撃しないのだ!」

米士官1

「分かりません、でも確かなのは、我々は日本軍から逃げられない」と言つ事です

その時さうに米艦隊に報告が舞い込んだ

米水兵3

「レーダー室から報告敵艦隊探知!大艦隊ですッ!—」

スプールアンス提督

「・・・」

スプールアンス提督は黙り込んでしまった

制空権は皆無、さらに、強力な敵艦隊が襲来したら

米水兵1

「敵双発機が接近中!」

スプールアンス提督

「撃ち落とせ」

米水兵2

「それが攻撃をかける様子が・・・」

スプールアンス提督

「なんだと・・・」

スプールアンス提督は、艦橋の割れた窓から、問題の双発機を見る

スプールアンス提督

「・・・・」

確かに、攻撃をかける気配はなさそうだ、脚を出しているし、何より速度が遅い

スプールアンス提督

「・・・何をするきだ?」

もちろん接近中の機体は、電空だ

知つての通り、電空つまりV-22オスプレイはティルトローター機でありヘリコプターのように、着陸、離陸ができる。

電空機内

機長

「長官、着艦します」

翔平・山本  
『たのんだ』

機長

「了解!」

伊藤整一

「それにしてもどうして私をわざわざ軍令部から呼び寄せたのですか

山本五十六

「敵将、スプールアンスと友好があるだらう。」

伊藤整一

「はい、駐米武官時代に

山本五十六

「うん、今回スプールアンス少将との交渉には君が必要だと思ったから呼んだんだ」

伊藤整一

「そうですか

機長

「行きますよ

翔平

「頼んだ」

機長

「テイルト変更・・90度！！」

電空の発動機が90度になる

機長

「着艦ッ！！」

第16任務部隊

旗艦 空母 エンタープライズ 艦橋

スプールアンス提督

「なッ！..」

スプールアンス提督は、奇怪な双発機が、飛行甲板上空に近づき、上空で静止するのを見て驚愕した、

米士官1

「空中で静止している・・・」

米水兵1

「おい、見ろ！着艦するきだ」

米将兵も同じく驚愕していた

スプールアンス提督

「・・・私は甲板に出てる

スプールアンスは艦橋から出ようと/orする

米士官2

「提督！お待ちください…危険です！」

士官が止めようとする

スプールアンス提督

「ふつ・・・大丈夫だ、感だが、旧友が語りに来たような気がして  
ね」

スプールアンス提督は艦橋から出て行つた

米士官3

「提督！」

後から、士官の一人が水兵を数人伴なつてついていく

電空機内

機長

「全着艦作業終了了了！」

山本五十六

「お見事！」

翔平

「では行きますか

伊藤整一

「はい

翔平たちが電空から降りると・・・

翔平

「う・・・」

銃剣を差した小銃に囲まれた

山本五十六

「やつぱり、銃口に囲まれるのは、いやだな

伊藤整一

「そうですね・・・アツ！」

伊藤整一中将は見知った顔を見つけた

それは、駐米武官だったころに知り合った友人であった

伊藤整一

「レイモンド

米将兵の中から一人の将校が出てくる

スプールアンス提督

「セ、セイイチ、どうしてここ

伊藤整一

「交渉に来た」

山本五十六

「そうです、我々は交渉に来たのです」

スプールアンス提督

「……士官室にお連れしる」

米士官3

「ア、アイ・サー」

空母 エンタープライズ

士官室

スプールアンス提督

「それにしても……アドミラル・ヤマモトを始め、日本海軍の首脳陣が何の用ですか？」

山本五十六

「率直に言いますと……降伏を勧告に来ました」

そつ山本が言つと、米首脳陣が一斉に笑い出した

スプールアンス提督

「ハハハハ……出来る、分けないでしょ？——我々は制海権こそ皆無ですが、多数の巡洋艦、駆逐艦に守られています」

翔平

「ですが、私の艦隊が今あなたの方の艦隊を包囲中です、私の命令ひとつで、」の艦隊を海の藻屑と消えます」

スプールアンス提督

「ん？失礼ながら貴官は？」

スプールアンス提督は、大将の階級章を付けている、ズバ抜いて若い将校に疑問を持った

翔平

「あつ、失礼自分は第二連合艦隊司令長官林翔平です」

スプールアンス提督

「なつ！なら包围している艦隊も」

翔平

「第二連合艦隊です」

スプールアンス提督

「・・・・」

山本五十六

「提督、我々は出来れば、米国とも戦いたくないんです、我々は一刻も早い、世界平和を求めています、戦争をやりたがっているのは一部の特進階級だけです」

スプールアンス提督

「・・・確かに、だが・・・」

翔平

「スプールアンス提督、戦争は無意味な争いです、ですが、国民が愛する祖国のためにと、信じて、一つしかない命を国にささげるのです、しかし往々にして国家の指導者とその指導者を支持する特権階層が国民を戦争に駆り立てるのです、スプールアンス提督、彼らの利益のために、何故若者が命を捨てなければならないのでしょうか?つと、私はそう思います」

スプールアンス提督

「・・・分かった、してその条件は?」

山本五十六

「空母ヨークタウンクラス3隻、いかひらは、貴艦隊が帰還するまで、手を出しません」

翔平

「それと、私の艦隊から、病院船を出しましょう」

スプールアンス提督

「分かりました」

その後スプールアンス提督は、艦内放送を使って事情を伝えた、山本五十六初め、翔平、伊藤も滑らかな英語で彼らに訴えた・・・

乗組員たちは、最初は驚き疑つたがやがて理解した

戦争など誰も望んでいないのだから

戦争をやりたがっているのは一部の特権階級だけなのである

その後、ヨークタウン、エンタープライズ、ホーネットの三隻から、乗組員が病院船橋立、巖島に、移りハワイへと向かった

翔平

「ふう、死ぬかと思った」

翔平はエンタープライズ飛行甲板にへたり込んだ

山本五十六

「林君、そんなに疲れたのか」

翔平

「山本長官は、疲れないんですか、主に精神的に」

山本五十六

「こんなことで疲れていたら先が持たんぞ、林君」

翔平

「そうでしたね、山本長官」

その時、電空から機長が飛び出してきた

機長  
「長官…」

翔平

「そうした機長?」

機長

「吉報です！第一戦隊からの報告がきました、英艦隊の捕獲に成功しました」

山本五十六

「作戦通りだな」

伊藤整一

「はい」

翔平

「では、戻りましょうか」

山本五十六

「そうだな、では機長」

機長

「はい、責任をもつて、大和までお送りします」

翔平

「機長頼んだぞ」

機長

「はい、林長官、ではまた迎えに来ます」

翔平

「待つているぞ」

翔平は、エンタープライズの飛行甲板から、飛び立つ電空を見送る  
と、

エンタープライズの艦橋に足を進めた

翔平

「（さつきから、誰かにつけられている気がする・・・）」

翔平はそんなことを感じながら艦橋に向かつた

空母 エンタープライズ 艦橋

翔平

「ここが艦橋か、実際に機能的にできているな・・・おい、さつきからonsoonso後をつけるのは止めてくれないか」

翔平が言つと、影から長い銀髪の少女が出てきた

エンタープライズ

「何故わかつた？」

翔平

「感だ」

エンタープライズ

「感だと・・・」

翔平

「そうだ、といひでこの艦の艦魂が俺に何の用か？」

エンタープライズ

「お前は、アメリカ合衆国をどう思つてこる」

翔平

「ん？ アメリカ？ 今のか」

エンタープライズ

「そうだ、今の大統領をどう思つ」

翔平

「ルーズベルト大統領か・・・日本を戦争に引きずり込んだ張本人」

エンタープライズ

「やっぱりそうか・・・アメリカ自体はどう思つている？」

翔平

「アメリカ自体は好きだぞ、日本の良きパートナーでもあるしな」

エンタープライズ

「そうか・・・うん？ 一寸待てーなんだ、日本の良きパートナーで  
もって」

翔平

「その話は、奥に帰つてからだ」

エンタープライズ

「無事に、私達を連れて帰れると？」

翔平

「もちろん、連れて帰るぞ」

エンタープライズ  
「雷撃されるぞ」

翔平  
「何にだ？」

翔平が言つた時、まさにタイミングよく

SH - 60K が 30 機

飛び立つた

エンタープライズ  
「なんだあの機体は？」

翔平

「対潜ヘリ、SH - 60K 」の時代の潜水艦では、あれからは逃げられない

エンタープライズ  
「この時代？」

翔平

「おっと、口が滑った」

エンタープライズ  
「話せ、この時代とはなんだ、やっぱりお前たちは・・・

エンタープライズは翔平の胸ぐらを、掴み問いただす

翔平

「後で話す」

エンタープライズ

「本当だな」

翔平

「もちろん、約束しよう」

エンタープライズ

「分かった」

翔平

「おっと迎えが来たようだ、今日の夜、播磨の長官室に来てくれ

翔平はそういうと、艦橋から出て飛行甲板に向かった

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官室

翔平

「さて現在の状況は?」

啓太

「現在、第一連合艦隊がミッドウェー島に艦砲射撃を実行中です、艦砲射撃が終わり次第、一木旅団がミッドウェー島に上陸する予定です」

一木旅団、本来一木支隊と呼ばれた、旅団は、現在、大日本帝国陸軍の標準装備とされている、三式自動小銃が三八式歩兵銃の代わりに配備されている

また5両の一式戦車、一式対空戦車を始め、諸車両で機械化を図っている

翔平

「作戦通りか・・・英國空母は」

葵

「はい、英國空母は、空母イラストリアス以下3隻を拿捕し、修理のため神戸に入渠しました」

翔平

「英國空母の拿捕は予想外だつたな」

葵

「そうですね」

武

「でもこれで改装の仕事が増えるわけだ」

武が嬉しそうに答える

翔平

「頼むから、使う側の方も考えててくれよ」

武

「任しどけ」

翔平

「さて・・・こんなもんか」

啓太

「おう、これで大体の報告は済んだ」

その時、長官室のドアがノックされた

翔平

「どうぞ」

エンタープライズ

「失礼する」

翔平

「来たか・・・うん、後ろの一人は、ヨークタウンとホーネットか  
?」

エンタープライズ

「そうだ」

翔平

「そうか、じゃあ、改めて、日本海軍へようこそ、俺が当艦隊の司  
令長官林翔平だ」

播磨

「この艦の艦魂、播磨よ、宜しく」

エンタープライズ

「あつ・・・私はエンタープライズ」

エンタープライズは微妙な表情を浮かべながら答える

ヨークタウン

「いじらしくそよろしく、私はヨークタウンよ」

頭に包帯を巻いている、長身の少女が答える

ホーネット

「私はホーネット、宜しく！」

松葉杖を突きながらも、元気に答えるホーネット

翔平

「宜しく、では、單刀直入に話そう、俺ら第一連合艦隊は、未来の日本海軍だ」

エンタープライズ

「やはり、何故この時代に来たんだ」「

ヨークタウン

「ちょ、一寸、エンター、そんな話をまともに信じるなんて、どうかでこけて頭を打った？」

エンタープライズ

「いや、ヨーク姉さん、私は正常だ、でも姉さんあんな航空機を見たら、そつ思つてもおかしくないだろ？」「ひう」

ホーネット

「確かにそうだね～」

翔平

「では、これから恒例の映画を見せる、啓太ー。」

啓太

「ほい」

照明器具が消され、液晶テレビがつく

一時間後

翔平

「どうだつた？」

ヨークタウン

「何というか・・・」

翔平

「お～やつぱりその反応か・・・鳳翔」

エンタープライズ

「鳳翔？世界で初めて、航空母艦として設計された艦の艦魂？」

翔平

「いや、そつちではなくて・・・」

鳳翔

「呼んだか？」

翔平

「早いな、一寸、ヨークタウン達の話しが相手になつてくれ」

鳳翔

「うつ、何故私がそんなことを・・・」

翔平

「頼むよ、同じアメリカ艦だろ」

鳳翔

「・・・分かつた」

ヨークタウン

「あの、長官、彼女は？」

翔平

「元アメリカ空母の鳳翔」

エンタープライズ

「元？」

翔平

「そりや、まあくわしい話は鳳翔から聞いてくれ」

ヨークタウン

「分かつたわ」

ヨークタウンたちは鳳翔に連れられて、長官室を出て行った

「翔平報告したいことがあるんだが」

翔平

「ん? どうしたんだ」

武

「ここの間、機関のメンテをしたり」

翔平

「ああ、一年に一度のメンテだろ」

武

「そつなんだが、この時代に来て3回のメンテをしただろ」

翔平

「ああ、そつだな」

武

「実はな、部品が全く消耗していないんだ」

翔平

「・・・ハア?」

翔平は、人生最大級の、間の抜けた返事をした

武

「純水素タービンエンジンは、設計上では中のタービンを二年間に一度交換しなければ、爆発する危険もある、だが、過去三度交換してきたが全く消耗していない、それだけではない、多少の海水をかぶっているはずの、主砲塔、両用砲、機関砲までもが、全く腐食し

ていい、せり」とこの艦隊の全艦を精密に検査したところ同様の現象が起きている

この話を聞いてさりに、清水参謀がしゃべりだす

葵

「長官一寸私にも気になることが

翔平

「なんだ」

葵

「この間、健康診断がありましたよね」

翔平

「あつたな」

第一連合艦隊の将兵は、病院船橋立、松島、巣島の3艦で半年に一度健康診断を受けている

葵

「実は、過去に来てから、全ての将兵の身長が伸びていないんですね」

翔平

「はい? いつたい、何が起こったんだ」

播磨

「分からぬわ」

??

「教えて、あげましょうか？」

突然長官室に声が響いた

翔平

「誰だ！？」

翔平が叫ぶと、突然辺りが真っ白になつた。

## 第一二三話 バトル・オブ・ミッドウエー（後編）（後書き）

天嶽 「遅くなりましたすみません」

播磨 「なにしていたの作者」

天嶽

「パソコンが新しくなつてから初期設定とか、リカバリディスクの作成とか、いろいろと」

播磨

「つで、今回はものすこく微妙なところで終わつたけど」

天嶽

「今、鋭意執筆中です、あともう少し時間を」

播磨

「GWが終わるまで」でできるだけね

天嶽

「最善を取へします」

播磨

「よろしく」

天嶽

「（ほとんど脅しだよ、主砲を突き付けてくるなんて）」

播磨

「では読者の皆様、『意見』『感想お待ちしています』

## 第一一十四話 三貴子との会談

第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官室 (?)

謎の声によつて、謎の空間に飛ばされた翔平たち

翔平

「いつたい、何が起つたんだ」

播磨

「分からぬわ」

武

「おい、誰かいるわ」

武は、三つの人影らしきものを見た

翔平

「誰だ?」

??

「そんなに警戒するでない」

啓太

「警戒しない方がおかしい」

??

「うつ、それも、もつともな話だ」

翔平

「だから誰だつて聞いているだろ」

建速須佐之男命

「おつと、スマン、俺は建速須佐之男命」

播磨

「つえ！」

月夜見尊

「私は、月夜見尊」

天照大神

「妾は天照大神じや」

なんと、翔平たちの前に三貴子が現れた

翔平

「三貴子が何の用ですか」

建速須佐之男命

「知りたいだろ？、なぜ、艦の腐食が進まないか」

月読見尊

「そして、なぜ成長が止まっているのかを」

天照大神

「それは妾達が、諸君らの、時空間を歪めたからじゃ」

武

「時空間を歪めた?」

天照大神

「そうじや、諸君たちをこの時間へと飛ばし、飛ばす時に、時空間を歪め、諸君たちの艦の時間は、止まっているのじや」

翔平

「へえ~」

建速須佐之男命

「まあ、それと同時に前らの、体も成長はしていない」

武

「それは一部の人には面白い効果だな」

翔平

「おい、何言つてるんだよ親父」

バッシ

武

「痛ツ」

葵

「何故私達はこの時代に飛ばされたのでしょうか?」

天照大神

「それは・・・なんだっけ?」

## スツ テエツン

天照以外の全員がすつこけた

建速須佐之男命

「おい、しつかりしてくれよ、姉さん」

月夜見尊

「はあ）、シツカリしてくださいよ」

天照大神

「ふむ、では、説明するぞ」

翔平

「はい」

天照大神

「諸君らをこの時代に送ったのは、日の本いや、世界を破滅から救つてもうつためじや」

武

「破滅？」

建速須佐之男命

「そうだ、西暦2026年の8月15日に第二次世界大戦が勃発する」

月夜見尊

「原因是、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の暴走」

天照大神

「戦争が激化するにつれて、暴走した中国は、核ミサイルの使用したのじゃ」

月夜見尊

「これにより、日本国は壊滅、アメリカ合衆国始め歐州も同じく壊滅した」

建速須佐之男命

「この報復処置として、アメリカ合衆国、ロシア連邦は、中国に核ミサイルを使用」

天照大神

「人類は滅びたのじゃ」

翔平

「そんな・・・」

武

「会社の利益の9割をつぎ込んで作った艦隊も無駄だつたて事か」

建速須佐之男命

「無駄ではないぞ」

啓太

「なぜ」

月夜見尊

「この艦隊があつたからこそ、歴史を変える」と思いにつき、実行

したからな

天照大神

「やうひの事じや」

播磨

「やうひなの」

葵

「私達はこれから何をすれば」

月夜見尊

「今までやつてきたとおり歴史を変えてください」

建速須佐之男命

「特に、原子爆弾だけは闇に葬つてほしい」

翔平

「それは、開発をやめさせ、開発をやるところは徹底的にしぶせばいいんですね」

天照大神

「やうじや、あつ、ちなみに、諸君らの時間が再び動き出すのは西暦2025年の4月1日じや」

月夜見尊

「但し、時間が止まつても、成長、腐食が止まつていふるだけで、艦船は攻撃を承ければ損傷するし、人間も怪我をする」

建速須佐之男命

「そこだけは注意してくれ

翔平

「分かつた」

天照大神

「では、世界の運命は諸君らの双肩にかかる、後は任したぞ」

翔平

「任してください」

翔平が元気よく返事をすると、三貴子は微笑み

消えて行つた

翔平

「つは！」

翔平が氣が付くと、艦底から重厚なエンジン音が響き渡つていた

武

「なんだつたんだ」

翔平

「少なくとも夢ではないだろ？」

啓太

「今後の作戦をさらに練り直すことが必要だな」

葵

「やつですね」

播磨

「私は監視のことを話してくれる」

翔平

「正確に伝えてくれよ」

播磨

「分かったわ」

播磨が転移していった

翔平

「さて、これからどうするか」

武

「簡単だろ、まずロスマラモス研究所を潰す」

翔平

「それはいいが、技術的にも厳しいぞ」

啓太

「やっぱり富嶽が完成するまでは爆撃は不可能

葵

「少なくとも時間があと半年必要です」

翔平

「うーん、そうあるしかないな」

その時、一人の士官が長官室に入ってきた

士官1

「失礼します」

翔平

「どうした」

士官1

「第一潜水機動艦隊から入電、龍は眠った 以上です」

翔平

「うん、分かった」

士官1

「失礼しました」

士官が出て行つた

翔平

「どうやら、パナマ運河封鎖に成功したようだな」

武

「そうだな、無理して設計したかいがあるつてもんだ」

その後、ミッドウェイ攻略作戦も終了し第一連合艦隊はトラックに、  
第二連合艦隊は無事横須賀に入港した。

ヨークタウン級三隻は、横須賀のドックに入れられて改造されるこ

となっていた。

## 第一十四話 三貴子との会談（後書き）

天嶽

「更新しました」

播磨

「期日通りだけど、短くない」

天嶽

「はい、じじで、三貴子とは何かを説明します、三貴子とは記紀神話で黄泉の国から帰つてきたイザナギが黄泉の汚れを落としたときに最後に生まれ落ちた三柱の神々のことである。イザナギ自身が自らの生んだ諸神の中で最も貴いとしたところからこの名が生まれた。さんきし・さんきしん  
三貴神とも呼ばます」

播磨

「へえ、こいつなのね、作者、アレ？ 作者・・・逃げたわね」

大和

「作者なら、わざと向こいつに行きましたよ」

播磨

「ありがと」

大和

「「」意見」感想お待ちしておつまむ」

## 第一一十五話 見えない未来

7月1-2日

帝国海軍 柱島泊地

第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨

現在、第一連合艦隊は内地に帰還し、乗組員休養と破損個所の修理を行っていた

翔平

「でつ、親父なんだ」の図面は

武 「レキシントンの改造図面」

翔平

「もうほとんど、面影が残ってないんですけど」

翔平が見た図面は、ほとんど空母といつ面影を残していなかつた

武

「おひ、レキシントンの艦体を利用した、航空戦艦だ」

翔平

「・・・条約で巡洋戦艦から航空母艦になつた艦を、せりて改造成して航空戦艦に?」

武

「そうだ、改造も進んでいる」

翔平

「俺に黙つて」

武

「本はと言えば、航空隊のミサイル攻撃で機関室が全滅したから、取り替えて、その時に両艦とも、飛行甲板と艦橋を取つ払つてしまつて、それでこの改造案が出たんだ」

翔平

「そ／＼なのか／＼」

武

「やめいー・多分そのネタは一部の人しかわからん」

翔平

「スマン、それでこの図面か・・・しかも、主砲が51cm砲か・・・

」

武

「俺のがこの世に送り出した艦で、最高ッと言つても過言ではない航空戦艦だ！！」

翔平

「ほう、搭載機数は？」

武

「艦尾、艦首を延長して、さらに、バルジも増設したから・・・だ  
いたい90機つてどこか」

翔平

「ふつ、」

武

「使えそうだろ?」

翔平

「ああ、充分すぎる程な」

武

「もうだらう?」

常陸

「長官!...」

常陸が長官室に転移してきた

翔平

「なんだ、常陸」

その時、長官七の扉が勢いよく開き、啓太と葵が入ってきた

啓太・葵

『長官!...』

翔平

「どうした?...」

常陸・啓太・葵

『ソ連が連合国に降伏しました！！』

翔平・武

『な、なんだつて！！』

翔平

「詳しい話を」

啓太

「はい、これは、ナチスドイツとアメリカのラジオ放送を傍受したのですが、7月11日にドイツ空軍がオムスクを攻撃した際に機銃掃射で死亡したそうです」

翔平

「ちょっと待て、今ソ連の最前線はどこだ？」

葵

「最前線はスベルドロフスクというところですが、今はその前線に居たロシア軍将兵が、降伏し、崩壊が始まっています」

啓太

「つい先ほど、軍令部はこれから対策を改めると言つ事で、明日会議を開くそうです」

翔平

「そりか、山本長官も来るのか」

常陸

「無線連絡では、つい先ほど、トラックから、サイパン経由で東京に向かつたそうです」

翔平

「よし、すぐに、帝都に向かつぞ、啓太、資料の準備を」

啓太

「了解」

翔平

「親父も来るか?」

武

「おう、頼む、今後の造船スケジュールを艦政本部の戻つて大幅に見直さなければならぬ」

翔平

「頼むぜ、海軍技術中将殿」

武

「おう」

その夜、翔平たちは、電空で帝都東京、軍令部に向かつた。

7月13日

帝都 海軍軍令部（通称：赤レンガ）

武

「帝都にも高層ビルが増えてきたな」

翔平

「そうだな、・・・どこかの誰かさんが、技術支援と都市の再開発を強く推したからだろ?」

武

「そうだっけ」

実際に今の大日本帝国は百尺規制を容積地区制度に改正し、多くの高層ビルが建築段階に入り、道路も震災、空襲に備えて、整備を行っていた

翔平

「そうだ、あつ、山本長官」

山本五十六

「やあ、林君、もう来てたのか」

翔平

「はい、昨夜到着しました」

山本五十六

「そうか、じつは、ついでっただ」

翔平

「どうでしたか、連山の乗り心地は」

山本五十六

「うん、爆撃機としては、速かつたよ」

武

「やつですか」

翔平

「では、行きましょうか」

山本五十六

「そうだな」

そうして会議が始まった

翔平

「今の帝国の最前線は西はインドラングーン、東はミッドウェーです、少なくとも半年後には、英印軍を駆逐し、インドを開放しなければいけません、さらに今は、インドの開放が終了次第、ハワイ諸島を攻略し、ハワイから爆撃機を飛ばして、ロスマラモス研究所を破壊します、その後は、ここを攻略して、ここに向かいます」

山本五十六

「さらに、ソ連が崩壊したため、本土防空と日本海側の防衛も重要なになります」

東條英機

「うへん、陸軍は戦力的にかなり余裕があるが・・・問題は補給だ」

山本五十六

「その点は、海軍が責任をもって輸送船団を保護し、物資を通じけます」

その後陸軍との協議や、いろいろ話しえたが、そのまま翻訳をせり  
いただきます。

翔平

「つさ、親父と一緒に歩いてるんだ」

武

「本田宗一郎とか豊田喜一郎さんと会って行く

翔平

「本田・・・豊田・・・ホンダ・・・トヨタ・・・あの自動車  
メーカーの」

武

「創設者に」

翔平

「なぜー。」

武

「これからの中動車業界の事を話しこよ

翔平

「・・・帰りは、自分で帰つてこよ

武

「ああ、新幹線で・・・つて、この時代には新幹線はまだないんだ  
〜！」

翔平

「なに、聞えてるんだよ」

武

「畜生、絶対に」一九五〇年には新幹線を作つてやる

翔平

「何を考えてるんだよ」

武

「俺の野望だ」

何かの野望に燃える武

翔平

「とにかく、汽車か、輸送機で今まで歸つてへるんだな」

武

「分かつた」

翔平

「先に戻つてこらがりな」

武

「おひ

翔平はそう言つて武と別れた

弘明

「おひ

翔平

「おお、弘明久しぶりだな」

弘明

「はい、お久しぶりです」

読者の皆様は覚えているだろ？

翔平が護衛艦こうじゆうの艦長をしている頃から、砲雷艇をやつしてい  
た堀井弘明今の階級は中将

翔平

「どうだ軍令部は」

弘明

「机仕事ばかりで、海が恋しいです」

翔平

「そうか、でも、堀井参謀、貴方には作戦立案と交渉力をもつてい  
るこれからも頼んだよ」

弘明

「分かりました、どんな頑固者でも必ず説得して見せますから」

翔平

「頼んだぞ、お前ならできる」

弘明

「プレッシャーを掛けないでください」

翔平

「で、俺に何か用でもあるのか」

弘明

「そうですよ、え~と立ち話もなんですから」

翔平

「そうだな」

とある一室

翔平

「さて、どんな話かな」

翔平は弘明の案内で軍令部のとある一室にいる

弘明

「長官はは」存知ですよね、先遣偵察隊の事を

翔平

「もちろん」

先遣偵察隊とは、敵本土のジャーナリストに成りすまし、敵の情報

を取集するための、特殊部隊だ、だが戦闘はしない、

弘明

「その偵察隊から連絡が入ったのですが・・・」

翔平

「よく電波が届いたな」

弘明

「はい、波号情報潜水艦を始め、何か所も経由されていますから」

翔平

「うんて、どんな話だ」

弘明

「はい、現在、米国では、戦艦、空母の建造が急ピッチで進んでいるようで、早ければ、来年の末頃には全艦が戦力化になることがあります」

翔平

「なんだ、予想していたじゃないか」

弘明

「それが予想よりも遙かに多いんですよ」

翔平

「具体的には」

弘明

「これが偵察隊からの報告書です」

翔平は報告書に目を通した

報告書には「」と書かれてあつた

米国の工業は今非常に活発化せり、航空機企業、自動車企業の各工場が24時間のフル操業で、戦車、戦闘機を始め、兵器が増産中、さらに、各造船所、工廠では、戦艦、空母、他大小補助艦艇が、建造中、戦艦の数は少なくとも20隻以上、ノースカロライナ級2隻、サウスダコタ級4隻、アイオワ級6隻、モンタナ級6隻さらに新型戦艦X級を8隻、起工す、空母もエセックス級を中心に、ボーク級、カサブランカ級、合わせて30隻以上・・・

翔平

「・・・米国の国庫は大丈夫か！！」

弘明

「大丈夫ではないと思います」

翔平

「ですよね、21世紀でこんなことやつたら、政権が5回ぐらい吹っ飛ぶぞ」

弘明

「なにか笑えません」

翔平

「そうだよな～」

弘明

「で次に、大和田が歐州の音号無線を解読していますが、歐州でも海軍の再建が行われているみたいですが、くわしい内容はまだ入ってきませんが」

翔平

「 そ、う、か、 新、し、い、情、報、が、入、つ、た、ら、 連、絡、し、て、く、れ、」

弘明

「 了、解、」

その後、翔平は弘明と別れて、電空で奥に戻った

## 第一十五話 見えない未来（後書き）

「意見」「感想お待ちしております。

## 第一一十六話 インド洋波高し

11月11日

帝国海軍 柱島泊地

第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨

会議室

会議室には翔平を始めとする、首脳陣が集まっていた

翔平

「さて今日集まつてくれたわけだが、2週間後、第一機動艦隊がインド攻略作戦のため出撃する、それに伴い我が艦隊からも艦艇を数隻派遣する

啓太

「派遣する艦艇は？」

翔平

「まず、太平洋の防衛のために主力の戦艦を出すわけにはいかない、そこで、第一戦隊から、巡洋戦艦4隻と第一駆逐戦隊の駆逐艦8隻、それと第一航空戦隊から空母一隻と輸送艦3隻と第一支援艦隊を出す」

葵

「それで艦隊の指揮は？」

翔平

「俺がする」

全員

『はいー!?』

翔平

「だつて暇ジヤン」

葵

「・・・そんな理由で艦隊を留守にしないでくださいーー!」

翔平

「・・・そこでだ、俺が留守にしている間、清水中将と栗須中將に本隊を任せる」

翔平は葵の反論を無視した!?

啓太・葵

『はいイー!?』

翔平

「異論は認めないで、もう決めたことだ」

啓太・葵

『(身勝手すぎるーー)』

ここで啓太と葵の思考がシンクロした

翔平

「それと、分艦隊がインド洋に出撃すると同時に第一連合艦隊本隊はマーシャル諸島に移動、そこにて索敵、情報収集を行う、以上、何か質問は？」

葵

「何故艦隊を分けるんですか」

翔平

「うん、インド洋に主力艦隊を集中していたら、もしもの時の本土にもしものことがあつたらと思ってな、山本長官と会議をしていたら艦隊を分けることで一致したんだ」

啓太

「その訳なら納得する」

翔平

「だろ、しばらくの間、一人に任せるけど頼んだぞ」

啓太・葵

『はい』

こうして会議が終わつた

11月25日

帝国海軍 柱島泊地

第一連合艦隊

巡洋戦艦 十六夜 甲板

雄哉

「よつじんべ、十六夜へ、お待ちしておつまました長官」

翔平

「山崎艦はじひへ話にならぬ」

雄哉

「いえ、いたるにア」

翔平

「では・・・全艦出撃準備」

雄哉

「よ～そろ～」

翔平

「播磨、俺がいない間皆を頼んだ、ケンカ等がないよつこ」

播磨

「分かってるわ」

翔平

「太平洋は今後しばらくは平穏だと想つが・・・もしものことがあつたら、皆をまとめてくれ、栗須中将、清水中将、播磨」

啓太・葵・播磨

『はい』

翔平

「では、しばらく頼んだぞ」

翔平

「では、しばらく頼んだぞ」

啓太

「任せてください」

こうして翔平は、第一連合艦隊本隊と別れて、巡洋戦艦十六夜に将旗を移した

イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

翔平

「全艦出撃準備は」

雄哉

「全艦準備完了」

翔平

「全艦出撃」

十六夜を旗艦とする第一連合艦隊印攻略艦隊は第一支援艦隊と共に、第一連合艦隊本隊に見送られて、柱島泊地を離れた

その後、沖縄沖で、第一機動艦隊と合流した。

作戦の参加戦力は・・・

第一連合艦隊 印攻略艦隊

司令長官：林翔平大將 旗艦：イージス巡洋戦艦十六夜

巡洋戦艦

天羽 天月 十六夜 十五夜

空母

鳳翔

駆逐艦

秋月型8隻

補給艦

札幌型3隻

### 第一機動艦隊

司令長官：小沢治三郎中将 旗艦：赤城

戦艦

金剛 比叡 榛名 霧島

空母

赤城 加賀 蒼龍 飛龍 翔鶴 瑞鶴

重巡洋艦

利根 筑摩 足柄 羽黒

防空軽巡洋艦

阿賀野型12隻

駆逐艦

松型32隻

補給艦

一等補給艦5隻

### 第一支援艦隊

司令長官：山田能貴

旗艦：大型自走浮きドック

巡洋戦艦

三宅 八丈

軽空母

神鷹 海鷹

防空軽巡洋艦

阿賀野型 10隻

駆逐艦

秋月型 15隻 松型 20隻

自走浮きドック

呉 佐世保 横須賀 舞鶴 大湊 苫小牧

強襲揚陸艦

墨田 江東 品川 目黒 世田谷 仲野

輸送艦

札幌型 15隻

総参加艦艇

155隻

総参加航空機 800機以上

11月29日 (現地時間：18:45)

マラッカ海峡

インド攻略艦隊は、マラッカ海峡を通過し海峡の出口に差し掛かっていた

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

翔平

「ここからが本番だ、山崎艦長、対潜、対空警戒を厳に！」

雄哉

「よ～そろ～」

その時艦内電話が鳴り響く

雄哉

「こちから艦橋」

水兵1

「CICO、艦橋、ソナーに感！敵潜です！」

雄哉

「長官、早速です」

翔平

「そのようだな、全艦対潜戦闘！！」

雄哉

「艦首VLS解放、五式対潜ミサイル発射用意弾数1」

水兵2

「了解、艦首VLS、五式対潜ミサイル、弾数1、データ入力完了、  
発射準備完了！」

雄哉

「発射！！」

グワツ ズツシャアアア

十六夜の艦首▽――から、五式対潜ミサイルが発射された

第一機動艦隊

旗艦 航空母艦 赤城 防空指揮所

赤城

「もうすぐ、マラッカ海峡を出てインド洋に入るわよ、加賀、皆に注意するよつに伝えて」

加賀

「分かった」

小沢治三郎

「おいおい、今からそんなに強張つてたら持たないぞ

赤城

「小沢、暢気なことを・・

ズツシャアアア

加賀

「被弾したかツ！！」

赤城

「・・・違うわ、墜進弾よ」

小沢治三郎

「早速か、敵潜でも見つけたんだりつ」

赤城

「はあゝ、その敵潜は氣の毒ね」

小沢治三郎

「ああ、必ず命中すると言つてたな」

加賀

「・・・」

独逸海軍 潜水艦

U - 237

独ソナーメン

「推進器音、多数、4時方向、距離約2万5千、速度25ノット」

「潜望鏡深度へ、無線アンテナ露頂」

U - 237 艦長

独水兵1

「ヤヴォール！！」

U - 237

「見つけたよ、日本艦隊・・・」

U - 237 は艦隊の艦種を確認するため潜望鏡深度に浮上した

「これは・・・」

U - 237 の艦長が曰にしたのは、

大日本帝国が誇る一大機動艦隊であつた

U - 237 艦長

「・・・友軍基地へ緊急電、速度25ノットでマラッカ海峡を通過中の日本機動艦隊を発見、編成は空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数、だ、急げ!!」

独水兵2

「ヤヴォール!!」

独ソナー員

「突発音!魚雷です!!接近中!!」

U - 237 艦長

「なんだと、急速潜航!面舵一杯!!機関一杯だ!!」

独ソナー員

「駄目です、間に合いません、距離100 80 60 40...」

U - 237

「駄目、避けられない・・・後は頼んだよ・・姉妹達・・・」

カツ

グワツ

ズツドオオオオオオン

U - 237に五式対潜ミサイルが命中した途端、

U - 237の外殻を砕き

U - 237はその艦体を暗い海に沈めた

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵2

「敵潜の圧潰音を確認、撃沈です」

翔平

「この先には、レポート等がつよい届くだろ？」

雄哉

「哨戒機を発艦させますか」

翔平

「そうしよう、各艦に通達、SH - 60K、全機発艦、哨戒に当た  
れ」

水兵3

「了解」

哨戒に対潜弾を腹いっぱい抱えた、SH - 60Kが30機、飛び立  
つた

アツズ環礁 イギリス海軍基地

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 艦橋

英士官1

「提督！ドイツ潜水艦U-237から、敵艦隊発見との報告です！」

ジェームズ・サマヴィル提督

「なんだと！規模は？」

英士官1

「はい、報告によりますと、空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数、大機動艦隊です」

ジェームズ・サマヴィル提督

「大艦隊だな・・・我々だけで防ぎ切れるか」

サマヴィル提督は艦橋の窓から外を見た

彼の眼下には

多数の戦艦、空母、巡洋艦、駆逐艦が停泊していた

英参謀1

「提督、敵の機動艦隊の後方には、必ず輸送艦隊がいるはずです、この艦隊に攻撃をし、敵艦隊の輸送路を破壊するのはどうでしょう

か

ジョームズ・サマ、ヴィル提督

「うーん」

サマ、ヴィル提督は唸りこんだ

そんな海賊まがいなことを行いたくなかったからだ

英参謀2

「提督、もう一つ方法があります、敵の艦隊は艦隊速力25ノットと高速です、この高速巡航を可能とする、日本海軍の戦艦は、コングウクラスのみです」

ジエームズ・サマ、ヴィル提督

「ちょっと待ちたまえ、日本海軍はハリマクラスと新鋭のヤマトクラスが就役しているぞ」

英参謀2

「はい、ですが、情報部からの報告では、ハリマクラス、ヤマトクラスの両艦は、27ノットが限界だそうです」

もちろんこの事はブラフであり、連合軍が真実を知るのはもう少し後の事だ

ジエームズ・サマ、ヴィル提督

「それで?」

英参謀2

「我々東洋艦隊の主力戦艦はこのネルソンクラスが2隻、後はRク

ラスが5隻です、敵がコンゴウクラスなら、主砲は14インチ、ネルソンは16インチ、Rクラスは15インチ、後は、敵の巡洋戦艦ですが、これは今日日本海軍が保有している、テンワクラス、テンワクラスの主砲口径は12インチ、火力では日本艦隊を凌駕します、ですから、敵艦隊に夜戦を挑み、レーダー管制射撃で敵艦隊を撃破するはどうでしょうか

金剛型はすでに41センチつまり16インチに主砲が改められており、連合国側はこのことを知らない

ジエームズ・サマヴィル提督  
「・・・よしそれで、行こう」

英参謀1

「それでしたら、提督、出撃準備を」

ジエームズ・サマヴィル提督

「うむ、全艦出撃準備・・・日本艦隊の攻撃予測は?」

英参謀1

「セイロン島の泊地攻撃の可能性が一番高いかと」

ジエームズ・サマヴィル提督

「・・・分かった」

英海軍東洋艦隊は、明日の出撃に備え準備に入った

戦艦ネルソンの予備士官室では、英海軍の艦魂達が集まっていた

ネルソン

「ロドニー、状況を教えてください」

ロドニー

「はい、姉さま、本日、1845頃、ドイツ潜水艦U-237が日本艦隊と接敵しました」

ネルソン

「艦隊の規模は?」

リヴェンジ

「はい、空母7、戦艦4、巡洋戦艦4、他大小巡洋艦、駆逐艦多数を引き連れた大機動艦隊だ」

ロドニー

「艦隊司令のサマヴィル提督は日本艦隊を砲撃戦で戦うと言つていたけれど、敵は空母を中心とした艦隊、大丈夫かしら」

リヴェンジ

「大丈夫だ、作戦行動中の戦艦が航空攻撃で沈められたことは、今まで一度もない、それに砲撃戦だったら我が方が有利だ」

この時点では、帝国海軍は航空攻撃でまだ戦艦を沈めていない

ネルソン

「火力では有利ですか・・・」

ロドニー

「どうかしたの、姉さま」

ネルソン

「……いえ、何でもありません」

ネルソンは言い知れぬ不安感を抱いた

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「長官、播磨から電文が来ていてます」

翔平

「ほつ、見せてくれ」

雄哉

「はい」

翔平

「ありがとうございます」

翔平は紙に目を通すと、微笑した

翔平

「皆も」「ひの様子が気になるようだな

雄哉

「何と返信しますか」

翔平

雄哉  
「了解」

「やうだな・・・インド洋波高し、これでいい、平文でいいぞ」

## 第一十六話 インド洋波高し（後書き）

「意見」「感想をお待ちしております。」

## 第一一十七話 インド攻略作戦 前編（前書き）

お久しぶりです。一ヶ月の放置申し訳ございません。

## 第二十七話 インド攻略作戦 前編

12月1日（未明）

インド洋

第一連合艦隊

空母 鳳翔

現在空母鳳翔では、音神、15機が発艦準備を行っていた

水兵1

「音神一番機、準備完了」

機銃弾とミサイルと大型増層を装備した音神が次々に甲板にあげられる

士官1

「全機発艦準備完了」

孝彦

「旗艦十六夜と赤城に報告」

水兵2

「了解」

鳳翔から、発艦準備完了との信号が、赤城、十六夜に打たれる

しばらくして

水兵2

「旗艦十六夜より、発艦命令來ました」

孝彦

「音神1番機発艦用意イ！」

士官1

「態勢完了の機より直ちに発艦せよ」

水兵1

「宜候！一番、二番、射出位置へ」

水兵3

「チヨイ前～、チヨイ前～、良し！～！」

水兵4

「一番機、射出準備良し！最終確認！～！」

水兵5

「一番、三口オシ！～！」

水兵1

「一番機、射出！」

パチ シヤアアアアアア ゴウ

電磁力タパルトにより、音神が軽々と空に飛び立つ

水兵2

「次、二番機、発艦せよ」

こつして音神、15機は蒼空へと舞い上がった

第一機動艦隊

空母 翔鶴

空母翔鶴も同じく、銀河改の発艦準備をしていた

銀河改には、大型増層が取り付けられていた

ちなみに、銀河改は爆弾搭載量2t、高度5000m時速600キロでの航続距離は5200キロさらに大型の増層を2本装着すると、航続距離は7000キロまで伸びる

水兵6

「旗艦赤城より信号、『攻撃隊発艦せよ』以上です」

有馬艦長

「銀河改、発艦せよ」

銀河改が射出機により強制的に加速し、飛び立つ

銀河改は音神と一旦合流し、そして三方向に分かれる、一隊はデリ一を、もう一隊はマドラス、そしてもう一隊が日指すのは・・・

ボンベイ(8・30)

インドの中心都市、ボンベイ、

此処には英軍の基地も多数存在すると、同時に人口が200万を超える

ボンベイの市民の間では、インド洋で日本軍が現れることにより、期待と不安で興奮していた

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「前方一千、見えたぞ、英國王ジョージ?世の来訪を記念して建てられた、大英帝国支配の象徴、インド門だ、全機攻撃準備」

『了解』

無線から、銀河改全機の搭乗員が答える

野中

「つあ、」

野中大尉が操縦する銀河改を音神が追い越した

「流石、墳進機だ、あつという間に追い越されちました」

そういうながら、5機の銀河改は翼を大きく振りながら、都市中心部に向かつた

ボンベイ 市街地

ボンベイ市民1

「翼にレッド・サン！」

ボンベイ市民2

「間違いない・・・日本軍だ」

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「そろそろだらう、全機、ばら撒け！！」

『了解』

その直後、銀河改5機は爆弾層を開き

ビラをばらまき始めた

そのビラには、じつ書いてあつた

親愛なるインド国民よ、今まさに立ち上がる時が来た、諸君たちの手で、白人を追い出し、自分たちの手で、独立し、国を作る時が、我が大日本帝国始め、亞細亞各国はインドの独立を強く望み、その独立を全面的に支援する用意がある、そして、英軍をインドから追いだした暁には、大日本帝国は天皇陛下の名のもとに、完全なる独

立を約束する。

と書かれていた

この文章は、デリー、マドラスでも撒かれ、その後にはラジオでも流された

野中

「全機、終わつたか」

『はい』

野中

「よし、帰還する

銀河改と音神は翼を翻し、母艦へと颯爽と飛んで行つた

英東洋艦隊 (11:45)

旗艦 戦艦 ネルソン

英東洋艦隊は、日本艦隊攻撃のため、全速で日本艦隊の後を追つていた

此処で英東洋艦隊の編成を説明しよう。

英東洋艦隊

司令官・ジョームズ・サマヴィル中将 旗艦・ネルソン

戦艦

ネルソン ロドニー リヴェンジ レゾリューション ラミコーズ

ロイヤル・サブリン ロイヤル・オーク

重巡洋艦

ロンドン デヴォンシャー

軽巡洋艦

ダイドー フィービー ボナヴェンチャーナイアード

空母

アーク・ロイヤル、グローリアス、イーグル  
駆逐艦

オンズロー オファ オンスロー オリビ オブデュート  
ビティエント オパチューン オーウェル

航空機

合計136機

ジエームズ・サマヴィル提督

「なに、サボタージュだと！？」

英参謀1

「はい、ボンベイ、マドラス、デリーで、大規模なサボタージュが  
行われています」

ジエームズ・サマヴィル提督

「日本軍に先手を取られたか・・・」

英参謀2

「このまま撤退するのも視野に入れるべきかと」

ジエームズ・サマヴィル提督

「そんなことをしたら、今度こそ、ロイヤルネイビーの権威が地に  
落ちるぞ」

英参謀 1

「でしたら」

ジマー・ムズ・サマヴィル提督

「このまま、全力で日本艦隊を追い、撃破する、我々に残された道はもはやこれだけだ、艦長、機関一杯、壊れても構わん、出せるだけ出せ」

艦長

「アイ・サー、機関室、機関一杯だ！！」

ネルソンの艦長が伝声管に叫ぶと

機関長

「無茶です、これ以上圧力を上げたら、爆発しますー。」

艦長

「いいからやるんだ、機関長」

機関長

「・・・機関一杯！」

艦長

「ありがとう、機関長」

機関長

「帰港したら、真っ先にドック入りですよ」

艦長

「分かつた」

英水兵1

「レーダに感！偵察機の模様」

ジエームズ・サマヴィル提督  
「直援機に連絡」

英士官1

「アイ・アイ・サー」

幻夜 機内

英東洋艦隊に接近したのは、索敵に出でいた、鳳翔から飛び立つた、  
幻夜2号機であった

幻夜2号機は、レーダーに多数の艦影を確認したため、識別のため、  
目視できる高度まで降下していた

機長

「見つけた！英東洋艦隊！！」

副操縦士

「機長やつましたね」

機長

「ああ、旗艦十六夜に位置連絡急げ」

電探員

「了解・・・機長！下方から敵機！」

機長

「おっと、出迎えだ」

副操縦士

「はつ、厚い歓迎ですね！」

機長

「よし、逃げるぞ、三十六計逃げるが勝ちだ」

幻夜2号機は雲の中に入り、迎撃機を撒いた

第一機動艦隊（11：50）

旗艦 空母 赤城 艦橋

水兵7

「十六夜より発行信号【敵英東洋艦隊発見！】」

小沢治三郎

「全空母に次ぐ第一次攻撃隊発艦準備！翔鶴、瑞鶴は銀河改の発艦準備」

士官1

「了解、翔鶴、瑞鶴に連絡」

空母 翔鶴（12：20）

飛行甲板

野中

「お~い、急いでくれ」

野中大尉が搭乗する銀河改は燃料と魚雷の搭載作業をしていた

水兵6

「あと3分で終了します」

野中

「おお、でつかい獲物が待つていい」

第一次攻撃隊、総数220機が発艦を開始した

英東洋艦隊（13：15）  
旗艦 戦艦 ネルソン

英東洋艦隊旗艦ネルソンには、張り詰めた空気が漂っていた、

敵の偵察機に発見されて、何時敵が来てもおかしくない状況に立たされたからだ

その時

英水兵1

「レーダー室より報告！敵大編隊を探知、数200以上！」

ジェームズ・サマヴィル提督

「つ！ ありたつけのインター セプターを上げろ！ 格納庫の隅でほこりかぶつて いる機体もだ、パイロットがいなければ、コックでも乗せろ、厳しいのが来るぞ！」

英参謀1

「了解！」

英空母、3隻・・・アーク・ロイヤル、グローリアス、イーグルから、シーファイアが迎撃のために翔け上がる、その数、わずか、48機、10機の音神に護衛されている、第一攻撃隊を止めるのは、不可能であった・・・いや、音神が護衛していなくても、止めるのは無理だろう、なぜなら、第一機動艦隊の熟練パイロット達が、零戦、陣風を操り、攻撃隊を迎撃機から守っているんだから。

鳳翔制空隊 音神

山口昇中佐機

昇

「さて、全機そろそろ、敵の迎撃機が来るころだ、敵は、おそらく、シーファイア、高性能機だ、注意するんだぞ」

昇がそういうと、インカムから笑い声が聞こえた

哲也

『隊長、幾ら高性能だつても、レシプロ機でしょ？、この音神と自分たちの腕さえあれば敵なしですよ』

昇

「ハハハハッ、そうだな、でも油断するなよ

哲也

『了解!』

昇

「来たようだ、全機、行くぞ!—!」

『おお!—!』

英東洋艦隊（13：25）  
旗艦 戦艦 ネルソン

ジエームズ・サマヴィル提督

「なんだ、あの機体は・・・」

サマヴィル提督は音神の機動性と速度を見て唖然としていた

その間にも、音神が暴れ、英軍のシーファイアをジュラルミンの塊に変えていく

ジエームズ・サマヴィル提督

「日本軍は何時の間に、あんな高性能機を開発したんだ!」

英参謀1

「米海軍からの報告にあった、ソニックでしょうか?」

英参謀2

「あれは、戦場によくある与太話ではなかつたのか・・・」

ジエームズ・サマヴィル提督

「幾ら高性能とはいえ、数は少ない、対空戦闘始め！隙を作るな！」

サマヴィル提督が言い終わると同時に、ネルソンの全火器が火を噴く

それに合わせて、残りの全艦も対空砲火を打ち上げる

ネルソン

「なんですかあれは・・・」

ネルソンが防空指揮所で目にしたものは・・・

20機の蒼山が発射した98式空対艦ミサイルだった・・・

英水兵1

「左舷より高速飛行物体接近！」

艦長

「撃ち落とせッ！」

ネルソンの対空砲が向けられるが、アクティブ／パッシブ複合誘導方式の98式空対艦ミサイルは、対空砲火をものともせず突き進み、ネルソンの艦橋後部に命中し、周辺の高角砲、機銃座を吹き飛ばした

英士官1

「左舷高角砲、機銃座全滅！」

艦長

「ダメージコントロール急げ！」

他の戦艦も同様に、対空砲を吹き飛ばされ、対空砲火に隙ができた

その隙に、攻撃隊が突撃する

英水兵 2

「左舷より雷撃機！数3！」

艦長

「取舵一杯！」

ネルソンは巨大な艦体を左に回頭させるが・・・

英水兵 3

「敵機！魚雷投下！来ますッ！！」

艦長

「くそつ・・・間に合わない」

天山から投下された、魚雷は真っ直ぐ突き進みネルソンに突き刺さった

ズツドオオオオオオン

ズツドオオオオオオン

ネルソンに2本の魚雷が命中した

ネルソン

「ガツハツ！・・・話には聞いてましたが・・・日本の魚雷がここまで高威力とは・・・」

艦長

「被害報告！」

艦長が大声で叫ぶ

英士官1

「左舷に魚雷命中！浸水発生！」

英水兵4

「機関室に若干の浸水確認！現在排水作業中！」

艦長

「機関は無事か！」

機関長

「はい、機関全基正常、まだ行けます」

英水兵1

「後続のロイヤル・オークに攻撃が集中しています」

ジエームズ・サマヴィル提督

「何！？」

翔鶴攻撃隊 銀河改

野中五郎大尉機

野中

「よし、隙ができた、また感謝しないとな……最後尾にいる、戦

艦をいただくぞ！第一部隊全機ついてこい

『はいッ！！』

野中大尉率いる銀河改五機は、英戦艦、ロイヤル・オークに攻撃を開始した

野中

「距離3000・・・・2500・・・・2000・・・・1500・・・・今だ！投下！」

雷撃手

「はい！－！」

ザツバツ

ザツバツ

銀河改は搭載していた九一式航空魚雷改2が突き進む

隊長機が投下したのに続いて、後続の4機が魚雷を投下する

合計5本の魚雷がロイヤル・オーケに向かって突き進む

戦艦ロイヤル・オーケ

英水兵5

「敵機魚雷投下！」

艦長

「回避！取舵一杯！」

英水兵6

「取舵一杯！急げ！」

操舵手が懸命に舵輪を回す

艦長

「（頼む曲がってくれ、ロイヤル・オーケー）」

艦長が祈るが、それも空しく

ズツドオオオオオオン

ズツドオオオオオオン

ズツドオオオオオオン

ズツドオオオオオン

ロイヤル・オーケーに4本命中、

浸水により左舷側に大傾斜する

英水兵5

「左舷に魚雷命中、数4！」

艦長

「右舷、注水タンクに注水！急げ！」

副長

「アイ・アイ・サー」

英水兵 6

「上空より急降下アア！！！」

艦長

「何！！！」

傷ついたロイヤル・オークに、彗星艦上爆撃機が襲い掛かった

艦長

「回避！転舵急げ！」

彗星は、対空砲火をものともせず、500キロ爆弾を投下する

その爆弾のうち一発がロイヤル・オーカの第一主砲塔側面を貫通し爆発した

ズンドオオオオン

英水兵 6

「第一主砲塔付近に命中弾！」

英士官 2

「第二主砲塔、弾薬庫付近にて火災発生！」

副長

「消火急げ！」

水兵たちは懸命に消火活動するが

英水兵7

「発電機室、機関室に浸水！発電できません！」

艦長

「なんだと！ポンプも動かないのか？」

英水兵7

「はい」

英水兵8

「浸水さらに増大！現在傾斜角18度！」

艦長

「うぐぐ、副長・・・総員退艦」

副長

「はい？」

艦長

「総員退艦だ！急げ、伝令走れ！」

副長

「アイ・サー」

英東洋艦隊（14：40）

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵1

「ロイヤル・オークが総員退艦命令を出しました」

英士官1

「日本機帰還します」

ジエームズ・サマヴィル提督

「被害を報告せよ」

英参謀1

「はい、戦艦ロイヤル・オーク大破、航行不能、空母イーグル沈没、駆逐艦オンズロー、オファ、オンスロート、沈没、他戦闘艦艇は被弾していますが、戦闘航行には支障ありません」

ジエームズ・サマヴィル提督

「救助を急げ」

英士官1

「了解」

ジエームズ・サマヴィル提督

「うむ、日本艦隊の位地は?」

英参謀2

「リボートの連絡によりますと、現在はこのあたりかと」

ジエームズ・サマヴィル提督

「近いな、飛ばせば、接敵まで2時間の距離か」

英参謀1

「そうします、提督」

ジェームズ・サマヴィル提督

「・・・よし、戦闘に差し支えない艦艇は全艦全速で日本艦隊を追撃する、他の艦艇と空母は、アツズ環礁に帰還せよ」

英参謀1

「了解、各艦に伝えます」

ジェームズ・サマヴィル提督

「ロイヤル・オークの曳航は出来そつか?」

英参謀2

「あの状態では」

英参謀が艦橋の窓から後方を見る

そこには、大破し左舷へ傾いているロイヤル・オークが見えた

ジェームズ・サマヴィル提督

「つむ、努力してくれ、駆逐艦オパチューングとオーウェルに命令、戦艦ロイヤル・オークをアツズまで曳航せよ」

英士官1

「了解」

ジェームズ・サマヴィル提督

「残りの艦艇は本艦に続け！目標日本艦隊」

英東洋艦隊は救助艦艇と損傷艦を残して、日本艦隊に全速で向かった

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「長官、どうやら東洋艦隊は、我々に砲撃戦を挑むようですね」

翔平

「ほひ、じつする十六夜

十六夜

「何故私に聞くんですか

翔平

「いや、旗艦だから

十六夜

「意味が分かりません」

翔平

「はつはつはつ、そうか、よししなら、空母鳳翔は駆逐艦6隻を連れて後方の第一支援艦隊と合流、小沢さんにも連絡」

雄哉  
「了解」

第一機動艦隊

旗艦 空母 赤城 艦橋

小沢治三郎

「第二連合艦隊は砲戦をする氣か・・・よし、金剛、比叡、榛名、  
霧島及び足柄 羽黒、阿賀野、矢矧、駆逐艦12隻は第一連合艦隊  
に続け、残りは空母を中心に輪形陣を組み南方に退避」

草鹿

「了解！」

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「第一機動艦隊、本隊離れます」

水兵7

「第一機動艦隊、旗艦赤城より発行信号【貴艦隊の奮闘を期待する】  
以上です」

翔平

「よし、全艦回頭、単縦陣を組め、迎え撃つぞ！」

雄哉

「了解！」

太平洋戦争、四度目となる砲戦が始まろうとしていた・・・

## 第一一十七話 インド攻略作戦 前編（後書き）

「意見」「感想」お待ちしています。

## 第二十八話 インド攻略作戦 中編

12月1日（16：50）

インド洋

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「哨戒中の幻夜より入電、【現在敵艦隊との距離約250キロ、敵艦隊の旗艦はネルソン級と思われる】以上です」

翔平

「よし、敵はビックフカ、十六夜、お前はどうもビックフカと縁があるみたいだな」

十六夜

「ふふつ、嫌な縁ですね」

翔平

「そつか？山崎艦長、增速30ノットだ、全艦にも通達」

雄哉

「了解！速度30！」

水兵2

「宜候！」

第一機動艦隊

第三戦隊 旗艦 戰艦金剛 艦橋

水兵 3

「十六夜より信号【速度30ノットへ、增速せよ】以上です」

近藤信竹

「艦長、增速、十六夜に続くんだ」

第三戦隊を率いるのは、近藤信竹中将

小柳艦長

「宜候！速力30！」

水兵 4

「了解」

英東洋艦隊（17：30）

旗艦 戰艦 ネルソン

水平線のかなたには太陽がその姿を隠そうとしていた時間帯であった

英東洋艦隊、旗艦ネルソンのレーダーが艦影らしき姿をとらえたのは・・・

英水兵 1

「レーダー室より報告、敵艦隊らしき艦影を補足、距離6万メートル、速度30ノット、真っ直ぐこちらに向かってきます」

ジエームズ・サマヴィル提督

「来たか、全艦砲戦用意！レーダー射撃で一気に仕留めろ」

艦長

「アイ・アイ・サー」

英士官1

「提督、哨戒中のショートサンダーランドより緊急入電です」

ジエームズ・サマヴィル提督

「どうしたんだ」

英士官1

「はい報告します【我、敵艦隊を発見、敵艦隊は貴艦隊より約60キロの地点を航行中、敵艦隊の編成は、テンワクラス巡洋戦艦4、巡洋艦4、大小駆逐艦多数、さらに識別表にはない新型戦艦を4隻確認、コンゴウクラス戦艦は確認できず、繰り返す、接近中の敵艦隊の主力戦艦はコンゴウクラスに非ず！】以上です」

ジエームズ・サマヴィル提督

「馬鹿な！日本海軍は何時、新型戦艦を建造したんだ、少なくとも、日本の工業力にこんな短時間で戦艦を作れるわけがないだろ」

英士官1

「ですが、サンダーランドの情報ですと」

ジエームズ・サマヴィル提督

「・・・分かった、少なくとも、ネルソンとロドニーの2隻で敵新型戦艦4隻で・・・か、」

英参謀1

「提督、ここまで来たら後は、実行するのみです」

ジョーナス・サマヴィル提督

「そうだな・・・」

英水兵1

「現在敵艦隊との距離約5万！」

第一連合艦隊 印攻略艦隊 (17:40)

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦隊との距離、4万まもなく射程に入ります」

翔平

「距離3万6千で砲撃戦を開始する」

雄哉

「了解」

水兵2

「敵艦隊、右へ回頭を開始、丁字戦法に持ち込む氣です！」

翔平

「面舵一杯！これより同航戦に入る」

雄哉

「了解！面々舵！」

水兵3

「面々舵、宜候！」

イージス巡洋戦艦 十六夜 CIC

水兵4

「現在、敵艦隊との距離、3万8千、全主砲、データ入力開始します」

砲術長

「うむ」

水兵4

「敵艦隊、速力20ノット・・・データ入力完了！」

砲術長

「主砲装填、弾種、零式徹甲弾」

零式徹甲弾とは、九一式徹甲弾をさらに改良したものだ

水兵4

「全主砲塔自動装填・・・装填完了！」

水兵5

「敵艦隊との距離、3万7千・・・」

英東洋艦隊（17：45）

旗艦 戰艦 ネルソン

英水兵1

「敵艦隊との距離、3万7千、先頭艦は巡洋戦艦テンワクラス、その後方に新型戦艦を確認」

ジエームズ・サマヴィル提督

「まず先頭の艦を潰す、主砲、撃ち方始め！目標敵先頭艦、ロドネーも続け」

砲術長

「アイ・サー、ファイヤー！」

ドオオオーン

英水兵2

「・・・弾着、全弾、遠弾！」

砲術長

「落ち着いて狙え」

英水兵1

「敵艦隊発砲！」

艦長

「なんだと、馬鹿な、届くわけがない、敵艦がテンワクラスなら主砲は12インチのは・・・」

ズシュウウーニンッ！！

ズシュウウーーンッ！！

ネルソン周辺に高い水柱が上がった、それは明らかに30センチ砲の威力を超えているというのは確かであった

英士官1

「夾又被れました」

ジエームズ。サマヴィル提督

「馬鹿な、この威力は・・・くつ、情報部の馬鹿共が、敵の偽情報

を掴んで喜んでたのか」

砲術長

「主砲、装填完了」

艦長

「撃て、今度こそ命中させよ」

砲術長

「ファイア！」

ネルソン

「今度こそ・・・当てます

ドオオオーン

第一連合艦隊 印攻略艦隊  
旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦発砲」

雄哉

「面舵20、第三戦速」

水兵1

「おもか~じ、20、よ~そろ~」

秀介

「第三戦速」

ズシュウウ~ーーンッ!!

翔平

「夾叉か、艦長見事な操艦だ」

雄哉

「有難うございます」

十六夜

「落ち着いていますね長官」

翔平

「戦場では冷静さを失つた方が負けだ」

水兵2

「第三戦隊、砲撃を開始しました」

翔平

「そうか、砲戦を続行せよ」

雄哉

「了解」

第一機動艦隊

第三戦隊 旗艦 戰艦金剛 艦橋

水兵3

「着弾・・・今!」

水兵6

「命中弾2! 初弾命中!」

金剛が放つた41センチ徹甲弾は弧を描きながら、英戦艦、レゾリューションに命中した

小柳艦長

「砲術長、よくやった、この調子で行くぞ」

砲術長

「恐縮です・・・第一射、用意!」

士官1

「全砲塔装填完了!」

砲術長

「第一射、撃つ

！」

ドオオオオーン

金剛に続いて、比叡、榛名、霧島も第一射と砲撃を続けた

英東洋艦隊

戦艦 リヴェンジ

リヴェンジ

「つち、やるな、だがこのくらいで、私は沈まん！」

防空指揮所で、出血しながらも、サーベルを構えて、今撃ち合つて  
いる、金剛に向ける

英水兵2

「第三番主砲塔に被弾、旋回不能！」

英士官2

「目標ロスト、レーダー損傷！」

艦長

「光学標準に切り替えろ！」

砲術長

「アイ・サー！」

英水兵3

「てつ、敵艦発砲！」

艦長

「急速転舵！取舵！」

英操舵手

「アイ・サー」

操舵手が懸命に舵輪を回し、リヴェンジは艦首を急速に左に向ける

ズズウウウーン

ズズウウウーン

英水兵3

「艦首付近に至近弾！」

英水兵4

「艦首に若干の浸水確認！」

艦長

「排水作業急げ！」

英士官2

「アイ・サー」

慌ただしく水兵がリヴェンジの艦内を走り回り、懸命に応急修理をしていた時だった、

リヴェンジの艦橋に空気を切り裂くような、大爆発音が響いたのは

リヴェンジ

「なつ！…まさか…」

艦長

「どうした！…」

英水兵3

「嘘だろ…・・・戦艦・・・ラミコーズ・・・轟…・・・沈しました」

比叡と撃ち合つてた、ラミリーズの第一砲塔に比叡の放つた、零式徹甲弾の一発が、ほぼ直角に天蓋を突き破つた、零式徹甲弾は主砲直下弾薬庫にて使命を終えた、その後、第一砲塔弾薬庫の発射を待つていた、数百発の砲弾が誘爆し、あつという間に轟沈した

艦長

「つく、砲術長…ラミリーズの仇だ！撃つて、主砲が焼切れるまで撃つて！」

砲術長

「イエッサー！」

英水兵5

「主砲装填完了！」

砲術長

「ファイアー！」

リヴェンジ

「喰らえッ！…」

リヴェンジがサーベルを振り下ろすのと同時に

ドオオオオーン

リヴェンジのまだ射撃可能な主砲三基が火を噴いた

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 艦橋

ズガツガ ン

英士官 1

「う、右舷後部甲板に被弾！！右舷副砲全滅しましたッ！！」

十六夜が放つた、零式徹甲弾がネルソンの右舷後部にある副砲塔に着弾し、副砲塔を難ぎ払った

副長

「ダメージコントロール急げ！」

ネルソン

「・・・くつ、まだ、です、まだ・・・」

「ダメージコントロール急げ！」

ジェームズ・サマヴィル提督

「砲術長、今度こそ当てる！敵の先を読むんだ！！」

砲術長

「イエツサー！！」

ネルソン

「今度こそ、今度こそ…」

ドオオオオーン

英水兵1

「…命中…！」

水兵が叫んだとたん、艦橋が歡喜に包まれた

ジエームズ・サマヴィル提督

「やつたか？！」

英水兵2

「敵艦增速！…速い！」

ジエームズ・サマヴィル提督

「なんだと！…」

英水兵6

「敵艦、速い！駆逐艦並み、いや、それ以上です…！」

ネルソン

「！？…今、一瞬敵艦の艦首が浮き上がったよつな…？」

第一連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

雄哉

「被害報告！」

水兵1

「ハツ！艦首第一砲塔付近に被弾！ですが被害ひしき被害特にありません、各部機構、オールグリーン！！」

戦艦ネルソンの40.6cm徹甲弾は十六夜の艦首、第一砲塔付近に被弾したが、装甲が砲弾を弾き、被害は軽微であった。なぜなら、十六夜を始めとする、天羽型巡洋戦艦は、自艦の主砲、16式305mm60口径電磁投射砲が放つ徹甲弾の直撃に耐えられるよう、設計し装甲されているからだ。

翔平

「十六夜、大丈夫か？」

十六夜

「平気です」

翔平

「そりが、艦長、そろそろやるぞ！增速！速度45ノット、取舵20、駆逐艦は現針路を維持、敵駆逐艦を各個撃破！」

雄哉

「了解、僚艦に通達！速度45ノット、取舵20！」

翔平

「さて、どう出る、英國海軍・・・」

翔平の表情が変わった・・・

その表情は、まるで、いたずらを仕掛けた子供のよつた表情であつた。  
・  
・

第一二十八話 インド攻略作戦 中編（後書き）

## 第二十九話 インド攻略作戦 後編

12月1日（19：10）

インド洋

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵主砲弾第一射の迎撃に成功！第三射来ますッ！！」

雄哉

「引き続き、速射砲、ファランクスをもつて迎撃せよ」

巡洋戦艦十六夜は、その高い防空能力を最大限に發揮し敵戦艦主砲弾を叩き落としていた

水兵2

「敵戦艦との距離6千400！」

翔平

「敵戦艦後方、主砲の射角外から接近！副砲には、速射砲で対処だ」

雄哉

「了解、速度20ノット、針路戻せ！」

水兵1

「針路、戻します！」

十六夜と十五夜は英戦艦ネルソンを後方から一隻で挟む形で、航行を開始した

英東洋艦隊

戦艦 ロドニー 艦橋

英水兵1

「敵巡洋戦艦、旗艦ネルソンに接近、距離6千！」

艦長

「ネルソンは何をやつてるんだ、攻撃は？どうした」

英水兵1

「主砲の射角外に入られた模様、副砲塔は完全に破壊されて射撃不能ですッ！」

艦長

「チツ、本級の、構造上の欠陥を利用して・・・」

英水兵2

「ツー！本艦後方にも敵巡洋戦艦2隻！高速で接近中、まもなく、主砲の射角外に入りますッ！！」

十六夜と同じ行動を天羽と天月も行っていた

艦長

「砲術長！第一、第三主砲、斉射だ！」

砲術長

「イエッサーッ！！」

ロドニーの主砲が旋回し天羽に照準を合わせる

砲術長

「ファイアーッ！！」

ドオオオオーン

ロドニーが徹甲弾6発を放つた、この時、一隻の距離は、わずか6千メートル、超弩級戦艦なら、超至近距離に相当する距離だ、戦艦ロドニーの、乗組員は全弾必中を確信していたが・・・

その6発の徹甲弾は天羽に真っ直ぐ飛び、その装甲を突き破りつとしていたが

突如、空中で全弾が爆発した・・・

ロドニー

「う、嘘でしょ、砲弾を撃墜した？！」

人間より、身体能力が高い、艦魂のロドニーには、天羽の127m速射砲が正確に、徹甲弾を撃墜したのが見えていた

英水兵1

「そんな・・・自爆した・・・」

艦長

「ぐ、こんな時に・・・主砲第一射、急げ！」

砲術長

「ダメです、敵艦、主砲射角外に・・・主砲射撃不能！」

艦長

「ならば、副砲で対処だ」

英士官1

「無理です、副砲は先の航空攻撃と砲撃で、全て射撃不能ですッ！」

艦長

「くつ・・・なら、前方の敵艦に目標変更！第一、第一主砲射撃準備！斉射だ！！」

砲術長

「イエッサー！」

英水兵3

「・・・!!待ってください！ネルソンが射線に入りますッ！！」

砲術長

「なんだと！！！」

艦長

「つ・・・まさか、奴らそれを狙つて・・・」

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵 4

「ダメです、完全に捕捉されています」

ネルソンの艦橋では、後方四千で追尾してくる、十六夜と十五夜を引き離すのに必死だつた

艦長

「転舵面舵20-」

英水兵 5

「敵艦転舵、此方に針路を合わせてきます」

ジエームズ・サマヴィル提督

「ぐ、駄目か・・・」

英士官 1

「提督、敵艦隊旗艦イザヨイより入電です、【降伏せよ】・・・以上です」

艦橋に冷たい空気が流れた

ジエームズ・サマヴィル提督

「ぐッ・・・（降伏しかもう手がないのか・・・）」

英水兵 6

「提督！マドラスより緊急入電です【発・マドラス守備隊、宛・友軍艦隊、敵上陸部隊、海岸線に多数あり、夜間爆撃及び艦砲射撃にて被害甚大、大至急援護を求む】以上です」

ジエームズ・サマヴィル提督  
「なつ！・・・嵌められたか」

この報告を聞き、英東洋艦隊、ジエームズ・サマヴィル提督は史実を悟つた

ジエームズ・サマヴィル提督

「（くつ、三ヶ月前に、日本陸軍がカルカッタを占領している、ここでマドラスが墜ちれば、東イングが完全に、日本軍の手に落ちる、それを分かつていながら、くッ、恐らく、後方の艦隊は、我々を釣り出す囮だったのであるつ・・・）・・・ふつ、我々はとんでもない相手を敵に回してしまったのかもしれんな」

英参謀1

「提督、」

ジエームズ・サマヴィル提督

「ああ、全艦に通達、戦闘旗を下ろせ、艦長、機関停止だ」

艦長

「・・・アイ・サー、機関停止」

ネルソンの推進軸は回転を止め、惰性で進み始めた

第二連合艦隊 印攻略艦隊

旗艦 イージス巡洋戦艦 十六夜 艦橋

水兵1

「敵艦隊、速力低下」

水兵2

「敵艦隊より通信【我降伏の準備あり】以上です」

翔平

「よし、内火艇用意！艦長、武装解除だ、」

雄哉

「了解！舵中央、機関停止！内火艇用意！」

水兵3

「よ～そろ～！」

水兵4

「長官、第一機動艦隊、旗艦赤城より通信です」

翔平

「お、分かった、繋いでくれ」

水兵4

「了解」

翔平

「小沢さん、タイミングばっちりです有り難う御座います」

小沢治三郎

「【うむ、それはよかつた、陸の様子はまだ散発的な抵抗があるらしいが、今、三宅と八丈が艦砲射撃で黙らせている、そつちはどうだ】」

翔平

「こちらは、現在英東洋艦隊が降伏し、これから武装解除に向かうところです」

小沢治三郎

「【・・・何隻敵から分捕つたら気が済むんだ】」

翔平

「来たるべき総力戦に備えて、短期間で改造が可能な主力艦船は多い方がいいです」

小沢治三郎

「【そなへか、まあ、餅は餅屋で考えることが違うんだろうがな】」

翔平

「そうですね、技術屋には技術屋の考えがありますから」

小沢治三郎

「【そうだな・・・また連絡する、対潜警戒は厳重にな】」

翔平

「了解しました」

プリン

翔平

「対潜警戒を厳に、シーホーク発艦用意！」

雄哉

「了解、シーホーク対潜装備で発艦せよ！」

水兵5

「了解」

翔平

「さて、降りるか、十六夜・・・うん？艦長、十六夜はどうこに行つたんだ？」

雄哉

「さつき、ふらつとビニカに行きました

翔平

「・・・そつか、艦長行くぞ」

雄哉

「はい、お供します、副長後頼んだぞ」

副長

「了解、お任せください」

英東洋艦隊  
旗艦 戦艦 ネルソン

英水兵1

「日本艦隊、艦隊陣形変更を開始しました」

ジエームズ・サマヴィル提督

「・・・とても整った艦隊運動だ、（我々は東洋の猿と彼らを侮り

過ぎてたな）「

英水兵2

「内火艇が三隻接近中、速い！」

巡洋戦艦十六夜から三隻の内火艇が波を切り、ネルソンに向かつていた

ジェームズ・サマ、ヴィル提督

「（確か、トーマスも日本海軍の大将と話したとか、ずいぶん若かつたそうだが）・・・ラッタルを下ろせ」

艦長

「イエッサー！」

ジェームズ・サマ、ヴィル提督

「よし」

サマ、ヴィル提督は艦橋の提督用の席から立ち、艦橋の出口に向かつた

英参謀1

「え！ 提督じけりに！？」

ジェームズ・サマ、ヴィル提督

「甲板だ、貴官らもついてこい」

英参謀

「え、お待ちください、提督」

ジェームズ・サマ、ヴィル提督は参謀達を引き連れて甲板に向かつた

第一連合艦隊 印攻略艦隊  
十六夜所属 内火艇一号

翔平

「艦尾の被害がひどいな」

雄哉

「蒼山隊の対艦ミサイルであらかた吹っ飛んだのでしょうか」

翔平

「はあ～また、親父が喜びそうな、艦が手に入ったと言つ事か・・・」

雄哉

「もうすでに、吳を旗艦とした第一支援艦隊がこちらに向かっていることですか」

翔平

「はあ～ちょっと頭痛が（また、とんでもない性能の艦が・・・）」

水兵5

「接舷します」

翔平

「あ！・・頼んだ」

水兵5

「了解」

雄哉

「もうすでに、近藤信竹中将指揮下の第三戦隊は武装解除を開始してこることです」

翔平

「流石だ、手際がいいな、よし、武装解除に向かう、準備はいか

水兵5

「接舷完了、多少揺れますか」

水兵6

「全員準備完了」

翔平

「よし行ござ」

翔平は壮快にラッタル駆け上っていった

英東洋艦隊

旗艦 戦艦 ネルソン 甲板

ジョーモズ・サマヴィル提督

「（大将の階級章・・・若いな）やはり、アドミラルハヤシか・・・

「

ジョーモズ・サマヴィル提督はラッタルを壮快に駆け上がってきた、

帝国海軍第一種軍装に身を包んだ、将官を見てつぶやいた。

翔平

「私は、大日本帝国海軍、第二連合艦隊司令長官、林翔平大將です、貴官をジェームズ・サマヴィル提督と見受けますが宜しいですか」

ジェームズ・サマヴィル提督

「確かに、私が英國王立海軍、東洋艦隊司令のジェームズ・サマヴィル中将だ、乗組員たちの保証は、日本海軍の事だから大丈夫とは思うが」

ジェームズ・サマヴィル提督は帝國陸海軍が今まで捕虜を母国に帰していることを知っている、このことは、将官だけでなく、下士官や兵たちにも知られており、日本の印象を変えつつある

翔平

「もちろんです、すでに拿捕した輸送船を何隻かをこひらに急行させています、それでも足りなければ、付近で救助作業中の病院船氷川丸及び松島を出して、最寄りの中立国まで送りましょう」

ジェームズ・サマヴィル提督

「うむ、それを聞いて安心した」

その時海の彼方から輸送船の汽笛が聞こえた

翔平

「おっと、輸送船が来たようですね、では、駆逐艦、巡洋艦以外の乗組員に下艦を命じてください」

ジェームズ・サマヴィル提督

「分かった、貴官の厚意に感謝する」

翔平

「いえ、私は責務を果たしているだけです」

ジョームズ・サマウイル提督

「戦った相手が貴官であったことを神に感謝するよ、ではまたお会いしましょう」

翔平

「はい、提督、できれば平和な時に・・・」

20分後、英戦艦乗組員はやつてきた輸送船に乗船し、最寄りの中立国等に送られた

一方その頃・・・マドラス

此処では、英陸軍と海軍陸戦隊及び帝国陸軍が激しい攻防戦を開始していた

純平

「こまま、防衛線を突き破るぞ！陸軍さんの一式は付いて来てるか？」

陸兵1

「はい、付いて来ます！」

純平

「そつか」

純平は、指揮能力向上型の25式戦車2型から陸戦隊の指揮を行つていた

陸兵1

「隊長！11時の方向に敵戦車ア！数4、チャーチルです！」

野村

「5号車から9号車応戦用意イ！」

陸兵2

「了解」

陸兵3

「射撃準備よし」

野村

「射撃開始！」

ドン ドン ドン ドン

25式戦車から放たれた125mmの砲弾は正確にチャーチル歩兵戦車に命中し、チャーチル歩兵戦車をスクランプに変えた

ガアアアア ン！！

純平が乗車していた、25式戦車に今まで受けたことがない衝撃を受けた

純平

「どうした！」

陸兵1

「全面装甲に敵砲弾命中、装甲が弾き返しました！被害なし！」

陸兵2

「2時の方向に、新たな敵戦車、距離1000、数2！…あれはティーガーⅡ！？」

純平

「ハツ、連合軍最強戦車のお出ましか、よし正面から受けたやうじやないか」

陸兵3

「了解！」

陸兵2

「射撃準備完了！」

純平

「撃て ツ！」

ドン

英陸兵1

「おい見ろ、独逸のタイガーだ！」

英陸兵2

「よし、速いと日本軍を押し戻そうぜ！」

ティーガー？の登場により英軍の士氣は少し上がったが

英陸兵3

「よし、命中だ！」

ティーガーの撃つた砲弾が25式戦車の側面に命中し撃破したと思つた英陸兵だが・・・

英陸兵1

「う、嘘だろ・・・」

英陸兵2

「化け物があいつは・・・」

無傷で走り続けている、25式戦車を見て、恐怖した

ズッドオオン

ティーガーに125mm砲弾が命中した

英陸兵3

「う、嘘だろ、あの無敵戦車が一撃で・・・」

こうして、独逸の援護も空しく、英軍は降伏し、わずか一日でマドラスは陥落した・・・

## 第一十九話 インド攻略作戦 後編（後書き）

天嶽

「遅れました、申し訳ありません」

播磨

「さあ、理由を話してもらいましょうか」

天嶽

「ちょっと風邪をこじらせまして・・・はい、そういう中間テストの真只中で・・・はい」

播磨

「だから、執筆が遅れたと」

天嶽

「はい、しかも、急いで書き上げたため、誤字脱字があるかも・・・」

「

播磨

「はあ～、明日もテストなんですよ」

天嶽

「はい、古典と生物？・・・生物・・・自信がない・・・」

播磨

「早く、勉強しなさい、今日は見逃してあげるから」

天嶽

「うん……じゃあ勉強します……」

播磨

「」意見、感想お待ちしています

## 第三十話 保有戦艦ヲ改造セヨ

1943年2月1日

大日本帝国 帝都 東京

海軍軍令部

インド攻略作戦が無事終了し第一連合艦隊 印攻略艦隊は、日本に帰還し、本隊と合流していた、ちなみにインド洋防衛は、新たに新設された、第八艦隊が受け持つている

ちなみに第八艦隊の編成は・・・

第八艦隊

司令長官・三川軍一中将 旗艦・戦艦豊前

戦艦

豊前 豊後 対馬

大型空母

靈龍 幻龍 慧龍

軽空母

靈鷲

重巡洋艦

八海 雲仙 鉢伏 斜里

防空軽巡洋艦

阿賀野型4隻

駆逐艦

松型12隻

補給艦

根室 知床

航空機

295機

全て35ノットを超える高速艦隊である、母港は占領されたコロンボ港を使用している

作戦が終了し、軍令部に報告に来ていた、翔平は、弘明に話があると言わされて、個室に入った

翔平

「で、何か分かつた」とはあったのか、堀井中将・・・てか、なんで親父もいるんだよ」

弘明

「ああ、済みません、先ほど見かけましたのでお呼びしました」

武

「艦政本部にネルソン級とR級の改造図面を提出してきたところだ、その後軍令部に来たんだ」

翔平

「ほつ、真面な改造だろ?」

武

「多分な」

翔平

「おい」

弘明

「あの～そろそろ話を始めていいですか」

翔平・武

「ああ、スマンにこぞ」

弘明

「（親子だな、息ピッタリ）では、これは、先遣偵察隊からの最新の報告書です」

翔平

「おう、来たか、米海軍の新型戦艦のスペックが分かったのか？」

弘明

「はい、デジタル信号で暗号化されていますので、敵も気づいてはないよ」です、今回は「写真付です」

武

「まつ、ひま」

弘明

「はい、彼らの仕事は一級品ですから」

翔平

「で何が分かつたんだ今回は」

弘明

「で何が分かつたんだ今回は」

「モンタナ級に次ぐ、新型戦艦Xがあと半年で進水するやつです」

翔平

「ほひ、艦名は分かるか?」

弘明

「一番艦は・・・コナイテッド・ステーツだそひです」

武

「敵は合衆国か・・・ピッタリじゃねえか、大和のライバルにはよ

お

翔平

「性能は分かるか?」

弘明

「先遣偵察隊から送られてきた報告書に記入されていました、どうぞ」

### 米海軍新型戦艦ユナイテッド・ステーツ

|    |          |       |          |
|----|----------|-------|----------|
| 全長 | 381m     | 基準排水量 | 120,500t |
| 全幅 | 42.3m    | 満載排水量 | 182,200t |
| 速度 | 27.42ノット |       |          |

|               |              |            |     |     |
|---------------|--------------|------------|-----|-----|
| 主砲            | Mk.8         | 19インチ50口径砲 | 三連装 | 4基  |
| 両用砲           | Mk.12        | 5インチ38口径砲  | 連装  | 12基 |
| 機関砲           | 40mmボフォース機関砲 | 四連装        | 20基 |     |
| 20mmエリコンSS機関砲 | 单装           | 60丁        |     |     |

同型艦

コナイテッド・ステーツ アメリカ コンステレーション コン  
ステイチューション  
ロードアイランド アーカンソー カリフォルニア ワイオミング

翔平

「じゅ・・・19インチ？・・・48センチか」

弘明

「旧式戦艦の弩級戦艦を解体し、そのスクラップも流用されている  
そうです」

武

「しかも、8隻と来たか・・・ちなみに他の艦は？」

弘明

「アイオワ級は史実通りの高速戦艦として、唯モンタナ級は46セ  
ンチ砲を搭載しているそうです」

武

「スペックは分かるか？」

弘明

「はい」

米海軍新型戦艦モンタナ

|    |      |       |          |
|----|------|-------|----------|
| 全長 | 327m | 基準排水量 | 100,500t |
| 全幅 | 38m  | 満載排水量 | 162,000t |

速度 28・02ノット

|     |               |            |     |     |
|-----|---------------|------------|-----|-----|
| 主砲  | Mk.7          | 18インチ50口径砲 | 三連装 | 4基  |
| 両用砲 | Mk.12         | 5インチ38口径砲  | 連装  | 10基 |
| 機関砲 | 40mmボフォース機関砲  | 四連装        | 20基 |     |
|     | 20mmエリコンSS機関砲 | 単装         | 60丁 |     |

#### 同型艦

モンタナ オハイオ メイン ニューハンプシャー ルイジアナ  
バーント

弘明

「米国はパナマ運河が破壊されたことにより、再建する際大規模な拡張工事が行われたようとして、最大で全長450m全幅85mの艦船は通行可能だそうです」

武

「そうか、それにしても、物量か、つれえな・・・コナイテッド・ステーツとモンタナに対抗できるのは、大和型4隻、播磨型6隻、長門型2隻・・・計12隻、51cm砲36門、46cm砲18門、播磨のレールガンは通常の装薬式に直すと威力はだいたい・・・62cm砲だから、これが54門、対して向こう側はコナイテッド・ステーツ型8隻、モンタナ型6隻・・・計14隻48cm砲96門、46cm砲72門・・・今まで米海軍の標準口径が16インチと予想して、改造してきたからな・・・如何する、今から改造するにしても、そう簡単に46cmを搭載する事はできんし、トマホークを複製して、飽和攻撃でもやるか・・・」

翔平

「やめーい、本気でやりそだだから怖いな」

武

「ほほ[冗談だ、でも今保有している戦艦だけじゃきついな・・・よ  
し、改造しよう」

弘明

「簡単じやないんじやないですか?！」

武

「簡単ではないだけだ、できないとは言つていないーーもうすでに  
大和の改造案は出来ている!」

翔平

「予想していただろ！」

武

「氣のせいだ」

バンと武が机の上に図面を置く

戦艦大和

全長425m 基準排水量165,500t

全幅61.5m 満載排水量235,200t

速度35-46ノット

|                |                |     |     |
|----------------|----------------|-----|-----|
| 主砲             | 零式60口径510mm砲   | 三連装 | 4基  |
| 副砲             | 三式60口径203mm砲   | 三連装 | 2基  |
| 両用砲            | OTOメララ127mm速射砲 | 連装  | 12基 |
| O TOメララ76mm速射砲 | 单装             |     | 8基  |

|     |                        |            |            |
|-----|------------------------|------------|------------|
| 機関砲 | 25mm ファランクス CIWS       | 連装         | 4基         |
| 機銃  | 40mm 対空機銃<br>25mm 対空機銃 | 4連装<br>3連装 | 40基<br>20基 |

ミサイル Mk57 VLS 80セル

一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル

八式対艦ミサイル

### 艦載機

|          |       |    |
|----------|-------|----|
| V - 22   | オスプレイ | 2機 |
| SH - 60K |       | 3機 |
| 最大搭載機数   | 8機    |    |

### 同型艦

大和 武藏 信濃 三河

### 武

「主砲を一基増設し、さらに墳進弾垂直発射機を強化！対空火力強化のためOTOメララ76mm速射砲も装備しさらに、最大の変更点は、両舷のバラストタンクを要とした独特的の防御機構によって、半潜状態になることが可能ことだ、これを利用することにより、防御上でメリットがかなりあるはずだ、さらに水流噴射推進装置を使用しての急加速と、球状艦首に装備されたバウスラスター、艦尾の水中安定翼によつて通常の大型艦では考えられない回避運動をする事が可能、現在の我々の最先端技術を詰め込んだ、史上最大最強の戦艦だ！！」

弘明  
「・・・」

翔平

「あきれてものが言えん」

武

「よし、さっそく大和型を全艦ドックに入れて作業する手配と、鋼材を手配してその後から、全戦艦の設計図を引きなおして・・・そついえば、明日、ついで新型航空戦艦が就役する」

翔平

「レキシントンの改造が終わったのか?」

武

「ああ、それと畠田正臣に命令されるが・・・新しい艦名は『関ヶ原』だ」

第三十話 保有戦艦ヲ改造セヨ（後書き）

御意見御感想お待ちしております

## 第三十一話 作戦準備期間

2月2日

大日本帝國海軍 吳海軍工廠

第六船渠

呉海軍工廠は、日本最大の海軍工廠であり、現在、修理用のドックを含めて十の船渠を持つ巨大工廠だ、もちろん周辺は対空高射砲陣地、局地戦闘機用滑走路等の防衛設備も充実している

今日此處、呉海軍工廠で一隻の艦船の改造が終了し、凡そ五か月ぶりに、その船体を海に浮かべようとしていた

巨大な船体を持ち、中央に巨大な砲塔と城郭を思わせる黒鉄の艦橋、そして、それら構造物を挟むようにして、設置されたV字飛行甲板、基準排水量12万トン、全長390m、全幅68m、最大搭載機数90機、零式60口径510mm砲3連装を3基搭載する、世界最強の航空戦艦、関ヶ原、桶狭間・・・元米海軍航空母艦レキシントンとサラトガの姿であった

航空戦艦 関ヶ原 艦橋

翔平

「どうだ、関ヶ原、桶狭間、気分は」

関ヶ原

「気分はいいけど、気持ちが複雑ね、」

桶狭間

「やつね」

翔平

「祖国と戦うことがか?」

関ヶ原

「いえ、私はもう大日本帝国海軍の航空戦艦関ヶ原よ、そんな抵抗はないわ、複雑なのは、自分の多忙な艦歴よ」

桶狭間

「あたしもまさか、航空戦艦に改造されるなんて思ってもみなかつたわ」

翔平

「ああ、なるほど」

翔平は納得した

レキシントンとサラトガは元は巡洋戦艦として建造されていたが、条約により航空母艦に改造、さらに、拿捕されて、機関室等の全面修理交換が必要なため、艦体全体を改造し航空戦艦に生まれ変わったのだ

関ヶ原

「生まれた時はこんな多忙な人生?になるなんて思わなかつたもの

翔平

「まあ、俺も歴史を変えるなんて思つていなかつたけどな・・・ま

あ、桶狭間共々頑張つてくれ」

関ヶ原

「任せてください」

桶狭間

「言われなくとも分かつてゐるわ」

翔平

「頼んだぞ」

翔平はそつと艦橋から出て行つた

関ヶ原、桶狭間の両艦は主力艦と言う事で第一連合艦隊、第六戦隊に配備されるがその前に、完熟訓練のため、2ヶ月間日本海で新型重巡洋艦、靈仙型の五番、六番艦、九重と斜里と駆逐艦松型6隻と共に艦隊運動訓練等が行われる予定だ

翔平は関ヶ原から内火艇に移り、関ヶ原と入れ違いに船渠に入渠する、世界最強最大級の戦艦に目を向ける

翔平

「親父め、さつそく改装する気か……」

そう、昨日の話し合いの後、武はすぐ艦政本部に戻り設計図を提出、その足で工作艦宗谷に戻り、資材を発注し、さらに各戦艦の図面を引き直し作業にかかつた

第六船渠には大和が入渠し、その隣の第七船渠には武藏が入渠、さ

らに信濃、三河は九州大分の大神海軍工廠に移動し明日の2月3日に入渠の予定が立てられている

翔平は大和の入渠する船渠を見る、すぐその隣には第五船渠がある、第五船渠では米空母ホーネットの改装中、資材加工工場、小組立工場を挟んで、第四船渠ではエンタープライズ、その隣第三船渠ではヨークタウンの改装作業中を行っている真っ最中であった

大和

「翔平さん、お久しぶりです」

翔平

「おお、大和か久々だな」

大和

「ええ、私達はずつとトラックでしたから」

翔平

「そうか、山本長官はお見えになるか？」

大和

「はい、今は旗艦を扶桑に移して指揮をとっています」

翔平

「そうか分かった有難う」

大和

「どういたしまして、出はこの辺で」

翔平

「ああ」

こうして翔平は旗艦である播磨に戻った

### 第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 長官執務室

翔平

「やはりこの部屋が一番落ち着くな

翔平が執務室でくつろいでいると

啓太  
「入るで、翔ちゃん」

翔平  
「おお、啓太か、入れ」

啓太が入ってきた

啓太

「ほい、これがここ三ヶ月、第一連合艦隊、本隊の活動報告書や」

翔平

「うん、分かった、見せてくれ」

翔平は活動報告書を受け取り田を通す

翔平

「南太平洋の戦局はどうだ」

啓太

「静かなもんや、豪州を中立にさせたことが効いているんやろか」

翔平

「ああ、第一連合艦隊が去年の暮れに行つた作戦だろ、無茶するよな、山本長官も」

第一連合艦隊は去年の暮つまり12月末に豪州シドニーに姿を見せつけ、豪州政府を威嚇し、単独講和に着かせることに成功した、これにより連合軍側は南太平洋における制海権、制空権をほぼ失い、さらに豪州と言つ中継基地を失つた

翔平

「さて、次は、いよいよ、ハワイか・・・」

山本五十六

「その通りだ、林君」

翔平

「！..山本長官いつたいいつから」

山本五十六

「ついわつあだ」

翔平

「こちから行きましたのに」

山本五十六

「いや、今司令部は仮住まいへの引っ越しに忙しいんだ、来られたらむしろ困る」

武 「おい、翔平、図面ができたぞ」

セーラー服のアトにクマを作っていた武が入っていた

翔平

「・・・また徹夜しただろ？、まったく、母さんがいないといつもこれだ」

武

「大丈夫だ自分の健康管理ぐらいはできている、あつ山本長官、いらしていたんですね」

山本五十六

「ああ、ところでもう図面が引けたのか」

武

「はい、今いる設計技師を総動員させましたから」

山本五十六

「不備はないだろ？な」

武

「もちろんです、つい先ほど、牧野吳海軍工廠造船部設計主任にも話してきたけど大丈夫だ」

翔平

「親父は、性格はこんなのですけど、艦船の事だけに關しては一級品の仕事をします」

武

「なんだその言い草は、一応軍事関連は極めているつもりだぞ」

山本五十六

「コホン、まあ、信用できる仕事をしてこることは今までの事でわかつてゐる」

翔平

「親父は図面を持つてきたんだろ、見せてくれないか」

武

「ああ、検討した結果、比較的短期間に改造が可能な戦艦のみ改造する」とにかまつた

山本五十六

「ほつ、何隻あるんだ」

武

「検討した結果ですが、大和型4隻、長門型2隻、日本艦はこれのみです、伊勢、扶桑、金剛型はこれ以上改造するとバランスが悪化し、復元力を大幅に低下させます、次に英戦艦ネルソン型・・・若狭型2隻、元独戦艦ビスマルク・・・丹波型2隻を改装します、計10隻です」

では、性能表をこの機会に書いておく

戦艦長門

|          |                   |       |          |
|----------|-------------------|-------|----------|
| 全長       | 385m              | 基準排水量 | 125·500t |
| 全幅       | 55·5m             | 満載排水量 | 182·800t |
| 速度       | 35ノット             |       |          |
| 主砲       | 零式60口径510mm砲      | 3連装   | 3基       |
| 副砲       | 三式60口径203mm砲      | 3連装   | 2基       |
| 両用砲      | OTOメララ127mm速射砲    | 連装    | 8基       |
| 機関砲      | OTOメララ 76mm速射砲    | 連装    | 4基       |
| 機銃       | 25mmファランクスCIWS    | 单装    | 4基       |
| ミサイル     | Mk57VLS80セル       | 3連装   | 34基      |
| 艦載機      | 25mm対空機銃          | 4連装   | 4基       |
| SH - 60K | 一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル | 18基   | 1基       |
| 最大搭載機数   | 八式対艦ミサイル          |       |          |
| 同型艦      |                   |       |          |
| 長門       |                   |       |          |
| 陸奥       |                   |       |          |
| 戦艦若狭     |                   |       |          |
| 全長       | 365m              | 基準排水量 | 116·500t |
| 全幅       | 51·2m             | 満載排水量 | 171·200t |
| 速度       | 35·68ノット          |       |          |

|        |                |       |         |
|--------|----------------|-------|---------|
| 主砲     | 零式60口径510mm砲   | 3連装   | 3基      |
| 副砲     | 三式60口径203mm砲   | 3連装   | 2基      |
| 両用砲    | OTOメララ127mm速射砲 | 連装    | 8基      |
| 機関砲    | 25mmファランクスCIWS | 連装    | 4基      |
| 主砲     | 零式60口径510mm砲   | 3連装   | 3基      |
| 副砲     | 三式60口径203mm砲   | 3連装   | 2基      |
| 両用砲    | OTOメララ127mm速射砲 | 連装    | 8基      |
| 機関砲    | OTOメララ76mm速射砲  | 单装    | 4基      |
| 機銃     | 25mmファランクスCIWS | 連装    | 4基      |
| ミサイル   | Mk57 VLS 80セル  | 連装    | 4基      |
| 艦載機    | SH-60K         | 1機    | 18基     |
| 最大搭載機数 | 3機             |       | 1基      |
| 同型艦    | 若狭、伯耆          |       |         |
| 戦艦丹波   |                |       |         |
| 全長     | 372m           | 基準排水量 | 121500t |
| 全幅     | 54.5m          | 満載排水量 | 195200t |
| 速度     | 38ノット          |       |         |
| 主砲     | 零式60口径510mm砲   | 3連装   | 3基      |
| 副砲     | 三式60口径203mm砲   | 3連装   | 2基      |
| 両用砲    | OTOメララ127mm速射砲 | 連装    | 8基      |
| 機関砲    | 25mmファランクスCIWS | 連装    | 4基      |

|      |                   |     |     |
|------|-------------------|-----|-----|
| 機銃   | 40mm 対空機銃         | 4連装 | 34基 |
| ミサイル | MK57 VLS 80 セル    | 3連装 | 18基 |
|      | 一式対空ミサイル、五式対潜ミサイル |     |     |
|      | 八式対艦ミサイル          |     |     |
| 艦載機  |                   |     | 1基  |

SH - 60K 2機  
V - 22 電空 2機  
最大搭載機数 5機

同型艦  
丹波 丹後

翔平

「意外と少ないな、全部改造するかと思った」

武

「資材の発注が間に合わないのと、時間がかかるんだ、大和型の改装終了は3か月後を予定している、長門型、ネルソン型、丹波型は完全機械化がされている、ドック艦吳型、及び神戸型でやっていく、これにより改装期間は約1か月から2か月と言つたところだ、大和も本当はドック艦で改造をしたかつたんだが、吳型をもつてしても大和は入らないからな」

山本五十六

「分かつた」

武

「では、自分はこれで」

武は設計図を丸めて、部屋を出て行つた

山本五十六

「それで、この作戦所に目をとしておいてくれないか」

翔平

「いよいよ、ハワイ攻略ですか」

山本五十六

「そうだ、関ヶ原、桶狭間の完熟訓練が終了し次第、作戦準備期間に入る」

翔平

「投入兵力は、どのくらいですか」

山本五十六

「現在ハワイ、真珠湾には碌な艦隊はおらんらしいが、ハワイ諸島は要塞化が進められているらしい、得に航空兵力が中心だそうだ」

啓太

「と言う事は、次は航空兵力が中心で?」

山本五十六

「そうだ、第一機動艦隊、第二機動艦隊は現在訓練に余念がないらしい、小沢と山口が、航空兵に発破をかけているみたいでな」

翔平

「そう言えば、新しく、第三機動艦隊が編成されたとか」

山本五十六

「いま、第一連合艦隊が内地に帰還したからな、その埋め合わせとして、マーシャルに配備されたそつだ」

翔平

「第二機動艦隊の乗員の10%が女性と聞きましたけど・・・軍令部がよく動きましたね」

海軍軍令部では、第一連合艦隊では女性が10%占めている事実に目を向けて、その代表である、参謀の清水葵中将に話を聞き、5年ほど前から女性兵学校を設立した

山本五十六

「最近の軍令部もずいぶん変わってきたからな」

翔平

「時代のせいですよ、時代の」

播磨

「二人とも急に老け込まない!」

翔平

「おお、播磨か」

山本五十六

「私はいい歳なんだけどな」

翔平

「なにを言つてこるんですか、長官にはまだ現役でいてもらわない

と

山本五十六

「はははは、冗談だ、では作戦計画書に目を通してくれば、ではまた」

翔平

「はい、了解しました」

そつ言つて山本は退室した

啓太

「さて、これからどうするん?」

翔平

「取りあえず、報告書と計画書に目を通す、一人とも取り敢えず静かにするか、出て行つてくれ」

啓太

「じゃあ、俺は艦内巡検でもしますか」

播磨

「私は、鳳翔の所に行つてくれる」

翔平

「おう、分かった」

翔平は執務机に座り、報告書に目を通し始めた。

## 第三十一話 作戦準備期間（後書き）

「意見」「感想お待ちしています。

## 第三十一話 ハワイ攻略作戦・・・宙作戦始動！

4月8日

大日本帝國海軍 柱島泊地

陸地には桜が咲き誇り、まるで、出撃していく艦船を見送っている  
よつだつた・・・

第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦播磨

4月を迎えて人事異動が完了し、播磨の前艦長は第一独立戦隊の戦  
隊指令・・・少将に昇進し、播磨の新艦長は播磨副長の、此花剎那  
が播磨新艦長に就任した

翔平

「此花艦長、出港準備は？」

剎那

「すでに整っています」

翔平

「よし、これから艦の操舵は任せるぞ、剎那」

剎那

「はい！任せてください！」

翔平

「期待している・・・参謀長、全艦の様子の確認を」

啓太

「はつ、了解しました」

しばらくして

啓太

「長官、第一連合艦隊艦船全艦出港準備[完]了です」

翔平

「よし、宙作戦を始動する、第一連合艦隊出撃せよ」

刹那

「出港用ヘ意ツ！」

出港ラッパが鳴り響く

士官1

「よ～そろ～、出港用意！」

水兵1

「出航用ヘ意ツ！ 航い放て―――ツ！」

水兵2

「全艦出港、第一独立駆逐隊より出港せよ」

水兵3

「第一独立戦隊、第一独立航空艦隊、機関始動。第一独立戦隊、第二独立航空艦隊序列に従い出港せよ」

水兵 4

「第一「抜錨。第三独立戦隊、第二独立航空艦隊泊地より移動、水道に向かえ」

第一連合艦隊

旗艦 戰艦扶桑

水兵 4

「第一連合艦隊出撃します」

山本五十六

「うむ、軍樂隊準備だ」

宇垣

「すでに、後部飛行甲板に準備完了」しています

山本五十六

「よし、派手に見送りつつ」

戦艦扶桑の後部飛行甲板に軍樂隊が集合していた、

水兵 5

「第三独立戦隊、戦艦駿河動きます!」

見張り員が叫ぶと同時に、軍樂長がタクトを振り上げた。

行進曲軍艦が泊地に響く

山本五十六

「第一連合艦隊に信号【健闘を祈る】以上だ」

士官2

「了解！」

第一連合艦隊は、第一支援艦隊を引き連れて、柱島泊地を出撃、広い太平洋に、姿を隠した・・・

ハワイ諸島攻略作戦・・・宙作戦始動！

参加艦隊

第一連合艦隊

司令長官：林翔平大將 旗艦：戦艦播磨

第一独立戦隊

戦艦 播磨 三笠

巡洋戦艦 十六夜 十五夜

第二独立戦隊

戦艦 紀伊 尾張

巡洋戦艦 天羽 天月

第三独立戦隊

戦艦 常陸 駿河

巡洋戦艦 十勝 石狩

第一独立航空戦隊

航空母艦 鳳翔 凤凰

第二独立航空戦隊

航空母艦 鳳凰 凤凰

航空母艦 翔龍

瑞龍

第三獨立航空戦

勇鶴

航空母艦 萃鶴

初月

第一独立駆逐隊

秋月 照月 凉月

駆逐艦 新月 若月 霜月

冬月

第二独立駆逐隊

春月 宵月 夏月

駆逐艦 慧月 靈月

花月

第三独立駆逐隊

烈月 雲月

第四独立駆逐隊

霧島

駆逐艦 春月 若月 霜月

冬月

駆逐艦 新月 若月 霜月

冬月

第一機動艦隊

司令長官：小沢治三郎中将 旗艦：航空母艦赤城

第五戦隊

戦艦 金剛 比叡 榛名 霧島

第十三戦隊

重巡洋艦 利根 筑摩 鈴谷 三隈

第十四戦隊

重巡洋艦 妙高 足柄 吉野 皇海

第一航空戦隊

航空母艦 赤城 加賀 蒼龍 飛龍

第二航空戦隊

航空母艦 翔鶴 瑞鶴 雲鶴 雷鶴

第三航空戦隊

航空母艦 幻鳳 神龍 鱗龍 紫龍

第二十三戦隊

軽巡洋艦 阿賀野 能代 矢矧 酒匂

第二十四戰隊

輕巡洋艦 大淀 仁淀 高瀨 鳴瀨

第六驅逐隊

驅逐艦 叢雲 東雲 薄雲 綾波

第七驅逐隊

驅逐艦 夕暮 有明 玉波 狹霧

第八驅逐隊

驅逐艦 笠雲 氷雲 旗雲 浮雲

第九驅逐隊

驅逐艦 黑潮 逆潮 長潮 風潮

第十驅逐隊

驅逐艦 初風 野風 太刀風 東風

第十二驅逐隊

驅逐艦 橫風 松風 帆風 陸風

第十三驅逐隊

驅逐艦 榆 楠 椎 初桜

第二機動艦隊

司令長官：山口多聞中將 旗艦：航空母艦大鳳

第六戰隊

戰艦 上總 下總

第十五戰隊

重巡洋艦 最上 熊野 那智 羽黑

第十六戰隊

重巡洋艦 古鷹 衣笠 黒姫 遠音別

第四航空戰隊

航空母艦 大鳳 雷鳳 鄉鳳 麟鳳

第五航空戰隊

航空母艦 大鳳 雷鳳 鄉鳳 麟鳳

航空母艦 雲龍 嵐龍 雷龍 虹龍

第二十五戦隊

軽巡洋艦 米代 子吉 雄物 瑞萌

第二十六戦隊

軽巡洋艦 常呂 後志利別 沙流 雲出

第十四駆逐隊

駆逐艦 秋風 雨風 天津風 中津風

第十五駆逐隊

駆逐艦 北風 微風 束風 宵風

第十六駆逐隊

駆逐艦 神風 夏風 夕風 夜風

第十七駆逐隊

駆逐艦 神楽月 菊月 葉月 長月

第十八駆逐隊

駆逐艦 夏草 千草 初菊 白菊

第一支援艦隊

司令長官：小田切理少将 旗艦：自走浮きドック神戸

第四独立戦隊

巡洋戦艦 石垣 佐渡

第四独立航空戦隊

軽航空母艦 陣鷹 冲鷹

第二十九戦隊

軽巡洋艦 菊池 五ヶ瀬 松浦 本明

第三十戦隊

軽巡洋艦 番匠 遠賀 六角 嘉瀬

第五独立駆逐隊

駆逐艦 弦月 半月 有明月 夕月夜

第二十六駆逐隊

駆逐艦 靈夜 深夜 秋夜 夏夜

第二十七駆逐隊

駆逐艦 沖夜 初茜 初東雲 初霞

第一工作隊

自走浮きドック 神戸 横浜 大阪 名古屋

第二工作隊

自走浮きドック 東京 函館

工作艦

鳴門 豊予

第一揚陸隊

強襲揚陸艦 墨田 江東 品川 目黒

第二揚陸隊

強襲揚陸艦 世田谷 仲野 台東 文京

第一輸送隊

輸送艦 札幌型15隻

参加艦艇 198隻

参加航空機 2000機以上

航空戦力を中心として、編成された第一、第二機動艦隊は、択捉島、  
单冠湾を出港し、艦隊速度を20ノットで、オアフ島に向かってい  
た、ここに史上最強の航空機動艦隊を中心とした、作戦が始動した。

ハワイ諸島 オアフ島

米太平洋艦隊司令部

此處アメリカ太平洋艦隊司令部では、日本艦隊が出撃したという情  
報をキヤッチし混乱状態であった

チエスター・ニミッツ

「日本艦隊の行方はまだわからないのか」

参謀1

「はい、ですが、スペイによる情報収集等を重ねた結果、日本艦隊の攻撃目標はここはオアフだと思われます」

チエスター・ニミッツ

「出撃した艦隊は」

参謀2

「第一連合艦隊です」

チエスター・ニミッツ

「・・・ハルゼー、出せる艦艇はどのくらいか分かるか」

ウイリアム・ハルゼー

「残念だが、出せるのは、戦艦ノースカロライナ、ワシントン他巡洋艦、駆逐艦合わせても20隻位だ、空母も就役したばかりのエセックスがいるが・・・毎日のように事故が起こつたら話にならない。・・とてもじゃないが、今の日本艦隊には太刀打ちできない」

何時もは強気なハルゼー提督だが、今回ばかりは、その自身も消え失せていた

去年の暮れに就役した、米海軍の誇る最新鋭空母エセックスだが、就役直後に溶接ミス、電路の接続ミス等が露呈し、それらの問題が3月によつやく改善され、本格的訓練に移つたが、毎日のように着艦事故が起つり、機体の補充が間に合わない状態であつた。

ウイリアム・ハルゼー

「・・・こんな戦争、始めたのが間違いだ」

ハルゼーはつぶやき、一二三七の執務机にある、写真を見た

ウイリアム・ハルゼー

「・・・こいつが日本人が作った空母・・・ホウショウ」

チエスター・ニミッツ

「ああ、第一連合艦隊に配備されている超大型空母だ、こいつが日本海軍の空母の基本型になつていてるみたいだ」

航空屋のハルゼーは、空撮された鳳翔の写真を見て、その機能性をすぐさま理解した

ウイリアム・ハルゼー

「・・・俺は、日本人共をジャップと呼んで馬鹿にしていたが、どうもそれは間違いだつたらしいな・・・」

チエスター・ニミッツ

「ああ、日本人を敵に回したのは間違いだつたかもしれん」

ウイリアム・ハルゼー

「・・・悩んでも仕方ない、後は軍人の役目を尽くすだけだな」

チエスター・ニミッツ

「ハルゼー君は、艦隊を率いて、サンゴ礁に退避してくれ」

ウイリアム・ハルゼー

「何を言つているんですか、提督！」

「ミッツの衝撃的発言に、ハルゼーは声を張り上げる

チエスター・ニミッツ

「ハルゼー、君にはわかっているだろ？ 我が太平洋艦隊の練度を」

現在アメリカ太平洋艦隊の練度は、御世辞にも高いとは言えなかつた

チエスター・ニミッツ

「この状態で日本艦隊を迎え撃つとしても、とても歯が立たないだろ？ ……頼む」

ウイリアム・ハルゼー

「… …了解しました、提督はどうするんですか？」

チエスター・ニミッツ

「… …その時次第だ」

その日の夕方、ハルゼーは動ける艦艇をすべて引き連れて、真珠湾を出港した

第二連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 艦橋

葵

「軍令部より入電です」

翔平

「うん、入電？」

葵

「はい、読み上げます【発・海軍軍令部 宛・第一連合艦隊 真珠湾より艦隊出航せり、目的地は、サンティエゴと思われる】以上です」

翔平

「艦隊を後方に下げるか・・・いい判断だな」

啓太

「第一機動艦隊、第二機動艦隊より連絡、【我出撃する】以上や」

翔平

「よし・・・予定通りか」

翔平は腕時計を見て時間を確認する

刹那

「長官、まもなく変針予定海域です」

翔平

「よし、変針、各艦に連絡、艦隊速度は25ノットを維持せよ」

啓太

「了解」

翔平

「針路変更、目指すのは真珠湾！」



## 第三十一話 ハワイ攻略作戦・・・宙作戦始動！（後書き）

「意見・感想お待ちしています。」

## 第三十二話 奇跡の翼・・・Z機 出撃ス

4月10日

ハワイ諸島の一つ、オアフ島の真珠湾では、米本土とオアフを行き来する輸送船団で絶えなかつた、米本土に向かつ輸送船は、多数の民間人を乗せて逐次出港し、逆に真珠湾に入港した輸送船は、大量の航空機等の軍需物資を積みさらに航空機の整備員、搭乗員を連れていた、輸送船からデリックで下される航空機の中には英軍の蛇の目や独軍の黒十字、バルケンクロイツ、鉤十字、ハーケンクロイツも交じつていた・・・

アメリカ合衆国

ハワイ諸島 オアフ島

米太平洋艦隊司令部

チエスター・ニミッツ

「今の航空機の配備状況はどうなつてゐる

ニミッツが参謀の一人に問う

米参謀1

「はい、現在、我が海軍の最新鋭戦闘機F6Fヘルキャット、そして従来のF4Fワイルドキャット、海兵隊のF4Uコルセアを始めとした戦闘機隊が450機そして爆撃機SBDドーントレスが120機、雷撃機TBFアベンジャーが221機・・・計791機が力オネへ航空基地を始めとする海軍基地に分散配備が完了しています、さらに今日の午後には輸送船団が新たにF6Fを始めとした戦闘機

を120機が到着します

参謀は書類を見てニミッツに答える

チエスター・ニミッツ

「・・・陸軍の方はどうなつているんだ」

米参謀2

「はい、陸軍からの報告によりますと、戦闘機カーチスP-40が150機、P-39エアラコブラ152機、P-38ライトニング210機、そして最新鋭機P-47サンダーbolt 203機、P-51Bムスタング89機を始めとした戦闘機隊が831機、爆撃機B-17 フライングフォートレス320機、B-18 ボロ250機、B-24 リベレーター210機、B-25 ミッセル510機、B-26マローダー100機・・・計2221機がヒツカム飛行場を始めとする陸軍航空基地に分散配備されています」

アメリカ陸海軍は、アメリカ本土に配備されている航空機の10%をハワイ諸島に送り込み、さらに、オアフ島要塞を強化しモンタナ級戦艦に搭載される Mk.7 18インチ50口径三連装砲をウイルソン砲台に設置し強化を行い、さらに飛行場を大幅に広げて規模は開戦前の二倍の面積になつていた・・・

チエスター・ニミッツ

「つむ、分かつた・・・」

米参謀1

「提督まだ戦力はあります」

チエスター・ニミッツ

「なんだ」

米参謀1

「今回の防衛作戦は前々から計画されていたものです・・・すでに連合軍の総力を挙げて航空隊をここオアフに集結させています・・・具体的には、英國空軍（R·A·F）所属のスーパー・マリン スピットファイアが120機、ホーカー ハリケーン230機、アブロ ランカスター100機、デ・ハビランド モスキート200機・・・計650機・・・ルフトヴァッフェ獨国空軍所属のメッサーシュミット Bf109が124機、フォッケウルフ Fw190が250機、フォッケウルフ Ta152が85機そして、連合軍初のジェット戦闘機、メッサーシュミット Me 262が80機です、こいつなら、ジヤップのソニックにも対抗できるでしょう、爆撃機はユンカース Ju 88が80機、ジェット爆撃機のアラド Ar 234、60機・・・計679機がオアフに到着しています」

チエスター・ミニッツ

「ジェットか・・・（確かにMe262は優秀な航空機だと聞いているが・・・ソニックに対抗できるのか）」

4月24日

大日本帝国  
北海道 十勝平野  
某所・・・

此処北海道は、武の進言により環境保護を重視しつつ開発が進められていた、その一つである、日本が誇る日本最大規模の巨大航空基地と巨大工場・・・

奇跡の翼・・・ Z機・・・

そう・・・

中島飛行機が設計し造り上げた、巨人機・・・

戦略爆撃機富嶽の本拠地であつた

重爆撃機 富嶽

全長 55m  
全幅 72m  
全高 11.25m

発動機 烈56型空冷4列星型36気筒エンジン 7000馬力  
×6基

最大速度 865km/h  
航続距離 21.200km  
実用上昇限度 16.500m

固定武装

電探連動自動照準式、二式二十耗回転式6銃身機銃 6基  
(機首前面1基 尾部1基 上部2基 下部2基)

爆装

爆弾最大 45.000kg

去年の十月からの生産が進められている富嶽の爆撃機タイプの総数は丁度100機、すでに搭乗員の訓練も課程も終了し、練度の方

も問題はなかつた

他にも下部に「式」一十耗回転式多銃身機銃を20基搭載した掃射型、100名の完全武装の陸兵を運べる輸送機型が50機づつ完成していた・・・

富嶽は駐機場に駐機し出撃の時を今か今かと待つていた

武

「壯觀ですね、知久平さん」

武も富嶽最初の出撃を見に興からわざわざ、輸送機を乗り継いで北海道まで来ていた

知久平

「いやあ、之も彼方の協力があつてこそです、有り難うござります、私の夢も達成されました」

武

「いえ、これからですよ、まだこれからね・・・」

知久平

「ふ、まだですか・・・」

武

「向上心を持たないと、技術屋はね・・・」

その30分後、富嶽隊は全機大空に飛び立つた・・・

且指すは、ハワイ、オアフ島・・・

### 第一連合艦隊

旗艦 イージス戦艦 播磨 艦橋

第一連合艦隊は、ハワイ、オアフ島から約600キロの海域に居た艦隊速度、40ノットの高速でオアフに進撃している時だった・・・

播磨型の誇る、SPY-2レーダーが今までにない巨大な機影をとらえたのは・・・

水兵1

『CIC、艦橋・・対空レーダーに感！数100！距離450キロ  
方位290、速度310ノット！高度15000！IFFに反応！  
富嶽隊です！』

翔平

「来たか・・・全空母に連絡【発艦せよ】以上だ

啓太

「了解」

水兵2

「先行駆逐艦、秋月より連絡！【敵潛水艦発見！これより攻撃す！】  
」

水兵3

「敵潜から、電波発信！」

翔平

「つち、気づかれたか・・・対空戦闘用意!警戒を厳にせよ!」

葵

「了解!」

空母鳳翔 艦橋

孝彦

「発艦命令が来たぞ!全機第一次攻撃隊発艦せよ!」

士官1

「了解!第一次攻撃隊、一番機射出位置へ!」

鳳翔 飛行甲板

水兵4

「宜候!一番、二番、射出位置へ!」

水兵5

「チョイ前~、チョイ前~、良し!~!」

水兵3

「一番機、射出準備良し!最終確認!~!」

水兵6

「一番機、力タバルト接続確認!最終確認・・・よし!~!」

水兵5

「一番、三口オシー！」

士官2

「一番機、射出！」

パチ シヤアアアアア 「ゴウウウー！」

電磁力タパルトにより、音神が軽々と空に飛び立つ

水兵6

「次、二番機、発艦せよ」

士官2

「二番機、射出！」

パチ シヤアアアアア 「ゴウウウー！」

鳳翔 艦橋

鳳翔

「ふん、無事に飛んだか、最初に訓練を行ったときはひやひや物だ  
つたが・・・うまくなつたもんだな」

艦橋で鳳翔がつぶやく

孝彦

「おっ、珍しいな、鳳翔がつちのパイロットを褒めるなんて」

鳳翔

「う、うるさい！」

孝彦

「まつ、初期のころに比べるとだいぶ上達したけどな、最初のころは、何時着艦事故が起こつてもいいようにしていたからな」

孝彦が飛び立つ第一次攻撃隊を見守る

続いて、鳳凰、翔龍、瑞龍、萃鶴、勇鶴から、音神、蒼山が20機づつ計240機が飛び立つた・・・

富嶽戦略爆撃隊 指揮官機

富嶽爆撃隊は高度15000mを速度310ノットでオアフ島を目標としていた、

この富嶽隊に指揮官には、紀平康暉大佐・・・生糸の爆撃機乗りだ

電探員

「下方から機影！接近！敵味方識別装置に反応！友軍です！」

康暉

「来たぞ、音神隊・・・護衛戦闘機隊だ」

副操縦士

「頼もしいですね、あれが・・・無敵の戦闘機、音神ですか？」

康暉

「ああ

通信士

「音神隊より通信です回線開きます」

康暉

「ああ、頼む

昇

『こちら、鳳翔制空隊、隊長の山口昇だ、之より貴隊をオアフまで護衛する』

康暉

「こちら、富嶽戦略爆撃機隊！指揮官の紀平康暉だ、貴隊の護衛に感謝する」

富嶽戦略爆撃機隊は音神、蒼山の護衛を受けて、オアフに向かった

ハワイ諸島 オアフ島

米太平洋艦隊司令部

ノックもせずに士官が長官室に入ってきた・・・

士官1

「長官、遂に敵艦隊を発見しました！」

チエスター・ニミッツ

「ん？・・・そうか！敵艦隊の編成と位置は？」

士官1

「はい、敵艦隊は戦艦6空母6巡洋戦艦6駆逐艦20隻以上を含む大艦隊です！」

チエスター・ニミッツ

「戦艦6、空母6・・・第一連合艦隊か！」

士官1

「はい、間違いないでしよう、すでに通信を受け取った、陸軍航空隊及び海軍航空隊は発進体制に入っています」

チエスター・ニミッツ

「よし、先手を打つ、攻撃隊は準備ができ次第、全機発進し第一連合艦隊を攻撃せよ」

士官1

「アイ・サー！」

士官は駆け足で長官室を退出する

チエスター・ニミッツ

「・・・ふう・・・何日持ちこたえるか・・・」

「ミッソは誰もいなくなつた、長官室でつぶやいた・・・

その頃、オアフ全飛行場では、航空機が蒼空に飛び立つた

米海軍航空隊

戦闘機

F6Fヘルキャット

120機

|                      |      |
|----------------------|------|
| F 4 F ワイルドキャット       | 100機 |
| F 4 U コルセア           | 60機  |
| 爆撃機                  |      |
| S B D ドーナトルース        | 80機  |
| 雷撃機                  |      |
| T B F アベンジャー         | 180機 |
| 米陸軍航空隊               |      |
| 戦闘機                  |      |
| カーチス P - 40          | 100機 |
| P - 39 エアラゴブラー       | 152機 |
| P - 38 ライトニング        | 180機 |
| P - 47サンダーボルト        | 160機 |
| P - 51 B ムスタング       | 50機  |
| 爆撃機                  |      |
| B - 17 フライングフォートレス   | 280機 |
| B - 18 ポロ            | 160機 |
| B - 24 リベレーター        | 180機 |
| B - 25 ミッチャエル        |      |
| B - 26 マローダー         | 100機 |
| 英國空軍（R . A . F）派遣航空隊 |      |
| 戦闘機                  |      |
| スーパーマリン スピットファイア 80機 |      |
| ホーカー ハリケーン           | 155機 |
| 爆撃機                  |      |
| アブロ ランカスター           | 200機 |
| デ・ハビランド モスキート        | 100機 |

獨國空軍派遣航空隊  
ルフトヴァッフ

|                  |      |
|------------------|------|
| メッサーシュミット Bf 109 | 100機 |
| フォッケウルフ Fw 190   | 100機 |
| フォッケウルフ Ta 152   | 60機  |
| メッサーシュミット Me 262 | 20機  |
| 爆撃機              | 80機  |
| ユンカース Ju 88      |      |
| アラド Ar 234       |      |
| 60機              |      |

攻撃隊総数はなんと3017機これらの航空機が全機発進するまではもちろん、かなりの時間がかかり、最後の機体が地面を離れたときは出撃命令からすでに45分が立っていた・・・

ハワイ諸島 オアフ島  
ダイアモンドヘッド対空レーダー基地

攻撃隊が全機飛び発ち、ダイアモンドヘッド山頂に配備された、対空警戒用レーダには、最後に飛び立つた編隊が見えなくなつた頃、今までにない巨大な輝点が映つた

レーダー員1

「おい！もう攻撃隊が帰ってきたのか？」

レーダー員2

「馬鹿な、つい先ほど出撃していつたばかりだぞ」

レーダー員1

「だつたら、何だつていうんだ、この輝点は・・・一寸待て、高度と速度が出たぞ・・・嘘だろ・・・」

レーダーがはじき出した速度と高度を見てレーダー員は自分の目を疑つた

レーダー員2

「どうしたんだ！？」

レーダー員1

「一〇、高度・・・15・000m・・・速度400ノット・・・数100機以上！」

レーダー員2

「・・・とにかく司令部に報告だ」

レーダー員1

「お、分かった」

同じく、カフク岬にあるレーダーサイトも、巨大な機影を捉えていた、その報告はすぐに、司令部に飛び込んだ

ハワイ諸島 オアフ島

米太平洋艦隊司令部

参謀長

「ちょ、長官！ダイアモンドヘッド、カフク岬、レーダーサイトから報告です！敵重爆らしきもの凡そ100機がオアフに向けてアプローチしつつあり！速度400ノット！高度15・000m！」

チエスター・ニミッツ

「・・・分かった、そいつは多分日本軍に新型機だ・・・オアフに残っている戦闘機を全部出せ・・・いや、爆撃機もだ、迎撃に使えそうなやつを全部出せ」

参謀長

「りょ、了解しました！」

司令部からの緊急命令により、オアフに残っている稼働状態にある全ての機体が発進した・・・

## 第三十二話 奇跡の翼・・・N機 出撃ス（後書き）

天嶽

「今回の話は、適当に考えました、航空機の数とかもう適当です、しかもちゃんと計算していません！計算は授業の数学だけで十分です！」

播磨

「なにを言つてゐるのかしら、このダメ作者は」

天嶽

「期末テストが12月2日からあるんだ勘弁してくださいー！」

播磨

「はあ～」

天嶽

「では読者の皆様、次回を会いしましょ～」

播磨

「（）意見、（）感想お待ちしていまーす」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8595n/>

---

新生連合艦隊

2011年11月27日21時40分発行